

當三月中對島守上京仕候ニ付、私儀石城平ニ罷在リ候處、奥羽同盟之儀ニ付、名分順逆ヲ誤リ、家來共奉抗官軍、終ニ磐城封土ヲ失ヒ、何共可奉申上様御座ナク、深ク奉忍入候。伊達陸奥儀ハ、最寄同盟ノ儀ニ付、一ト先ツ仙臺表へ罷越候處、今般仙臺米澤兩藩ヨリ、叡慮ノ程奉傳承、恐懼至極ト奉存候。素ヨリ官軍ニ奉抗候存慮ハ、毛頭御座ナク候へ共、着邑以來へ遠境ノ僻地ニ罷在候ニ付、天下ノ事情モ隔絶仕リ、恐レ多クモ、叡慮ノ程モ共ニ不奉窺、一時ノ行違ヨリ遂ニ今日ノ仕儀ニ立チ至リ候段、退隱ノ身トヘ申シナカラ、指揮不行届故之儀、誠ニ以テ奉恐先非悔悟仕候。隨テ兵器悉ク指上、舊領ニ於テ恭順謹慎罷在、家來末々迄屹度謹慎申付置、朝裁ヲ奉仰度候間、御寬典ノ御處置奉欲願候。右之事件、道路相塞キ候ニ付、對島守承知不仕候へ共、早速申遣候ハ、恐懼至極仕、可奉欲願候。此上ハ幾重ニモ寬大ノ御處置、偏ヘニ歎願候。恐懼謹言。

明治元年九月

安藤鶴翁信正 花押

憐れなる哉、東北逆賊諸藩。西軍の陣門に降りて、城明け渡し、兵器彈藥に至るまで押收となり、猛惡鬼神の士卒も、武を解かれて謹慎蟄居の身。かくて藩主は東京刑法局に罪人たるべく、閉門仰付られたり。次ぎに来るは謀臣の處決なり。藩主、既に敗賊の罪人たり。更に己が家臣を差出して、敢て罪科の囚徒たらしむるとは、これ素より情實の許さざる所なるべしと雖も、天下の大亂を巻き起したる、謀叛の責任の伴ふ所最早詮なきなり。然れば藩主や己に血涙を咽んで、主謀の家臣を指定するなり。然りと雖も、家臣は既に覺悟あり。即ち君に盡す唯死あるのみ。されば今や叛逆の張本人として、自藩を代表し、重き責任を一身に荷負ふは、これ臣たる者の光榮にして、死して又遺憾なしと。悠然として座して荒繩の縛に就く。

今茲に奥羽叛逆同盟の本源地たる、仙臺藩のものを掲げ、以て列藩の一斑

を示す事とすべし。

伊達陸奥 家來

但 木 土 佐

坂 英 力

瀬 上 主 膳

田 邊 寛 吉

赤 坂 幸 太 夫

右御吟味之趣有之東京へ被指出候間締能相圍ミ大州藩へ引渡被申付候條可得其旨様御達有之候事

明治元年十月十二日

參 謀

是に依りて、謀臣は諸藩預りとなりて、禁鋼謹慎、命の降るを待つ久し。

愈吟味となりて、謀臣は如何なる取調なるぞ。今假りに仙臺藩のものに付概言すれば、但木及び坂は(一)奥羽同盟締約の件(二)歎願約書文案起草の件(三)鎮撫使不法取扱の件(四)越後諸藩煽動の件(五)奥羽戦亂顛末を列國人に宣言したる件等なり。その瀬上主膳以下は(一)世良參謀斬殺の件(二)醍郷總參謀郷遭難の件(三)總參謀隨員奥野正玄不法監禁の件(四)隨員野村十良斬殺の件等にて、何れも峻烈嚴重なる取調なるは勿論なり。かくて評定の結果は罪狀最も重き者に對し、左の令書を交付す。右仙臺藩のものに付是を見るに左の如し。

伊達陸奥守家來

但 木 土 佐

坂 英 力

叛逆主謀ニ付死ヲ賜フ

明治二年五月

奥羽の卷——奥羽列藩謝罪顛末

夫れ仙臺藩但木土佐及び坂英力は、共に奥羽同盟の主謀者として、會津庄内庇護の原動力となりたる、最後の責任を負ふに、死を以て是に替ふなり。思ひは義に起つ庇護の赤誠は、人事の總てを盡すも、一念遂に通せず、却つて天運の果報は早くも死別の盃を手にする人となる。豈同情の涙なきを得む、されば右の例に依りて、叛逆の責任者として、列藩より死に就きたる謀首の者を見るに、即ち左の如し。

- 會津藩
- 同
- 同
- 庄内藩
- 桑名藩
- 山形藩
- 盛岡藩
- 村上藩
- 萱野權兵衛
- ▲田中海
- ▲神保内藏介
- 石原倉左衛門
- 森陳明
- 水野三郎左衛門
- 檜山佐渡
- 鳥居三太郎

- 村松藩
- 同
- 米澤藩
- 二本松藩
- 同
- 棚倉藩
- 長岡藩
- 同
- 堀右衛門三郎
- 齋藤安明
- ▲色部長門
- ▲丹羽一學
- ▲丹羽新十郎
- ▲阿部内膳
- ▲河合繼之助
- ▲山本帶刀

右▲印あるは、戦役既に死亡せるも、追刑に依りて、謀主と爲り、而して死を賜ひし例に倣はれたる人々なり。其他結城藩以下諸多ありと雖も是を略すべし。列藩、謀首を内報するに當りて、藩士互に死を争ひし美談あり。會藩につきて是を見れば、いよ／＼謀主密報せむとするや、鬼佐川、憤然として嘆して曰く、萱野氏固より老職の長たり。我其末席を汚すと雖も、元主戦論者の巨魁にして、我藩、事茲に到れるは是皆予が罪の致す所たり。豈に、

萱野國老にのみ死を賜ふて、不肖官兵衛のみ存命するに忍びんや。不肖末席なるも、萱野氏に身代せしめられずんば、一生の不満は死して尙解けずと。頑として座固しと云ふ。

列藩主謀者それ右の如し、今人「俺しが國さで、見せたいものは、昔しや谷風、今伊達模様」とは、仙臺藩の人物蕭條たるを嘆げる歌なる如く。東北に人物なきを云ふ勿れ。若し東北をして薩長の如く、維新の順境に起たしめ見よ、左なくとも、順逆の中庸に置くあらば、英傑も失はず、俊才も發揚するを得たるなれ。逆賊の本源地と睨まれたる彼の會津藩は、人物の總て否な財政産業の總てに至るまで、みな戊辰戦争に亡びたる如く、東北逆賊諸藩の不世出の俊傑も亦、みな戊辰戦争に根絶せるに非らずや。今日閥族打破を説くは末の末にして、明治元年東北諸藩は、既に是を絶叫したるもの。然れども其人は運非なりき。かくて因果應報の條理は、遂に「奥羽朝敵立身不成」の嘆聲を産むに至る。交通上の白河關所は撤廢せられしと雖も、人事産業上の白河關門は今尙堅しと。思ふて茲に至れば、戊辰敗北の餘燼は、東北をして永

久の逆境兒に葬りて、俗説今尙奥羽を朝敵と論じ、汚名を數世に傳ふ。奥羽勤王憂國の士、賊陣に一命を瘞して、体軀今や古骨土魁と化して五十年、戊辰戦争を以て、萬古不滅の碑文と諦め、賊名を以て天爵と心得る外、是を吊ふに何物も無し。西南の謀叛人よく人爵に浴す、何たる幸福者ぞや。

維新の最大疑獄

奥羽の戦場に、白河陥ち、棚倉陥ち、岩城敗れて、二本松も崩れしと雖も會津若松未だ抜けず、仙臺尙遠く、庄内は秋田に迫り、南部頑強にして、奥羽戦争の勝敗さし豫知する能はず、天皇愈東行御親征に就き給ふ頃しも、時は八月、京都には流説紛々として、中川親王の險謀畫策は喧傳せられたり。曰く、中川宮の御使は、密かに關東に忍び、徳川浪人に通じて、不軌を謀ると。路頭愈喧騒を極めて、その紀州藩は既に不軌を謀る、事皆中川宮に通すと。耳語相傳へて飛報は江戸に到り、而して曰く、紀州、水野等中川親王を奉じ、薩長二藩を討伐の畫策ありと。東西瀕々、中川宮を中心として、不穩

の巷噂となりたり。されば一大捜査は中川宮の身邊に當りて、暗々裡に監視を注ぐと共に、一方には眞否糾問と云ふ名目を以て、薩長の巨魁たる岩倉具視の麾下なる、大原重徳卿を勅使と云ふ片書にて、中川宮邸に、膝詰談判を開始したり。大原即ち中川宮に突進するに當りて、一通の書附をば、是を隠謀の證據物件として持参するなり。

惟ふに、中川宮は二條齋敬と共に、徳川の大政返上以來は、専ら謹慎を旨とし、薩長の新政体も千里の遠きに傍觀しつつ、やがて廻り來る時運を待ちて、幽かなる閑日月を暮し越せしもの、されば世事に遠き身の、卒然この噴問を受くるは、全く寢耳に水の觀あるなり。

大原が強制威壓の論議は峻烈を極む。されど隠謀の根跡なき中川宮は、良心に従ひ、正理の命ずる所、大に抗辨する所ありけるが。大原が持参の書附には、既に中川宮の姓名あるのみならず、更に押捺の印影もあるなり。論議は印影の眞否如何に歸着したるを以て、宮も黙し難く、慨然として是を論駁して曰く、然らばその確證を示して、予が責任を明かにせむと。その所謂大

原が、持参の謀叛書附の印影と、宮が日々に使用する實印をば、是を對照せしめて、相違あるを示されき。有繁の大原も事茲に至りて、呆然たり。大原一時は眩惑したれども、左右の言説朦朧に托し、無理を通して遂に巻き込み痛はしくも、不軌の罪名に服さしめたりとかや。而して其後の経過を見れば中川宮は謀叛を理由として、流罪に處せられたるは疑ふ可らず。

兼テ御不審ノ筋アリ、參朝ヲ止メ、謹慎被仰付置候處、近頃不軌ヲ謀リ、徳川慶喜等ニ密使差遣、内應スヘキ陰謀露見ニ及ヒ、勅使ヲ以テ、御糾問相成、無相違旨言上、容易ナラサル所爲甚以テ不届至極ニ付、嚴重ノ御沙汰ニ可被及筈ニ候へ共、格別ノ叡慮ヲ以テ、安藝齋へ御預被仰付候事。

御沙汰書是なり。思ひは幕末の政局に當りて、精意國事に奔走したる中川宮は、謹慎蟄居、暗雲より隠退したる今日此頃や、突然にも不軌の罪名を以

て、安藝藩に檻送せらるゝに至る。當時京都に在りて、よく中川宮の性格を拜承する者(新撰組)、この流罪處分を批評して曰く、これ冤罪なり。中川親王をして、流罪に處すべき事情は、多々理由の在りて存するなり。(一)幕末に於ける公武一和論者として、薩長の激論手段を妨害したる果報なり。(二)新政府は、藩閥を以て獨占したる結果、目前に忌斷すべき危險人物は、多々ある所より、是を除去する精神に於て、親王を貶する必要あり。(三)薩長が愈天下に令するに至るや、共に伏見宮の御生れにして、而かも御兄弟なる、山科宮を奉戴するを以て、政見相反する久邇宮(中川宮)の行く末は頗る不安なり。かゝる所より中川宮を片付けざるべからず。

右は中川宮流罪の根本理由なりとかや。是れ果して事實とせむか。宮の御境遇こそ、氣の毒の至りと云ふべし。蓋し幕末に於ける、公武一和と云ひ、佐幕と云ふはみな當時の政治組織に見て、一個の政見にして、時の天下と其見を同ふしたるもの、さればこれに奔走するは、敢て咎む可きなし。果して然らば、其時代に於ては、激論政策なるものも、同一なる政見論たるに今や

激論黨か、一朝にして自家に權を握りしとして、過去の經歷を現在に律するは斷じて不可なり。慘虐の誹りを免る可らず。その會津追討と云ひ、庄内追討と云ひ、當時に於ける薩長の當路政官は、幾分宿怨を有し、公道を踏むに私心を混入したる嫌なき非ず。

人は云ひり。中川宮の流罪事件は、維新史上の最大疑獄にして、果たして不軌の陰謀ありや、否や、頗る疑問事なるを以て、當時要路の薩長人には、此疑獄事件に付、一應の辨解を欲すと。噫々。

政府の時事

九月奥羽戦亂鎮定より、明治二年己巳三月、蝦夷征伐に至る六ヶ月間に於ける政府の重要時事を摘示すれば左の如し。

九月 慶應を明治と改元し、一世一元を永式と爲す。(二十二日)

イスペインヤ國と條約を締結す。

英國人に囑托して沿岸に燈臺を建設す。

十月 奥羽越戦亂叛逆謀臣仙臺藩但木土佐以下、各藩の謀臣を東京に召還す。(十二日)

天皇東京に臨幸す。(十三日)

征東大總督有栖川宮、東北鎮定に付、錦旗節刀を奉還す。

十一月 奥羽戰亂主盟會津藩主松平肥後守容保父子、并ニ仙臺米澤以下奥羽各藩主を東京に召還す。

輪王寺宮公現法親王、京都伏見宮家に幽閉せらる。

十二月 會津、仙臺、米澤以下、奥羽二十三藩主の死一等を宥し、各藩に幽すると共に、削封以て退隱を命じ、同姓を以て宗家を繼がしむ。英、佛、米、伊、等の海外六ヶ國は、戊辰戰亂鎮定につき、局外中立の令を解く。

中立解除につき、甲鐵艦を米國より引渡さしむ。
天皇、西京に還幸す。

一月(明治二年) 參與横井平四郎、退朝の途路、浪士に殺害せらる。(五日)

薩、長、土、肥の四藩より、藩藉奉還の建議あり。
外國間准知事をして、蝦夷征伐の通牒を發せしむ。

二月 公議所を設け、諸藩士を徴して議員と爲し、政務を議せしむ。
箱根以下諸道の關所を撤廢す。
天皇、東京に臨幸す。
新聞紙の印行を許容す。
磔罪及び火刑を廢す。

三月 待詔院を設け、士庶人の建言を納る。

公卿、諸侯を東京に召集し、政道の基本を諮問する所あり。
蝦夷征伐の西軍品川を發す。

慶應 戊辰 奥羽蝦夷戰亂史 (第三卷)

蝦夷の卷

徳川海軍の品川脱走

新政の不滿と藩閥打破の攻撃は、徳川家臣と奥羽越諸藩に依りて、東北の
天空に兵力を以て絶叫せられたり。然れば是が鎮定にと西軍は錦旗を押し立
て、東山道軍を白河及び平潟より注ぎ、北陸道軍を越後口に起して、更に
北海を航して秋田、弘前に送りて、東北の戦陣愈多端を告ぐるに至りて、明
治元年八月も半ばなり。

徳川慶喜の身の上も、田安家達をして、駿、遠、奥、七十萬石の宗家を繼
がしめ、駿河藩の賜封ありて、七月二十一日慶喜は銚子浦を出帆し、駿府室
臺院に蟄居の身となりて、僅かに二十有餘日、突如として品川沖には、海軍

の脱走事件は起れり。即ち其等軍艦は、過般江戸城明け渡しに際して、徳川海軍副總裁榎本鎌次郎が、絶世の一念を揮つて哀願懇請したるに依り、漸く其領有を特免せられたる徳川軍艦なり。かゝる理由ある徳川の艦隊が、八月十九日の夜暗に乗じ、品川沖の碇泊所より繫留を破りて、何所とも其影を隠すに至りしには、何分突然なる所と、而かも軍艦の脱走なる事とて、民心上下の驚愕なるは勿論にして、家財を纏めて遠く避難せむと、近邑騒然を極む

脱走事件の起るや、軍艦頭たりし榎本和泉守（鎌次郎武揚）は所在を晦まし、永井玄蕃頭は抜け殻となり、更に松平太郎を始め、新撰組、彰義隊の敗士に至るまで、品川の地を拂つて、逃走不在續々、是等の事實に依りて、愈榎本和泉守の所業なるを豫測せらるゝに至る。かくて徳川軍艦奉行勝安房守等には、此度の脱艦につき、榎本の遺書を送り届けられしかば、駿河藩の驚愕こそ、果たして如何ばかりなりけむ。茲に於て、飛脚船を以て、四方に探索する所ありけるも、最早杳として踪跡を見る能はず。駿河藩は事茲に至りて、事件を届出づるより外途無し。

品川沖碇泊罷在候、當家軍艦共、蒸汽、運送船トモ、去十九日夜、何所へ歟去申候。右者、私共ニ於テ進退相違候儀ニハ無之候間、早々行先探索仕、相分リ次第追々申上候様可仕候。且軍艦頭榎本鎌次郎儀、勝安房其外へ宛差越候書面ノ趣ニテハ、都テ悖慢不敬ノ至、殊ニ明分相辨不能在次第、畢竟、私共不行届ヨリ左様立至候段、甚タ以テ奉恐入儀ニ付、猶取調可申上ト奉存候得共、先此段不敢取御届申上候。

八月

駿河藩

平岡丹羽
浅野次郎八
織田和泉
山岡鐵太郎
勝安房

此書を見れば、板本鎌次郎の名あり。それ板本は過般幕命を奉じて、海軍をオランダ國に修めし、本邦無双の海戦王にてありしを以て、さては反亂の所業か、さなくば海賊の所業を働くにや、或は萬一にも開港互市場に出歿して、外國船舶に對して、不法の侵害を企つるには非ざるなきかと、脱艦の所業を疑ふ事頻りなり。されば今や薩長の憂苦とはなりて、その取押ひ方を、四方に布令し、更に脱艦に物を賣る事を禁す。

品川沖碇泊有之候徳川龜之助所持之軍艦、并に蒸汽運送船共都テ八艘、乗組板本鎌次郎以下、去ル十九日夜、品川脱走ニ及候旨、別紙ノ通り（前掲）龜之助重役共ヨリ届出候。元來右船ノ儀、始終品川沖ニ碇泊有之、主人慶喜謹慎ノ意ヲ体シ、猥リニ揚碇仕間敷旨屹度御請申上候處、右等妄動脱走致シ、剩ヘ奉對 天朝悖慢不敬之殘書等致置、全ク反亂之所業難被爲捨置候ニ付、別紙之通（略）、徳川重役

共へ 御沙汰被 仰付候間、各藩領海等へ相廻候ハ、早々注進可有之、自然揚陸等致候ハ、擲取差出可申、若致手向候節ハ、人數ヲ以テ討取不苦候旨、兼テ相心得可申被 仰出候事。但右之趣條約各國へモ夫々御達相成候事

脱走艦名

開陽	回天	蟠龍	千代田
長鯨	美賀保	神速	咸臨

夫れ天下の人心は、奥羽鎮定を以て平安の業是より發すと、其機の到るを待つ程に、突然脱走事件を醸して、人心の靜謐を破りし、板本武揚等が所業こそ、大膽と云ふべし。前述する如く、今回脱走の軍艦は、本來なれば、當然天朝に押收せらるべき筈のものなり、然るを特に開陽以下の分は、徳川に與へられむ事を哀願懇請せる憫狀に、西軍も聽くに忍びず、特別の御詮議を以て、止むなく不二山艦以下四隻のみを收め、其餘は猥りに揚碇せざる事の

條件を附し、以て徳川に所有を許可したるものにてありき。然るを何ぞや、當時の哀訴人たりし榎本が、自ら是を指揮採配して、脱走を果斷したるとは、然らば其初め開陽以下を惜しむに、全力を注ぎし心情を推察せば、唯だ々宗家の爲め、徳川の爲めとの故には非ずして、全く後日の謀計に供するの手段なりしことは、最早疑ふの餘地なきなり。さるにても、軍艦の運用を知らざりし西郷の弱點に付け込み、哀察を惠ませたる榎本の手段こそ、痛快と云ふべし。

品海の脱走、それ軍艦の逃亡か、將た又榎本の奪走か、今や暗々たる疑雲の中に、行く先き何所、如何なる所業を醸すやら、是が向後の懸案となりて天下萬人の疑惑を一身に集むるも、誠に其處と云ふべし。

品海脱走の本意

徳川海軍を脱走せしめたるは、疑ふべくもなく榎本武揚の所業なり。元來榎本は、軍艦奉行勝安房と共に、慶喜の麾下として、徳川の海權を總督する

所にして、方今の時局に處し、薩長の所業を望み見ては、血湧き、肉躍りて慨然として胸中騒々たる所とは雖も、身は素より徳川の麾下として、主君の身の上確定せざる間は、宗家の安危今や不安と不憫に、後足曳かるゝ心地して、意中の活躍も黙々の裡に憂苦を忍びつゝ、薩長とも附かず、佐幕とも附かずして、歩騎砲の幕府三兵隊、新撰組、彰義隊の敗士を始め、諸多浪人を統轄鎮撫して品總の間に浮動し、而して來るべき時運を待ちつゝ、先年注文の甲鐵艦、米人の末だ政府に引渡前に、是を横奪せんと待つもの。

然るに徳川宗家も、今や駿遠奥七十萬石として、駿河藩の賜封あり。素より大將軍の破落としては、案外寡少の處遇なるべしと雖も、宗家を維持するには餘りあり。されど宗家の立場も愈確定したるも、今日まで養ひ來りし家臣幾十萬の運命は、向後如何に成り行くか、其豫測する能はざる所に、杞憂は交々湧き出でたり。徳川歴代家臣の處分は、榎本をして熟慮せしめ、甲鐵艦の失望は、斷行の期と爲り、茲に於て、榎本は驟然宗家と絶縁し、駿河藩脱人として、身は無責任なる天下の浪人となりて、以て向來如何なる所業を

起すも、斷然宗家には迷惑を掛けじと、即ち後顧の慮を絶ちて、愈天下浪人を率ゐて奥羽に呼應し、大に薩長と雌雄を決せむとするにあり。品海脱走の所以茲にあり。嗚呼、美ならずや、板本の高潔なる志氣。

品海の脱艦、天下幾多の浪人を引き連れて北走するや。同志相需むる法則に背かず、下總の浪人林昌之助、己れ請西藩主たる身分を捨て、領邑一萬石の封地にノシを付けて、薩長の天下に差出すと云はぬばかりに、是を返上し一禪赤裸々の一個人となりて、徒黨を率ゐて來り投するあり。かくて關東海岸の警戒を遁れて、いよ／＼大同團結して、蝦夷割據を計るにありしが、途中艦船に損傷生じ、是れが修理のため、仙臺沿岸に着陸して、暫し奥羽の形勢を望み、憤然白石軍事局に罷り出て、作戰計略につき談判する頗る猛烈なり。曰く、藩士己が扶持ある恩城を惜むは、これ武士たるもの、通情なり、須く城を破壊して兵を動かさざる可らず。若し左なくば、兵を異郷に移して抗すべし。思ふに、大地帯に亘るの戦争に於ては、命令の統一は、努めて重大なるものとす。今日の戦争に諸藩連合するも、これ唯だ一片の申合に過ぎ

ず、然らば輪王寺宮様を、奥羽の軍務の總裁に仰ぎ、白石陣所を以て、各口々の軍令所と定め、進退を一命に従はしむるあらば、奴輩を屠る難きに非ずと。然れども此議は、時期既に遅く、奥羽軍の頽勢も最早詮なし。依て更に策を建て、仙臺藩の防戦を論じ、而して坂英力、但木土佐等と共に、臨終決戦を巻き起さんとするにあり。

然れども此時に至りて、奥羽降順謝罪の風潮は、長速力を以て列藩を靡かせ、その首腦地たる仙臺藩に於けるや、駒ヶ峯對陣伊州藩より奇想天外然に密使の到來と爲りて、仙藩士遠藤文七郎なる者、専ら細工人となりて、獨斷にも伊州宇和島藩の密使を接授するに至る。元來宇和島藩は、伊豫の雄藩にして、藩祖は仙藩の高祖伊達正宗の長子秀宗なり。秀宗は陸奥柴田郡村田民部宗殖の居城にて誕生し、此關係より藩祖父子の縁に繋ぎ、切に謝罪の實行を以て、降服を勸告するにあり。茲に於て、文七郎は竊かに策計し、それを藩主に轉嫁して非戦論を提唱し、而して城内に臨むに至りて、伊達將監、葺名參政、大内主水、笠原中務等の有力なる同意論蜂起し、威勢甚だ有力なる

形勢となる。されば主戦論者は、これに抗争すること猛烈なりけるも、遂に敗れて仙臺藩は謝罪に決す。

此間に於て、奥羽戦場の落武者は、伍々として仙臺に群がり来る。大島圭介あり、其黨既に千數百人。徳川陸軍を始め諸多脱人數千人。更に仙臺主戦論の殘骸星尙太郎の一軍、額兵隊を先鋒として千余人。今や鹽釜、石巻を始めとし、仙臺海岸は殘黨潮の如く、或は來り、或は去りつ、右往左行迷路の風情にあるは、皆臨終快戦の配陣を待つもの。然るに仙臺藩の降服は、俄然として城外に漏れ渡りて、浪人の愕動は言語に絶し、悲憤慷慨大息を吐きつゝ、そゞろ異郷に飄然たる浪人の身の上を案じ、今や郷土に就くの顔も無き事とて、尙も仙臺に踏み止つて浪々。

脱藩軍團の蝦夷侵略

〔一〕蝦夷地割據の約盟

仙臺藩の降順に續えて、臨終戦の不能は來りぬ。然らば榎本武揚の果斷は

如何、思ひは已れ此黒幕となり、主謀者となりて、群がる徒黨を望み見ては、豈慨然たらざるを得ざるなり。脱藩の浪人、事茲に至りて、薩長の天下に最早身の容るべき地なしとて、悄悄沈々嘆聲熱腸より發す。夫れ或は然らむ。時に海上の黒船會議は開かる。開陽艦上の秘密會議、これには榎本武揚を座長に小笠原壹岐守、松平定敬、大島圭介、松平太郎、土方歳三、荒井郁之助、永井玄蕃頭等の脱人巨頭、今や論議汲々として、浪人救済の善後策なりかくて黒船會議は論議一決して曰く、我等脱藩殘黨の一團は、愈所期の蝦夷地割據を斷行するに如かしと。而して萬丈の氣を吐いて浪徒に臨むらく、よし奥羽大敗にありと雖も、榎本がオランダに修めし海事の兵法は、この亂麻に活用して天下の耳目を破らむ、然らば大島及び土方は陸軍を動かし、榎本の海軍と共に蝦夷地に據らむか、海陸の權力を握りて、彼地を掌中に收むる難きに非ず、然らば何ぞ薩長の天下に屈服するの要あらむやと。茲に於て、天下無類の大望は、浪人結束して、大膽なる約盟は成りたり。

賊臣、天下ニ横行シテ豪慢無禮、吾等ヲ目シテ夷狄ト爲シ、賊名ヲ以テ、叡慮ノ恩惠ニ阻隔シ、奴隸以テ飢餓自滅ヲ計ルヤ必セリ。願レハ吾等ハ徳川ノ餘惠ニ榮華ヲ受ケ、一族家臣擧クテ家名ヲ維持シタル士族ナリ、吾等浪人國ヲ脱シテ主ナク、郷ヲ脱シテ土ナク、郷家ハ將ニ賊臣ノ手ニ落去セリ。今日賊臣ノ配下ニ在リテ、食スルニ最早一粒ノ糧米ナシ、何ヲ以テカ爾後ノ餘命ヲ支エンヤ。吾等是ニ見テ大同團結シ、愈本土ニ永別シテ、暫ク蝦夷地ニ身ヲ忍ハセ、未開ヲ拓キ、不毛ヲ耕シテ、生計ノ道ヲ立テ、天下幾萬脱藩同志相提携シテ、母國ヲ造リテ富強ヲ計ルニ、賊臣慘虐ノ手ヨリ脱退スルニ如カス。

然ラハ是ニ賛スル義約ノ士族ハ、一身同体蝦夷地ヲ警備シ、賊臣ヲ誅シ、君側ヲ清メテ、皇恩ノ難有キニ盡忠奉公ノ寸志ヲ貫カントス

明治元年九月二十七日

約書是なり。如何に慘虐の薩長なりとて、浪人自滅を計るが如きは是なかるべしと雖も、賊名の下に皇恩の惠澤に阻隔せらるべしとの、浪人が臆側する憂苦こそ、當時に在りては或は然らむ。浪士、母國に永別して更に第二の母國を造り、脱人協同和心を計りて、蝦夷地を保たむとする風情こそ、大に同情すべき點ならずや。

かくて約盟は成りて、糧食薪炭の準備全きに至りて、明くれば九月二十八日、此日より海洋の船壘に乗り始め、沿岸巡航登乗漏れなく收めて、十月九日は暮れたり。天、曉を報すれば十日、仙領廣田濱に於て千秋丸を奪掠し、恨みたくまる敗兵を收めたる八艘の艦隊は、轟々として汽笛相應じ、黒煙高く奥羽の空を焦しつゝ、怒濤を蹴つて北進するも勇ましく、また快と云ふべし。

脱艦北航して金華山沖に到る。適々オランダ國商船の横濱に向ふあり。榎本即ち津田真一郎(榎本と共に留學し法政學を修む)をして、往いて奉告書を依頼せしむ。

臣等、謹ンテ志ノアル所ヲ述ヘ、大官ノ待遇ヲ特ミテ、裁可ヲ乞ハ
ントスルモノアリ。

思フニ徳川家削封セラレシヨリ以來、徳川ノ餘惠ニ榮華ヲ受ケシ、
恩願譜代幾萬ノ家臣モ、國ヲ脱シテ今ヤ主ナク、諸國ニ漂泊ノ徒數
萬人。而カモ王政一新ノ聖代ニ至リテ、賊名ノ下ニ吾カ身ヲ容ル、
ノ地ナシ。然ラハ既ニ餓死セムトスルモノ、餘命ヲ支ヘントスルモ
ノ、遂ニ盜殺ヲ是レ事トスルニ至ヤ保シ難シ、斯クテハ農商ノ民業
ニ害ヲ及ボスニ至ル。是レ本懷ナラザル所ナリ。
然ラハ臣等ニ潔ク未開不毛ノ蝦夷地ヲ與ヘ給ヒナハ、臣等彼地ニ渡
リテ、是ヲ救フニ吞ナランヤ。願クハ夫レ是ヲ諒シ給ヘ。謹言

明治元年十月十日

徳川陸海軍總督 榎 本 謙 次 郎

大政大臣三條實美閣下

十月十三日は、早くも南部鉄ヶ崎港(宮古灣ナリ)に達したり。脱艦、南部脱人を
收容して、兵糧薪炭を船積して、意氣益々高く、此所に軍議を開きて曰く、
蝦夷地は眼前に迫れり、されば我軍の上陸は極秘を旨とすべき所。夫れ彼地
たるや、帝國開拓使清水谷待從郷の管領する所にして、函館を去る一里の地
に、五稜郭なる城郭あり。此所は即ち其本營なり。然れば函館は直轄地なる
を以て、嚴備を盡しあるは勿論なり。我軍函館上陸は危険なるを以て、是よ
り彼地の東岸に進み、函館を去る十八里、鷲ノ木港に據らむと。全軍滯泊六
日間、十月二十日、愈鐵ヶ崎を發し、急走して翌二十一日鷲ノ木沿岸に達す。
依て旗艦開陽は三發の號砲を放つて、總軍の無事を祝す。西風甚だしく吹き
來つて、砲聲陸岸に通せず。此間に於て、脱軍は鷲ノ木に上陸するに至る。

〔二〕脱藩軍の蝦夷侵略戦

蝦夷の十月は冷氣滿ちて、萬山既に葉は落ちたり。細雨肅々二十一日未明
より降り起す雨路を辿りて、脱軍は進撃を開始す。人見勝太郎、本田幸七郎

は、榎本の命に依り、蝦夷國開拓使清水谷公に、來意を述べんと、守兵三十人を率ゐて、五稜郭に向ひ、大鳥圭介は、大川正太郎、瀧川充太郎等を従ひて、函館に進撃し、土方歳三は、春日左衛門、星忠狂等を従ひて、川吸峠を進んで、等して函館に向ふ。

十月二十二日、人見勝太郎等は、いよ／＼大野村に到れば、弘前藩を先鋒とせる蝦夷の守備兵は、突如として來り是を襲ふ。砲聲ほのかに轟き、早くも大鳥圭介の耳に傳はれば、急ぎ是を援け、弘軍を撃つて是を走らす。さる程に、土方歳三の一軍は、更に池田大隅守の彰義隊を加へて、七重濱に疾風迅雷す。されど此所は五稜郭本營の要害地とて、秋田、弘前、小倉、松前、福山の諸軍の虎視を張る所、守備嚴として動かす、砲戰數時に亘るも、土方遂に抜く能はず。さる程に、西軍の突撃起りて、土方、將に悲鳴を擧げんとす。此時に當りて、隊長大岡甲次郎、會津遊撃隊長諏訪常吉等は、三十人の抜刀士と共に、敵中に亂入するに至れば、其餘の兵は意氣大に振ひ、みな勇み勇んで奮撃突戰。西軍、遂に僻易して函館に逃げ來る。茲に於て、開拓使

函館府知事は、普露西國の蒸汽船に乗つて、逸早く弘前に遁れ、其餘の諸軍は、總指揮官井上岩見と共に、英國汽船に乗つて、みな青森に走れり。而して函館府判事堀直五郎は、東京に急行して、蝦夷國の事變を報するにあり。脱軍、函館を領し、五稜郭を検閲して、こゝに總軍を駐屯し、同時に松前藩の降服人櫻井恕三郎と云ふ者を使者と爲し、書を松前藩に送つて、和親を講せんとす。然るに松前藩に於けるや、事もあるべきに、降服人を使者に使役するは、一も二も無く我松前藩の家柄を侮辱したるものと爲し、一撃の下に櫻井を殺し、而して戦備を整ひて、態度頗る猛然たるものあり。されば變報に依りて、脱軍も大に怒り、然る上は兵力を以て、是非を決する所なかる可らずと。開陽、神速、蟠龍の諸艦を、白津洋より松前に向はしめ、更に陸軍は二十八日を以て、いよ／＼五稜郭を發し、十一月一日には、早くも尻内に進みて、こゝに松前兵と接戦起り、烈戰奮闘、遂に松軍を碎きて、進撃益々急なり。

十一月二日、松軍は福島川を挾んで、戦守いよ／＼嚴なり。茲に於て、脱

軍は兵を二手に分ち、一擧して福島に逼る。松軍堅固殊守して戦ひけるが、大島圭介の一軍は早くも川を渡り、関を擧げて横背より迫るに至りて、松軍遂に防ぐ能はず、土崩瓦解となりて敗走したり。時に脱軍海軍蟠龍は既に松前沖合に達し、巨門を發して城に迫る。惟ふに松前城は海岸に築かれ、灣中暗礁多くして、航行甚だ危嶮なるのみならず、降雪の季となれば、風濤激しく、艦船は絶對に近寄り難く、其の上此所には六個の堅固なる砲臺あり。されば松軍は蝦夷軍艦の入港を望み見て、臺場并ひに林中の大砲を一齊に發し、防戦甚だ頑強なり。蝦夷艦、縦横に航行し、榴彈を放つて、接戦奮闘する程に、夕暮となるに及んで、松軍の砲臺より打ち出す二十四斤彈、見る見る開陽艦の舳に當つて、右舷より左舷に貫く。蝦夷艦、接戦その不利なるに至りて、遙かの沖に走り去る。

十一月五日、蝦夷艦隊は福島灣に現はれ、陸岸に向つて、沿岸砲撃を爲すこと猛烈。此間に於て、大島圭介は、福島野越を進んで、大砲を法華寺内に並列し、城郭を目掛けて連撃す。さる程に、土方歳三は猛進して、大手、搦

手の兩門に迫り、一擧して是を破れば、松軍、門内に是を防ぐに堅守奮闘、血戦慘を極めて、勝敗尙決せず。時に松前藩主松前志摩守徳廣は、難を江差に避け居たりけるが、松前家老田村量吉、防戦その抜く可らざるを見て、火を城郭に放ち、而して自殺するに至る。藩士安田拙三、同志數十人と語り、藩主を竊かに奪つて、事を擧げんとするや、城兵早くも是を感知し、鈴木織太郎、田崎東等をして、拙三父子を殺すに至りて、忽ち城内には騒動起り、陣中の混雜云ふへからず。脱軍、機に乗じ、大呼猛突して斬り入り、遂に城兵を撃つて走らせ、城、遂に奪ふ。

脱軍、松前に滞在すること六日間、其間隊士を休養して、威武大に擧がり十二日未明、いよ／＼福山を出發し、江良町に泊す。十三日小砂子まで兵を進めて宿陣し、十四日小砂子を發して、いよ／＼江刺進撃に移る。澁澤誠一郎及び星忠狂等先軍を督して、大瀧の驛邑を通過せむとすれば、適々松軍の大勢は要害を保ちて、巨彈を突發して大に是を攻む。脱軍先鋒狼狽して戦守を捨つれば、松軍、一勝に乗じて尾撃猛烈なり。さる程に、脱軍本軍は來り

て、茲に反撃陣を起し、疾風迅雷して猛進す。松軍、頑強に戦ふ所ありけるが、勢力非なるを見て江差に退却す。依て脱軍は石崎に宿陣し、翌十五日上ノ國に通る。折しも蝦夷艦隊は荒井郁之助に督せられ、海上より江差を砲撃すれば、陸上更に一發の應砲も無し。脱軍、是を怪しみて上陸すれば、松軍の殘壘のみ存する外、更に一人の守兵も無きに、凱歌を擧げて此所を占領したりけり。

十一月十五日、人見勝太郎、稻倉石關に進めば、松軍高きに在りて、巨門を以て連撃し、威勢甚だ熾ん也。土方歳三、砲聲を聞きて、小砂子より急馳し、一舉して此所を抜きて、いよく館の塞に迫る。松軍、城門を閉ざして郭内より猛撃すること甚だし。脱士越智一朔、伊奈誠一郎等は裸体となりて門下を潜り、矢庭に城門を開いて、味方を大呼すること屢々、土方、是を見て募入し、激戦亂闘、血戦陣に猛勇を揮つて、遂に此所を破る。

十一月十六日、脱軍江差を發し、大呼猛突して蛾虫村に迫れば、松軍の防戦最早持久の力無く、見る／＼戦守を解きて潰え去る。茲に於て、脱軍は蛾

虫村に寡勢を止め、其餘は鶉村に野營して虎視を張る。時に夜半に起る砲聲は、霹靂迅雷して電光石火、松軍の夜襲は三道陣を以て、愈蛾虫村に攻め寄せ來る。脱軍堅固守死して是を防がんとせど、百雷の襲撃に敵す可らず、見る／＼陣を捨て、鶉村に通れ去る。敗報、鶉村の本陣に達せば、脱軍愕動總起して來り是を攻め、烈戦遂に松軍を斬り崩し、而して熊石方面に撃退す。脱軍、鼓聲堂々関高く、かくて十九日となりて、夜半に此所を發足し、乙部村を經由して海岸筋を進撃するに決す。

十一月二十日、脱軍、泊川に達せども、天地は尙深夜なり。茲に於て、大鳥圭介、人見勝太郎、池田大隅守、林昌之助等は山手に間道して、市見川上流に進み、更に迂回してホンモシリ岬一帯の地を保ち、而して熊石に於ける松軍の退路を扼して待つ。二十一日、天、漸く曉を報す。板本鎌次郎、土方歳三、松平太郎、永井玄蕃頭等は本道より進みて、愈熊石の砲撃を開始す。松軍奮闘百砲を發して是を防ぎ戦ひ、兩軍の接戦酣となるに至りて、大鳥圭介等は後背より突入し、馬首肉迫捲土重來す。依て松軍の狼狽は遂に塵戦苦

闘して、進退これ谷まり、先を競つてみな海岸に吐き出され、藩主松前徳廣は、日和船三隻を徴發し、萬難を犯して漸く三百の殘兵を收め、海を遁れて津輕青森に急走するに至る。敗軍避難の道中に當りて、藩主松前侯は病を發し、三厩に於て遂に病死せりと云ふ。茲に於て、脱軍は蝦夷領權を得たるを以て、海陸兩軍呼應して祝砲を發す。夜に入りて暴風あり。海大に荒れ、怒濤山を爲して、陸地深く浪は侵入するに至る。されば沖合の松前藩敗散の孤舟こそ、航行如何に困難なるを推知すべし。依て蝦軍艦隊は開陽、神速の二艦を送りて、松軍退却の萬一災難を助けしめむとす。然れども此時既に沖遠く、杳として其踪跡を見ざるに、二艦は歸航す。かくて二十三日より雨あり二十四日となりて、愈暴風雨は襲來し、怒濤は囂々として海陸に鳴り、大浪山を爲し天地悽然たり。此間に於て、蝦夷開陽、神速の二艦は、岩礁に碎けて沈没したり。開陽は當時に於ける日本一等の戦闘艦なりと云ふ。かくて脱軍は愈所期の目的成りたるを以て、榎本鎌次郎は本土に布令して曰く、「松前藩士にして、主公と共にせむとする者は、津輕に隨徒すべし、滯

留して農商に従事せむとするもの、又は我軍藉に入らむと欲する者は其旨願出すへし」と。茲に於て、津輕行きの者二百人、他は各望みに委かせて、蝦夷の經營を急ぐに至る。

十二月一日、總軍は歸路に就き、十二日福山に到る。十三日出發、十六日有川に着し、滯留五日。仙臺領兵隊を蝦夷守護隊と改稱し、大野村を屯營地とす。依て其他は五稜郭に收めて、愈蝦夷經營の策を講ずるにあり。

蝦夷脱藩政廳

〔一〕五稜郭

抑も五稜郭は、幕末政局多端の折に臨みて、露國人を始め、外夷漸く吾が日本を窺ふに至りて、その北邊を侵略するの慮ある所より、徳川幕府は是に視る所ありて、蝦夷を統轄すると共に、外夷の來襲に備ふる爲め、一要塞を築造して、此所を以て北邊鎮護の府と爲すにありき。されば函館には奉行所を置き、その本營とするに函館を去る一里、龜田村の地に要塞を設置すべく

安政二年工を起して以來、星霜實に三年、元治元年に至りて漸く成る。其間巨大の費用と無限の心血を注ぎて、至重至要の堡壘として設備を盡す所たり。然ればその目的たるや、既に内治と國防にあるを以て、築工經營は幕府直轄にして、内地に於ける列藩城郭とは同一に論ず可きに非ず。

今其設備等に付き、是が解説を見るに、本郭は要塞の形狀五稜なるを以て遂に其名ありと云ふ。而して五稜郭の所在地一帯は、一の小丘たに無き所謂函館平野にして、如斯平坦なる地面に本郭は築かれありて、半徑僅かに百四十間に過ぎざる要塞なれば、要塞として宏大とは云ふべからざるも、其要部とする掩推は、凡て石垣を以て築積し、其上には横障を附設し在りて、砲座凡て百十九、石垣の高さは水面より一丈五尺、石垣の直下には細き空濠を設けあり。更に石垣の輪郭を掾とるに小掩堆を設けたり。更に本郭を圍むに巾十五間の外濠あり、溝濠水満々として湛へ。その外側口には小銃射撃の用に供する爲め、低き小掩堆を設けあり。防備用としては、至れり盡せりと云ふべく、かゝる要塞を海上より望觀を避くるが爲め、鬱蒼たる松林及び雜木を

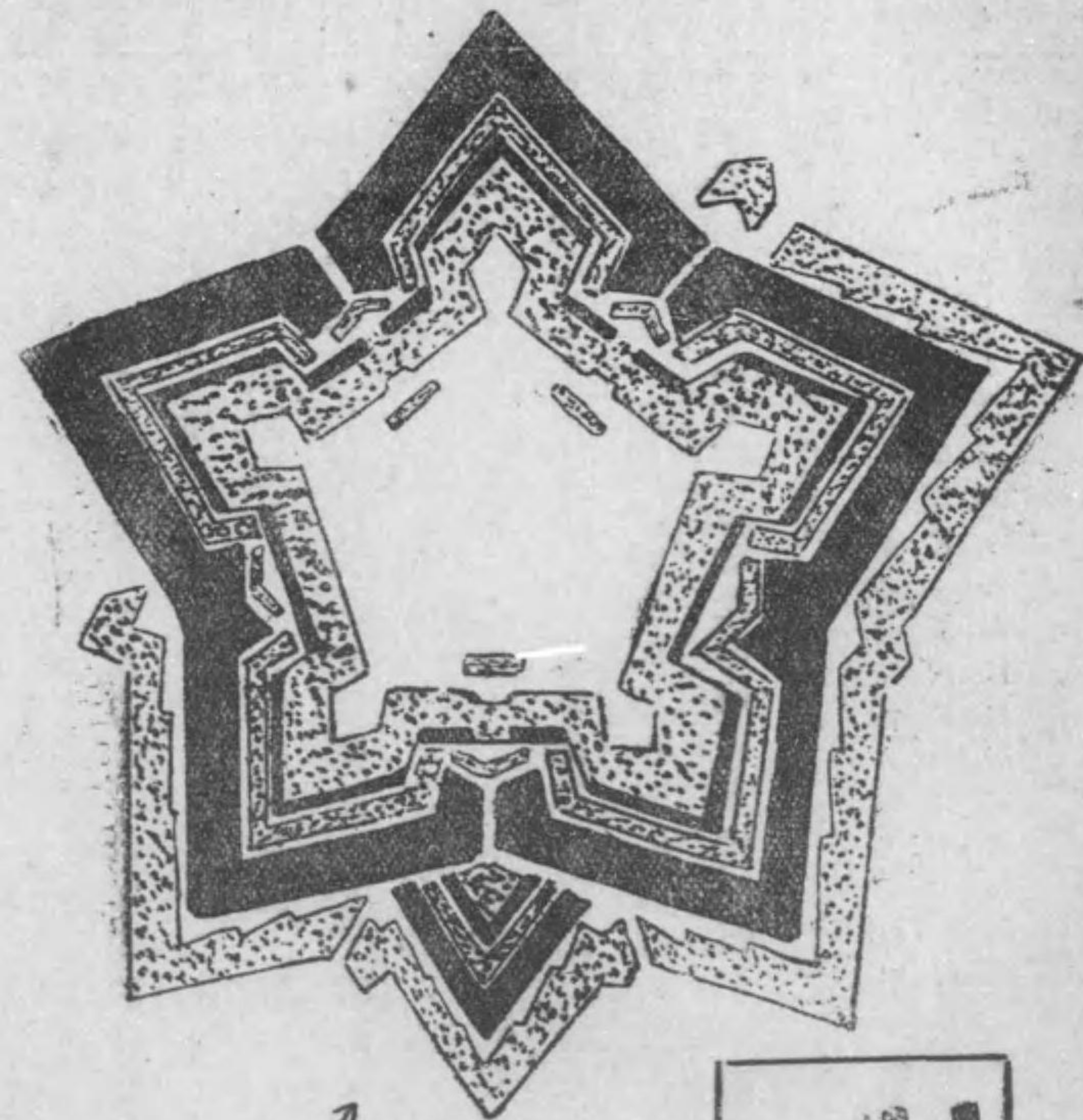
以て周圍を圍むものとする。

以上の設備に依りて保つ五稜郭は、王政維新と共に國家の管下と爲りたれど、其施設は以前に變らず。帝國の蝦夷開拓使は此所に置かれ、無盡藏なる本土の富源を開くと共に、國防用兵の爲め守護隊を置く所たり。清水谷待從卿、蝦夷開拓使にして、井上岩見、即ち守護隊長たり。明治元年秋十月までの無事平穩、今更脱藩浪人軍の手に侵さるゝとは、有繁に夢にだも想像する所には非らざりしなるべし。さわ云ふもの、板本鎌次郎が天下浪人を引連れて、此地に據るに至りし所以のもの、豈單純なる反亂の料見には非ずして幕府積年の行腦みたる北邊の國防と蝦夷開拓の國家問題に立脚して、五稜郭築造の本來の意義精神に因みて、身を此の地に寄せ、而して徳川不平浪人を鎮撫すると共に、兼ねては帝國北邊の國防を引き受けむとの目算に外ならず。

〔編者曰く〕平坦なる廣野の堡壘、石垣の疊々たる築工、砲座の配置より、射撃掩地の附設の如きは、是れ日本築城史上最近世的にして、西洋築城法は、此邊より傳來したるには非らざるなきか。吾人は史學家の御高説を欲するものなり。

五稜郭ノ平面圖

(六千分一)



溝濠
掩堆
大手門内ノ圖
ハ惡水拔キ

大手門

二六

本郭の造營に當りしものは、武田斐三郎成章と云ふ人なり。今その履歷を概言すれば、安政元年正月、初めて蝦夷地に出張を命ぜられ、幕命に依りて種々の調査を遂げ、本土の海外防禦及び砲臺要塞の築造并に航海測量等の緊要を認め、是を幕府に建言して大に時事を論ず。依て幕府は武田に命じて、辨天臺場及び五稜郭の造營を管掌せしむる所ありき。此人安政六年に至り、函館丸の船長と爲り、初めて日本海を航行し、而して内地と本土との海運業を開き、物産の交易に貢獻する所大なり。文久元年四月、龜田丸の長と爲りて、黒龍江を過りて、ニコラスキーに達す。これ我國が外國の手を借りずして、海外に航行したる嚆矢とす。後砲兵頭と爲り、明治政府の兵部省に出仕し、大佐に昇進し、明治十二年一月二十八日、遂に病を得て死す

〔二〕 蝦夷國の行政組織

蝦夷地の領權、脱藩軍團の手に落ちて、北國の形勢いよ／＼逆轉し來る。茲に於て、脱藩は往時に於ける幕府の北邊政策に因みて、對外國防と蝦夷開拓の本質に基きて、五稜郭を以て蝦夷總統府と爲すにあり。依て是より王政維新の逆境兒を本土に移し、内地の明治薩長政廳より獨立して、大に所信を

發揚する所無かる可らず。然らば脱藩軍團の施政こそ、果たして奈何なる事を爲すべきぞ。

依之看是、脱藩軍團の先決問題は、蝦夷領權の宣言に在るものにして、左の布告書は、對外政策の基礎を造るの用を爲すもの也。

我等兼而希望致候通、軍務俗務ニ至ル迄、悉ク規則ヲ正スルニ至レリ。函館松前并ニ「をるかいのへい」ヨリ北方ニ連リ候土地ハ悉ク鎮定シ土地ノ惡弊ヲ除キ、ぼりちりきノ邦ヲ退ケ、以テ此地ニ善業ヲ顯シ、土民ヲ説諭シテ安業セシメ候處、土人ニ至迄、能ク此義ヲ覺リ知リ、旅行出來スヘキノ季候ニ至ラハ、必ス來ツテ我等ニ對面致度旨、土人ノ長ヨリ申越候。是全我等ノ化ニ服シ、人々自ラ業ニ安スルノ一證ト被存候。我等已ニ全藩中ヨリ人選シ、要ナル場所々々ニハ鎮臺ヲ任シタリ、此全島中ニ來レル我同藩中、入札ヲ以テ(今日ノ選舉ノ事ヲ指ス也)尤達才ナル者ヲ選舉シ總裁ト爲シ、君等ニ報告セントス。

我等既ニ我

皇帝陛下ニ請シ、徳川家血縁ノ中、一人ノ君ヲ此全島中ノ大總督ニ奉ラシム事我等カ待トコロ也。

我等、此全島ヲ平定シ、でふあくどト被致候ヲ以テ、西洋第一月二十七日、當港砲臺ニ於テ、祝砲一百一發ヲ爲サント取極タリ、我等既ニ當港住居ノ日本商民ニハ、右砲發ノ事告知致候間、君等配下ノ商民モ、此義可然報告セラレン事ヲ願フ。

十二月十四日 (明治元年)

蝦夷全島鎮臺ニ代テ

海軍總裁 榎本 謙次郎
陸軍總裁 松平 太郎

本書ハ、函館在留佛國公使エスクワイル以下、列國公使に對して宛てたるもの。されば蝦夷地行政の爲には、大總督として徳川の血脈者を推すか、これ其大眼目にして、純然たる總督政治を理想とするものとす。而して其政策

の大綱を見るに、軍務、司法、民政、開拓の四局を設置し、是が總務の長官は。米國式選舉の制度に倣ひ、投票を以て組織を定む。元來、吾國に於て選舉投票制度を施行したるは、實に後年の御話しに屬すと雖も、脱藩軍團には既に明治元年に採用せられつゝあり。是等は何れも板本鎌次郎の發案にして、當時の智識階級に通じて、思想は誠にハイカラと云ふべき也。今その内部組織を見るに、大略左の如き顔觸れなり。

蝦夷總督 (舊徳川海軍總裁) 板本 鎌次郎

蝦夷副總督 (舊徳川陸軍總裁) 松平 太郎

陸軍總裁 陸軍奉行 大鳥 圭介

同 陸軍奉行並 土方 歳三

海軍總裁 海軍奉行 荒井 郁之助

司法總裁 土方 歳三

開拓總裁 (元玄蕃頭) 永井 尙志

函館奉行兼函館市中取締 永井 尙志

陸海軍裁判局頭取 (丹後守) 竹中 春山

松前奉行 人見 勝太郎

江差奉行 松岡 四郎次郎

軍事奉行 林 昌之助

開拓奉行 澤 太郎左衛門

會計奉行 板本 對島守

同 同 川村 錄四郎

裁判奉行 同 津田 眞一郎

同 同 今井 信郎

器械奉行 同 菰田 元治

辨天臺場頭 同 宮重 一之助

蝦夷の卷——蝦夷脱藩政廳

(増補) 三〇ノ一

同 同 同 同 同 同 陸軍教師 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 佛 國人

堀 佐 忠 宮 大 安 安 大 宮 忠 佐 堀
久 内 久 路 野 野 野 野 野 野
間 次 次 仙 右 右 右 右 右
之 佛 佛 之 之 之 之 之 之
助 二 三 助 仲 助 助 助 助 助

同 同 同 陸軍奉行添役 同 同 同 同 同 陸軍總參軍 參軍 函館奉行所陸軍頭 辨天臺場陸軍局頭

池田大隅守 大川正次郎 島山五郎七郎 永井夔伸介 天野信太郎 梶原雄之助 小芝長之助 津田真一郎 大島寅雄 澁澤誠一郎 金成善左衛門 相馬主計 收野主計

傳習隊長 (四〇〇人)
 衝鋒隊長 (五〇〇人)
 遊撃隊長 (三〇〇人)
 士官隊長 (二〇〇人)
 陸軍隊長 (三五〇人)
 歩兵隊長 (三〇〇人)
 小彰義隊長 (二五〇人)
 守護隊長 (三〇〇人)
 彰義隊長 (三〇〇人)
 新撰組長 (二五〇人)
 神木隊長 (二〇〇人)
 會津遊撃隊長 (一五〇人)
 杜陸隊長 (一二〇人)
 護送隊長 (五〇人)

本 田 幸 七 郎
 古 屋 作 左 衛 門
 伊 庭 八 郎
 瀧 川 充 太 郎
 春 日 左 衛 門
 三 木 軍 司
 澁 澤 誠 一 郎
 星 岡 太 郎
 池 田 大 隅 守
 相 馬 主 計
 酒 井 良 介
 諏 訪 常 吉
 伊 藤 善 次
 山 瀬 主 馬

砲兵隊長
 工兵隊長 (二五〇人)

關 廣 右 衛 門
 吉 澤 勇 四 郎

海軍奉行

開陽艦長
 回天艦長
 蟠龍艦長
 千代田艦長
 二番回天艦長
 長鯨艦長
 神速艦長

荒 井 郁 之 助
 甲 賀 源 吉
 松 岡 磐 吉
 森 本 弘 策
 小 笠 原 賢 三
 喰 代 和 三 郎
 根 津 勢 吉

軍艦役

同 同

松 平 五 左 衛 門
 永 井 久 次 郎
 市 川 真 太 郎

同 同

矢 作 平 三 郎
新 宮 勇

三四

一、幕府閣老小笠原壹岐守、桑名藩主京都所司代松平定敬等は、蝦夷軍の客將否顧問となりて、五稜郭の謀議に干與する也。されど戦争半ばにして、藩より呼び戻されしと云ふ。

一、右之外、見國隊長二ノ關源治の一軍加はるなり。

一、陸軍參軍永井夔伸介は、戊辰戦争越後口柴崎の役に於て、七月二十五日を以て、戦死したりとの説は誤りなるべし。

蝦夷行政の内部は、夫れ右の如し。されば五稜郭を初め、函館市中の臺場及び江差方面の要害に至るまで、大に戦守の陣を圍むる必要あるは勿論、殊に辨天臺場、千代ヶ岡、富川臺場等は、戰略上重要な地點なるを以て、一層の嚴備をつくすにあり。蓋し蝦夷軍（脱藩浪人軍を改名）の目下の急務は、

軍事にあるを以てなり。各隊戦闘の教練は佛國人によりて研磨し、北國の政務俄かに多端を告ぐ。

〔三〕蝦夷立國の奏聞と通牒

蝦夷行政の組織成りて、内務の基礎固まるや。即ち本土保全の實を擧ぐるに、是より大に浪人を移し、以て脱藩浪人第二の母國を造るにあるを以て、是が恙なきを期するには、本土領有の實權をば、是を天下に公示するの形式なかる可らずと。茲に於て、蝦夷立國の奏聞を果斷するに至る。されば蝦夷立國の事たる、要は薩長の政下より脱退するに在りて、皇權の支配より脱せむとするには非ず。然れば子輩の所謂立國なる用語は、稍々不穩當なるべしと雖も、榎本等の主意は封建制度の例に倣ひて、蝦夷地を以て徳川浪人藩と爲すに、是が建封を奏聞するにあり。されば今日の事例に就て、その好例を求めなば、以前の朝鮮總督政治又は臺灣の總督政治の如く、中央政府の直接干渉を受けずして、蝦夷地の政治は、脱藩政廳を以て是を行はむとするもの

三六
如し。明治成辰の當時に於ては、封建制度なる所より、政務そのものは、
従たるものにして、土地人民私有が、主たる目的なるを以て、この意味より
云ふ時は、蝦夷國の割讓奏請を果斷する譯なり。

徳川脱藩ノ微臣、恐懼ヲ願ス、懊惱悲嘆ノ餘リ、味死奏聞仕候。抑
モ臣等此地ニ罷越候趣旨ハ、當家主家徳川ノ御處置ニ付、家臣末々
迄凍餒無之様可被遊散旨ノ趣拜承仕リ、皇帝陛下無量ノ御仁徳、凡
ソ有生ノ類、誰カ感戴仕ラサランヤ。如何セン徳川家ハ二百餘年來
養へ來リ候者共、三千有余萬、賜封ノ七十萬石ヲ以テ相養へ難ク、去
リトテ聊カ士道相守リ候者、今更商賣ト伍ヲ爲ス能ハス、假令窮餓
死ニ抵リ候共三河既來ノ志氣ヲ不可汚ト決心、嶮難ヲ經萬死ヲ冒シ
テ東西ニ遁走致候者共、又ハ江戸附近ノ地へ潜居致居候者實ニ枚舉
ニ遑アラス。右之者共ヲ鎮撫仕リ、終古不開ノ蝦夷地ニ移住仕ラセ、
秦莽ヲ開拓シ、永ク皇國ノ爲メ無益ノ人ヲ以テ、有益ノ業ヲ爲サシ

メントノ微意ナリ。即チ舊主龜之助ヨリ其旨歎願仕リ候處、乍ラ允
准ヲ蒙ル能ハサルノ詔ヲ下セリ。然ルニ右ハ素ヨリ野心等有之、歎
願仕候儀ニ無之候耳ナラス、前文幾十萬ノ人數處分無之ニ付、右之
者共ノ中ニ付十ノ一二ヲ船中ニ移シ、其妄動ヲ禁シ品川沖ニ謹シミ
置カセ、夫ヨリ仙臺迄着候處、折柄奥羽御平定ニ相成候ニ付春以來
同藩脱走ノ者共、今ハ天地ノ間ニ身ヲ容ル、地ナキニ付、同船參ラ
セ、夫ヨリ微臣我輩、後來ノ情實逐一四條郷へ建言仕候通り、蝦夷
地ニ涉リ返寒風雪ヲ厭ハス、眼前一身ノ凍餒ヲ凌キ、後來北門ノ警
護ヲ勤メン爲メ、同志ノ者共ト去ル十月中、鷺ノ木ニ着艦仕候條、
天神地祇毫モ虛疑之レナシ。其後既ニ清水谷待從ニ申立、當地ニ於
テ御指揮相待チ候處、不圖モ賊徒ノ惡名ヲ蒙リ、不意ニ夜襲ニ及ハ
レ忽チ戰爭ト相變シ候、豈夫レ本意ナラムヤ。然ルニ夜襲後清水谷
郷始メ函館詰役々ニ至ルマテ、殘ラス此地ヲ立チ去リ、市民動搖一
ナラス、互ニ外國互市場ニモ之アリ、故ニ吾輩假リニ法則相立テ候。

其時松前ノ地方從テ動搖致候ニ付、吾輩來意ノ趣旨再三使ヲ以テ陳述仕候處、却ツテ吾使者ヲ殺害セシコト數度、其上彼ヨリ發砲攻撃ニ及ヒ、遂ニ松前ヲ捨テ脱走仕候間、是亦土地守衛仕リ、今日ハ函館松前共一圓平定、農商業ヲ安ンシ人心歸依仕候ニ付、既ニ山野開拓ノ仕方モ取調ヘ、北門警護ニ順序相計リ候。何卒蝦夷地一圓永ク舊主ニ下シ賜リ候儀、御許容相成候様、幾重ニモ叙裁ヲ仰キ奉リ候。尙陳述仕候ハ、吾輩所謂三千一心矢テ佗ナシト雖モ、首長無之候テハ手足頭目無キカ如ク、開拓警護完全致シ難ク候間、徳川血統之者一人御撰定、諸務差配リ致候様仕度候ヘハ、一層感激奮發仕リ、不毛ノ僻地富饒ノ郷トナリ、北門ノ警護金湯ノ固メヲ爲シ、内地ノ利益興スヘク、外寇ノ防禦嚴ナルヘク、實ニ自分大事ノ急務ト存候。當春以來不幸ニシテ、皇國內戰爭相續キ、萬民ノ塗炭開クニ不忍耳ナラス、勝敗ノ際一喜一憂有之候得共、所謂兄弟牆ニ閱キ、畢竟、皇國ノ哀弊他人ノ笑ヘヲ免レサル段ハ一同痛心罷在候。素ヨリ戰爭

ハ相好マス候得共、着陸以來度々所々ニ奮戰仕候儀、事實止ヲ得サルノ情實大監ヲ翼ヒ候。此程英佛兩國ノ軍艦函館ヘ入港、船將ヘ會議仕候處、御國地ノ戰爭相歎キ、調停ノ方便モ是アルヤニ聞キ申候間、微臣、柳塞窮惋ノ感情、天朝ニ達スヘキ時到リ候哉ト歎喜ニ堪ヘス、船將ニ相托シ西國公使ヘモ申入レ、前條奏聞仕候。是即チ一ハ皇國ノ爲メ、二ハ徳川脱藩浮浪ノ徒ノ爲メ、吾輩、圓心石腸相盡シ、相守ル處ニ候。

皇慈偏ヘニ御垂憐アリ、願意御聞届相成候様泣血歎願仕候。味死百拜。

明治元年十二月

蝦夷陸海軍總督 榎 本 謙 次 郎

疑雲重疊の榎本、愈本音を吐きたり。即ち本書は英佛兩國の軍艦に委託して、天朝に奏聞したるもの。見よ己れを保ちて榮華を貪らむとするは、これ人情の常なるべきに、獨り榎本は主家幾萬の浪人の爲め、徳川海軍副總裁た

る榮譽を捨て、天下浪士の群に投じたる、既に偉大なる性格の人たるべきに、更に脱藩浪人を撫育するに、こゝに浪人藩を起し、兼ねては皇國北門の警護たる大任を盡さむとす。何ぞ凡骨の及ぶ所ならむや。

蝦夷地奏聞のこと、蝦夷の民情風土より、特別政治の創設を建議するならば格別、蝦夷地其ものゝ分譲を請はむとするが如きは、夫れ或は土地人民私有の封建制度より立論したるものなるべしと雖も、是を永く舊主に與へ賜はるべく、事苟も一國の皇帝に對して、奏上を決行するが如きは、數千年の國史を繙くも、未だ其類を見ざるべし。榎本の意中は、駿河藩七十萬石は徳川主家のものにして、蝦夷全道は徳川歴代家臣の賜封地とす。何ぞ叛亂の謀計存せむや。然れども是を中國より見る時は、榎本等向來北門の警衛に任すとの口實の下に、誰より委任を受けたる事もなく、自問自答漫然蝦夷地に侵入し、函館、松前共勝手に平定して、農商の業を與へ、剩つさい帝國開拓使を追放して、猥りに山野開拓の仕法を講じたるが如きは、事總て榎本には頼まざる所、况んや警護の順序まで相計るなど、出放題を吐き並べる親切こそ、

迷惑にして且餘計の御世話なりと、定めし衆論は一致したる所なるべし。夫れ榎本の奏聞は、脱藩浪人母國を建設し、専ら薩長の支配を脱せむとするに在る事、上來明言する所なり。然りと雖も、奏聞のこと、未だ何等の御沙汰なき間は、榎本たる者、猥りに蝦夷領權を云々するの資格なきものとす然るを何ぞや、その蝦夷地は既に脱人藩として、篤くに建國したるものゝ如き旨意を以て、夷封を承認せしむべく、威歴的通牒を近藩に送りし心持如何奏聞書と通牒文を比較對照して、榎本の意中を忖度すれば、心底に出笑なきを得ざるなり。即ち左の如し。

諸君、御承知ノ通我等既ニ身ヲ容ル、ノ土地ナシ、去リトテ降伏シテ謝スヘキノ罪無シ。茲ニ蝦夷地ハ、皇國北門樞要ノ地ナレハ、此ニ開拓ノ基ヲ創メ、長ク外夷窺竄ノ念ヲ絶ントス。此旨、先頃江戸府ニ於テ、天朝ヘ歎願セシト雖モ、允准ヲ蒙ル事能ハス。於是、有志ノ輩、緩急疾徐ノ機ヲ辨シ、自ラ此地ニ來リ、此旨ヲ函館府知事

殿清水谷待從卿ニ訴ヘントテ、使ヲ馳セシメシニ、函館府ノ小吏共膽小略淺却テ不意ニ我レヲ襲撃セリ。我レ、無據、兵ヲ出シテ防禦ナセシ處、渠等、早クモ府知事殿ヲ伴ヒ、函館ヲ空ウシテ遁去レリ。松前藩ニモ、又我輩ノ所意ヲ察セス、胡亂ニ兵ヲ我等ニ加ヘリ。我輩、不得止是ニ抗敵セシ處、松前勢、其ノ所領ノ民家ヘ放火シ、加之、其民人ノ財貨ヲ抄掠シ、其酸毒實ニ有不忍道者、遂ニ昨五日ニハ、自ラ其城地ヲ焼イテ、悉ク逃去。我輩、大ニ其疎暴ヲ怒ルト雖モ、既ニ其民人ノ塗炭ニ苦シムヲ見ルニ忍ヒス、今正ニ其苦ヲ救ヲ以テ先務トセリ。我レ素ヨリ松前家ニ恨無シ、況、於奥羽御列藩乎。然トモ姦佞饒舌ノ輩、萬一、王命ヲ矯メ、妄ニ我輩ヲ撃ントテ、奥羽御列藩ノ兵ヲ瀆サン者、無之トモ亦計リ難シ。然ルトキハ、列藩ニモ我輩ノ冤罪ヲ愍ミ、我輩ノ素志ヲ察シ、日本北門ノ爲メ、篤ク御盡力アラン事ヲ希ス。苦シ然ラスシテ、我ヲ目シテ賊トナシ、御出兵ニ及フ上ハ、無是非、必死ヲ極メ、防禦シ、手術ヲ設ケ候、而

己ナラス、直チニ其城地ヘモ相迫可申者也

徳川 脱藩海陸軍

奥羽越御列藩へ

通牒是なり。直ちに其城地へも相迫り申すべきものと聞きては、列藩たるもの、聊か恐縮する所たり。即ち本書は甲賀源吉乗込百二十人を督し、回天艦を率ゐて秋田、弘前、南部の諸藩に通告したるなり。

蝦夷地行政委任問題

思ひは王政一新、薩長の雄藩一躍して、政道の要衝に就くや。即ち徳川の餘恵に榮華を受けし恩顧譜代の歴代家臣は、茲に於て、逆境兒はとなりたり。然れば徳川宗家の七十萬石、駿河藩として賜封ありと雖も、その歴代家臣の處遇にまで、及ぶ能はざるや勿論なり。されば家臣浪々幾萬、王政維新の聖代に於て、奥羽敗士と共に朝敵の汚名を以て、最早天地の間に身を容るゝの

地なきに臨み、果たして其爾後の餘生こそ、何を以て保つべきぞ。是實に逆境兒か腦間に湧く憂苦にして、豈、上下皆擧げて新政の惠澤に浴する、參政諸藩の想像し得べき所ならむや。

夫れ新政不滿の者、窮飢待死の者、浪々東西に潜居する者、延ては激徒囚族に至るまで、身苟も舊幕の逆境兒たる者のみを以て、第二の母國を蝦夷地に造り、大同一國互塞を凍ぎて寒土を耕し、荒蕪原草の間に在りて、僻邑を開き、大に浪人が餘生を計ると共に、其結果は内地産業を振興せむとする、榎本等の浪人藩賜封の奏聞は、即ち内地無用の長物をして、有益の業を起すに人物經濟より打算したる殖民政策なり。更に戰術無双の海陸軍を擁して、北門警護鎮守の勤めに就かむとするは、蓋し國防に付き、皇國將來の時運ト知したる政見にして、浪人藩の存立こそ一舉兩得の政策なる所、巨魁榎本武揚の識眼は、確に雲を抜く也。

翻つて蝦夷地の沿革を見よ、蝦夷は未開不毛の寒僻なる所、されば政府に於ても、是が開拓の必要より、既に清水谷卿を派遣するあり。蝦夷平定後愈

緊要を認めて、鍋島直正をして開拓の任に就かしめ、其後東久世通禧伯を開拓長官に、黒田清隆侯をその次官に補し、大に蝦夷の民政に意を注ぐ所ありけるも、施政振はず、尙永遠なるものあり。かくて漸く明治七年に及んで、その八月黒田清隆開拓長官となり、巨大の經費を散して、諸多の施設を計畫するに至りて、開拓の事業は稍々進捗を見るなり。依て翌八年に至りて、屯田兵の制度成れり。即ち宮城、青森、酒田より徵募する民兵千五百人、是を以て國防と開拓を兼ねる政策を實行したるもの。依是看之、蝦夷の施政は榎本の政見に一致するなり。果たして然らば明治維新に當りて、始めより本土の施政を浪人軍に委任せば、如何なる結果にてありけん。

巨魁榎本の人物より見れば、その大膽なる度量と識見の卓抜なる態度とは如何にしても、當時の天下に在りては、第一流の好漢たるを失はざるなり。(或は偏見かも知らず、唯予の信念なり) 然らば榎本が自から、味死百拜恐懼を願す、懊惱悲嘆の餘り云ふ理由を以て、果斷したる蝦夷立國の奏聞は、薩長政下の逆境兒を移して富饒の脱人母國を建設する一事に在るを以て、明治初年より大に天下の浪士

を叫合し、本土開拓には絶世の努力を注ぎて、大に生産を計るに至りしは勿論、三河既來の士風を發揚して、全力を擧げて國防に盡碎せるは疑無し。果たして然らば、巨大の國費を投せずして可なり。更に明治八年までには、蝦夷國の振興は、長足の進歩を以て、内地産業を裨益せる大なりしならむ。

其脱藩約盟團に於ても亦然り、蝦夷地を以て不平浪人の立命地とならば、當地移住の如何は、實に浪人の死活問題に關するを以て、競ふて移住するに至るは勿論なり。而かも本土上陸直ちに地主と爲り、無盡藏なる富源を開拓するものなるを以て、家族皆擧げて自力奮闘、北邊産業を振興したるは保險付なり。果して然らば、廢藩置縣に臨みて、代録一時公債證書を與ふるに當りて、大に是を加減し、其西南士族に割増さは、夫れ或は明治の聖世に、先づ辛き目を見たる舊武士とはならずして、新舊過度時代も圓滿に治まり、江藤新平や、前原一誠の亂などは、それ或は起らざりしなるべし。

上來妄言を吐き並べし所を要約すれば、蝦夷の開拓と國防に附きては、初めより脱藩軍に委任したるを得策とす。然れども約盟團の總ては不平浪人な

り。奥州平潟口總督四條卿の意見は、約盟團に不利益にして、所見有力なり。追放せられたる清水谷卿の意見を齎らす、判事堀直五郎の報告は、西郷の推察に一致する所たり。素より約盟團の願意通すべき理無く、即ち蝦夷地上陸のこと、早くも叛亂の謀計とは裁斷せられたるなり。(蝦本武揚と佐々木京運氏回舊談の一節)

果たして、當時薩長人に言はしむれば、榎本等が浪人母國を建設するに、蝦夷地一圓を舊主徳川に與ふべく、奏聞を決定するが如きは、奉對天朝悖慢不敬の極なり。榎本の所業は明分相辯せざる不法あるものにして、浪人を狩り集めて、薩長撲滅の第二王政維新を計算するに外ならず。若し是れを等閑に附するに於ては、徳川の恩顧譜代幾十萬の脱士は、皆割據して内地に對立するの敵國となり、必ずや間隙を窺ふに至るは當然なり。脱士幾十萬同一地帯に戦守を張らば、内地の危嶮こそ、果たして如何ばかりなりけむ。とは當路者の杞憂なりとかや。事茲に至れば、這般駿河藩が、榎本の所在を發見したるに依り、自藩の脱士を鎮撫せむとの蝦夷出征上書も、名を鎮撫に藉りて約盟に投する無きかを疑はざるを得ず。茲に於て、恐怖と猜疑に驅られて、

遂に是を卻けたるなり。左るにても、内地浪人風を臨むで、蝦夷渡海する以前に於て、叛徒を撲滅して禍根を絶たざる可らずと。即ち茲に於て、揚言して曰く、昨年以來徳川が殘黨及び諸國脱走の浪人共、函館に渡りて清水谷脚を追落し、或は松前を攻め落して、猥りに蝦夷全島を悉く押領し、日々に猛惡を極めて、燹掠白晝公然慘虐良民を苦しむ。亂逆の妄動皇國の爲め慨嘆に堪へず、左れば速かに鎮定して、治安を保護せざる可からず、將士、國家の爲め奮闘の時なりと。

蝦夷出征の爲め出動する軍勢は、薩州、長州、土州、筑州、肥後、久留米、水戸、彦根、秋田、津輕、徳山、大野、松前の諸軍總勢一萬六千(一説には六千五百人あり)大砲百數十門、其多くは奥羽動亂に腕を磨きし、頑強無比の隊士にして、總指揮官黒田清隆の率ゆる所たり。更に其海軍を見るに、品川四方一、土方堅吉、赤塚源六、中牟田倉之助、岡敬三郎、石井貞之丞、山縣久太郎等は甲鐵艦を旗艦に、陽春、春日、飛龍、豐安、丁卯、長州、阿州、戊辰、晨風の諸艦を督して出征を待つ、實に昇天の慨あり。

然れども北國の冬季雪深き所、軍事行動に大障あり。西軍、蝦夷出征の命あるも、温暖の期を待つて兵馬を動かすは、素より其處と云ふべし。中國の形勢風雲いよゝ急也。果たして北邊鎮座の根本たるもの、蝦夷地立國の奏聞のこと、如何なる芳夢ありて存するぞ。

蝦夷地討伐の風雲

蝦夷地討伐の作戦は成れり。惟ふに前年奥羽大亂に當りて、海外列國が局外中立の令を敷きたるに顧るも、蝦夷動亂平定を計るに、干戈を動かす以上は、列國民の權利を保護保障の要あるを以て、政府は外國間准知事をして、歐米清韓の使臣に對し、左の通牒を發せしめたり。

以手紙啓上仕候。然レハ蝦夷函館港ノ儀、舊冬以來不慮ノ災害ノミ有之、貴國人民亦安堵ノ思ヒヲ爲ス能ハス、危難ノ境域ニ陥リ候マ、時日ヲ不移我帝國政府ニ於テモ、深慮致居候段ニ有之候處、今

日マテハ冬寒ノ爲メ、軍事行動上差控へ居候モ、追々暖和ニ赴キ候ニ付、時不措海陸ヨリ進軍、不日打チ拂へノ成功ヲ默算致居ル儀ニ有之候。就而ハ銃砲飛彈交叉ノ間ハ、又貴國人民如何ナル障害ヲ可被受哉モ難計、其他家屋住所或ハ什器ニ至ルマテ、災禍ナキニ微意ヲ注留スルノ儀ニ付、玉石モ救ヒ得ハ、實以テ幸福ノ至リニ存シ候ニ付。我政府ニ於テハ外國船ヲ雇入レ、彼港へ相廻スヘク候間、器什財貨ノ類ハ右船ニ積載スル事ト致シ、人民ハ貴國軍艦御差回ニテ右へ暫時御救ヘラレ候様致度、可貴意得如斯御座候。以上

巳 正月二十七日

日本帝國外國間准知事 東 久 世 通 藩
各國公使閣下

時は移りて三月九日、征蝦の西軍愈東京品川港を發す。米國船ハランス號以下十餘隻、西軍陸軍の輸送に當るなり。かくて西軍艦隊は、甲鐵艦(船將

長州藩)陽春艦(船將肥後藩)飛龍艦(船將柳川藩)を始め、海軍々屬は英國船に依りて、威風堂々北進の途に就けり。總軍航行房州女良岬に於て、海洋大に荒れて浦賀港に寄泊し、三月十六日同所出帆、十九日に至りて、奥州南部鐵ヶ崎(宮古灣)に達せしかば、此所に滞在して糧食薪炭を供給し、此間に於て、蝦夷地敵情偵察を兼ね、函館地方に對して通告を發する所ありき。

此度蝦夷討伐ノ官軍ハ、左ノ約令ヲ函館市民ニ布達ス

畏キアタリヨリ、此度函館攻戰中、外國人及ヒ總テノ商人ニ對シ、一週間ニ三萬「ドル」ヲ御下賜セラル、事トナリ、依テ商賣休止ニ伴フ損失ヲ補給セラル。萬民、依テ安堵セヨ。

官 軍

更に西軍は今回の蝦夷に付き、人心或は叛亂に歸依して、西軍の軍事行動を阻害するなきを保し難しとて、茲に於て、大に民心を威嚇し、叛徒の存立

し得べからざる所以を公知せしむるに、縷々數千言を吐く所あり。而して本
布告は市街十字街頭に點付せられたるもの、由。

五二

凡ソ人過チ無シト云フヘカラス、能ク過チハ改ムルニ如カス。故
若シ過チアラノ何ソ憚ルコト勿レトヘ、故人ノ通鑑ナリ。
近頃ノ徳川脱藩隊士ノ如キ者ハ、脱走ノ罪アリト雖モ、一時ノ暗迷
ニシテ、誤テ方向ヲ失ヒ、大義ヲ辨スル事能ハス、情狀以上ノ如シ
故ニ罪重シト謂フヘカラス。然レトモ其首魁ニ至リテハ、天勅ヲ奉
セス、主命ニ背キ、品海ヲ脱走シ、恣ニ死知無罪ノ兵士ヲ誘導シ、
猥リニ之ノ函館松前ヲ襲ヒ、人民ヲ暴逆シ金穀ヲ掠奪スルカ如キ、
其罪最惡ト謂フヘシ。然レトモ方今、聖上ノ至仁至慈ニシテ、一旦
罪アル者ト雖モ、速カニ其罪ヲ改メ正ニ反スレハ、必スヤ出格非常
ノ寬典ヲ以テ是ヲ赦シ、近クハ松平容保(會津)伊達慶邦(仙臺)ノ如キ、其例
見ルヘシ。

無知無罪ノ者ヲ罰スルハ、之レ、朝廷ノ意ニ非サルコト明白ナル、
晴天ノ如シ。汝シ浪士良ク、諒察スヘシ。夫レ蝦夷地ハ不毛ノ僻
土、五穀熟セス、加之五金足ラス、是レ何ヲ以テカ能ク長久ヲ保チ
其士卒ヲ助クヘケンヤ。又元來ヨリ商人ハ大ニ惑ヒ、農夫ハ甚タ疑
フ、是又何ヲ以テカ急速ニ軍事ノ用ニ立ツヘキヤ。是レニ依レハ、
攻メスシテ自ラ敗スルノ理、既ニ十日ノ見ル所ナリトス。

左レハ近日、京ノ大軍出動其罪ヲ問ヒ、茲ニ於テ、首魁者ノ重罪ヲ
罰セントス。茲ニ於テ、巨魁ノ者、必スヤ、死知無罪ノ兵隊ヲ使役
シ、官ノ兵威ニ抗セント爲サン。兵隊ノ士、其故ヲ知ラス、漫リニ
彼ノ指揮ニ從ハ、其罪重カラスト雖モ、彈丸ノ硝煙中ニ黑白ヲ辨
セサルニ於テハ、重罪ノ者却ツテ首足ヲ全フシ、無知無罪ノ輩多ク
非命死ヲ爲サハ、豈實ニ恐然ナラサランヤ。諸士、能ク、之ノ得
失ヲ辨ヒ、早真機ヲ察シ、過チヲ改メ、正義ニ背ヘテハ、管ニ其身
ノ幸福ノミニ非サレハ、皇國ノ大幸ナリ。

辻街頭の點り紙とは、即ち是なり。何と御念入りの通告文なるぞ。其狀たるや、恰も放蕩恣に對する父母の強意見の如く、老婆の孫に與ふる昔話しの如し。然らば是を堂々たる軍書として見れば、首魁榎本等に對する面當とも察し得べく。文意熟讀、先鋒兵隊の眞意再考して、一讀三笑何と滑稽ならずや。

この通告に依りて、人心果たして恐怖せしや、否や、敢て問はずと雖も、其蝦夷割據を企てし約盟軍に對しては、寧ろ「耳は馬、面は蛙で、母こまりの類なるべし。かくて一片の通告書は五稜廓に傳達せらる。榎本是を手にして、打ち笑つて曰く、敵、問者をして我が兵力を挫かむとす、既に戦争は近きに在り、然らば、諸士大に奮闘する所あらむと。即ち茲に於て、蝦夷地沿岸の陣所には、早馬を以て警告を發せしめ、大に沖合の動靜を環視せしむる

にあり。

南部宮古灣の凶變

往來繁き函館の十字街頭には、蝦夷征伐の通告書點付せられしかば、市民の恐怖こそ、如何ばかりなりけむ。或は難を山奥に避くる者あり。店頭を閉鎖して青森に走るあり。海岸人事の來往愈騒然となるや。航海の魚船は飛報を齎らして、西軍大勢宮古灣停泊を報ず。蓋し南部藩士情報すと云ふ。

布説道路に傳へ、耳語相接して、情報は五稜廓に達したり。依て作戦の軍議あり。榎本總督、席上揚言して曰く、「賊所領の軍艦中、その甲鐵艦なるものは、米國最近の製造に係り、外面全部鋼鐵を以て覆はれ、如何なる彈丸と雖も、是を貫くこと能はず、如斯もの敵の手にありて、自由に出動せられては我軍危険此上も無し。されどその甲鐵以外の軍艦に於ては、幾十あるも恐るゝに足らず、然らば彼が出動以前に於て是を略取し、函館の海に備へ置かむや」と。海王たる榎本、有槩は鋼鐵製の軍艦には恐れたりけり。茲に於て

甲鐵艦掠奪の武装は一決して、海軍奉行荒井郁之助、宮古灣襲撃の總指揮官となり、陸軍奉行土方歳三及び甲賀源吉(船將)は、即ち相馬主計、野村利三郎の陸軍添役及び教師ニコルを随ひて、回天艦上に乗り移れり。小笠原賢三(船將)及び教師コルラーシは二番回天に乗り、松岡啓吉(船將)及び教師カラトーは、蟠龍艦に乗り、彰義、士官、神木、新撰、陸軍の諸隊を督して、威風堂々宮古灣に向はむとす。

東海の空も灰色を呈して、天、曉を報すれば三月二十日、蝦夷艦隊は回天より發する號砲を合圖に、愈函館灣を抜錨したり。諸艦、黒煙朦々天を焦しつゝ、函館山を左にして、海波を蹴つて南進する程に、やがて沖合遠く航するや、風は起り、雨來りて、颱風雨の襲來となれり。天地暗々進むに暴風あり、退くに山爲す怒濤あり、逆浪奔流の海原に在りて、進退愈窮りて船は傾き、大浪甲板を洗ふ。諸艦は徐々として浪の走るに乗するも、何ぞ夫れ臆面もなき軍艦奪取の妄計に付き、海靈の咎むる所には非ざるなきか。諸艦見る艦列破れ、流れのまゝに行衛は失せて、意氣消沈今や詮なきなり。逆浪

に迷ふ海洋の孤艦、たゞ一雙の回天のみ、所期の動作を貫かむと、尙も南進しつゝ漂ふ程に、かくて二十五日に至りて、昨日の大風止む。依て回天は單艦の航行途中の襲來を恐れ、その避難策として米國軍艦旗を橋高く翻しつゝ、意氣揚々宮古灣に至れば。港内には疑ふべくもなく、八雙の軍艦并に英米の船は停泊しあり。何分歐米と申せば、一段の尊敬を拂ふ當時の趨勢とて、奇計大に効ありて、その蝦夷回天の雄姿を見るや、早くも軍艦旗に迷はされて米艦と信せしも當然なり。俄然停泊の諸艦は、艦烈を整ひて四面靜肅の間に、一隻の汽船は出で、水先を案内するに至る。

回天の得意滿々推して知るべし。されば鳴りを殺して唯一直線、目的とする甲鐵艦の側面に突進す。回天、やがて甲鐵艦の舷側に至れば、時こそ良かれと云はぬばかりに、直ちに米國旗を日章旗に換へて、霹靂一聲奪取の準備を成せば、四方その意外に膽も潰ひ去らんとす。西軍、隊士の多くは上陸して、酒色に意を充たし、俄かの砲聲に狼狽し、盃を捨て、急ぎ歸艦すると云ふ始末。此間に於て、西軍八隻の軍艦は、俄然として出動し、而して猛烈な

る砲撃を行ふ。狹隘なる港内の活劇、進止儘ならぬ所、爆弾の送投手足を以て足るとは是なり。回天、獅々猛虎の勢を以て、接戦する程に、加藤作太郎、笠間金八郎、野村理三郎、大塚良次郎等の抜刀隊は、早くも甲鐵艦内に亂入し。勇往決戦、隊士數十人を殲して、船長室にと闖入すれば。艦長土方堅吉、同品川四方一等短銃を取つて、力拒大角闘。大塚、遂に殲れて、抜刀隊僻易す。西軍、是を銃撃して、皆殺す。かくて甲鐵艦上の車臺付六センチ砲を始め、軍艦より打出す巨弾は、凄聲を發して爆發四方に轟き、甲鐵には機關室破れ、回天は巨弾十數彈の破裂ありて、今や船具飛び、綱切斷せられ、隊士の死傷山積して、起ち往生となりたり。西軍艦隊今や八隻の陣列を以て、益々砲撃を加え來りて、さしもの回天も、將に悲鳴を擧ぐるの時は來りぬ。

夫れ回天は單身一個、西軍根據地に深入するは何事ぞ、飛んで火に入る夏の虫、それ何事をか爲さむとする。既に大膽とは云はむか、或は拙劣と駭評を進呈せむか。然れども事茲に至る。然らば如何にして、軍艦其ものを奪取するの目算なりしか、願くば手段方法に付きて、詳細なる説明を承り度き感

なきに非ず。其の大膽なりし氣勢も、今は息も絶え、遁れ、て海洋の茫中に難を救ひ、漸く北國指して遁走する、その後姿こそ見たきものなりきさは云ふもの、蝦夷海軍が艦体を動かすに、進止の運用手足の如く、巧妙なる見るべきなり。回天も遁れ來りて南部八戸鮫浦沖に到るや、折しも先日の暴風に押し流されし蟠龍艦は、此所に漂泊して回天を案じ居るもの。今や回天の戦報を聞くに及んで、唯だ残念と大息して、北行に決す。二十七日に至りて、漸く函館港に入津するを得たり。依て敗報を五稜郭に送る。

然るにその二番回天の事たる、漂流後漸く損傷を修理して、北航の途にありけるが。折しも回天を尾撃して、歸途に就く西軍艦隊と、沖合に遭遇したりけり。砲戦激闘、衆寡敵せず、二番回天も進退谷まり、汽力を強めて勇往邁進、彈丸費ひ盡して、南部領野田郡尾元村海岸に遁れ來れば。後背は既に西軍艦隊の肉迫する所、波を蹴つて益々砲撃す。茲に於て、最早爲す可らざるを知りて、隊士を悉く上陸せしめ、火を發して破船したり。依て上陸の蝦夷軍は往いて盛岡藩に降を乞ふ。憐なるかな蝦夷艦隊、甲鐵奪取に大勝を目

算して、昇天の氣を吐きし過去は、却て二番回天を亡失するに至る。回天艦長甲賀源吉、軍艦役矢作平三郎等討死し、新撰組長相馬主計、神木隊長酒井良佐、教師コール等負傷したり。西軍死傷は戊辰艦を以て、東京に送りしと云ふ。

六〇

西軍の上陸と蝦夷軍の密使

宮古灣の凶變は、向後如何なる不祥事の爆發するやを懸念し、西軍は二十九日を以て、愈北進し、青森港に停泊したり。茲に於て、戦闘準備は愈々堅く陽春、飛龍の諸艦は護送前衛と爲り、甲鐵艦以下は後衛となりて、共に海上を警戒しつゝ、津輕半島を東航し、野田、今別の港津を経て、飛龍岬を左折し愈蝦夷地に向ふ。かくて四月八日に至れば、その西海岸なる、渡島國乙部村に上陸するにあり。茲に於て、陸軍は其上岨山の嶮に據り、騎馬斥候を四方に放ち、以て進撃の作戰を建つるにあり。

然れば蝦夷軍江差奉行所に於ては、西軍上陸の報を得て戦闘準備あり。兩

軍の接觸愈切迫して、人馬の來往頻繁となる。かくて西軍交戦計畫は、總軍を三道に注ぎて、函館に迫るものにして、第一軍は江差方面の攻撃に當り、第二軍は厚澤邊川上流に進み、山嶺の嶮を踰へて、木古内に迫り、茲に於て兩軍は相合して南海岸を進撃して、即ち函館に向ふものとす。更に第三軍を起して、北方二俣口の間道を衝き、大呼して五稜郭の後背に迫るにあり。翻つて蝦夷軍五稜郭の動靜を見るに、西軍乙部村上陸は既に探知する所となりて、總勢一萬數千の大軍と聞きては、聊か僻易するの感なきに非ざるなり。茲に於て、連日の軍議も今や頭痛の種と爲る。惟ふに蝦夷軍の今昔を見るに、その初め仙臺を發して、北走の當時は、七隻の大艦を擁して、威風昇天萬丈の氣を吐きしかと、そのいよ／＼蝦夷侵略に當りては、開陽、神速の二艦は既に岩礁に碎き、更に甲鐵艦奪取戦に於ては、却つて二番回天を亡失するに至りて、残るは僅かに四隻の木艦、尙甲鐵一隻の戦闘力に匹敵する能はざる現況にあり。然らば陸軍を強めむとするも、味方僅かに五千に足ざる既に遠し。依て竊かに函館市中に徵募する所ありけるが、這去辻街頭の點り

紙は大効ありて、萬人の恐怖今や一人の應募なき有様にて、斯くなりては最早詮なく、然らば是より密使を送り、大に同志を徵募するに如かしと、議、こゝに一決す。

時に函館港にはオランダ國商船の停泊するあり。即ち幸事逸すべからずと榎本總督は自ら船將に會見して、大に援助を乞へば。船將、定期航海なるを以て、途中寄港を拒む。されど榎本の懇請は、事情を開陣して切なるものあり。船將遂に應諾し、いよ／＼密使を引き取るに至る。茲に於て、額兵隊仙臺藩士十數人、船底深く隠匿せられて、夜暗に乘じ函館灣を抜錨し、愈仙臺指して密航するに至れり。

江差福山方面の接戦

乙部村より江差攻撃に就く第一軍は、夜半に厚澤部川を渡りて、田邊八幡岳方面に迫れり。變報、江差に達せば、江差奉行松岡四郎次郎、歩兵隊を督して、來り是を防ぐ。然れども西軍大勢の陣は捲土重來して、突進益々急な

る所、歩兵隊長三木軍司は鏖戦遂に本道に敗れ、參軍小菅長之助、八幡岳を殊守して、大に防戦する所ありけるも、遂に守りを失して、砲戦一敗退きて江差を固守す。四月十日となりて、西軍海上の鐵城は、遙かの沖合に雄視するを見る間に、轟然として猛彈を江差に注ぐ。さる程に、西軍陸軍は大呼豨突して押し寄せ、海陸の壓迫猛烈を極む。されば蝦夷軍は堅守奮闘、大に防備を張る所ありしが程に、海陸より飛び來る砲彈は、峻烈連發四方に破裂し衆寡敵する能はずして、上ノ國に通れ去る。然るに西軍飛龍艦は、是を尾撃して勢侮るべからず、依て蝦夷軍も海岸に砲陣を保ちて、海上飛龍を砲撃す。彼我の砲聲海陸に起るも、臺場の砲陣は俯瞰にありて、益々飛龍艦を連撃すれば、猛彈見る／＼舷側に爆發して、飛龍の戦闘力は、俄然として閉息す。蝦夷軍、是を望み見て、凱歌天を衝き、砲撃益々努む。かくと見たる大坂丸逸早く航き付けて、飛龍を曳き、而して江差に回航す。此時に當りて、福山駐屯の遊撃、砲兵の諸隊は、長驅して石崎を保つにあり。

四月十一日を以て、一千五百の西軍は、江差を先發して上ノ國に迫る。此

時に至りて、甲鐵、陽春、丁卯の諸艦は、援軍を輸送するに青森港に出帆したりと云ふ。長軍三百人早くも來つて、上ノ國の驛邑を攻めければ、蝦夷軍は砲彈を四方より注ぎて、撃つて是を走らす。然るに砲聲に出動したる西軍の大勢、見る／＼押し寄せて、威風甚た熾ん也。蝦夷軍是を望み見て、俄然として僻易し、その敵すべからざるを知りて、上ノ國の防備を解き、石崎の陣を引き拂つて、長驅して福山城に據つて戦守す。

四月十二日、江差方面蝦夷軍の大勢は、前日來の敗戦を挽回せんとして、福島の陣を固めて、西軍の到るを待つ。茲に於て、折戸臺場には遊撃隊を送り、地藏山には陸軍隊を送り、其他の臺場には歩兵、神木、砲兵の諸隊を以て、巨砲に彈を込めて、虎視を四方に張る。此時に當りて、西軍の主力は江良町にありて、其先軍を根部田に送るの報あり。依て歩兵隊長三木軍司、遊撃隊長伊庭八郎、砲兵隊長關廣右衛門等は、日の暮るゝを待つて福島を發し、根部田に向つて、夜襲戦を行ふ。電光石火、暗中より猛彈を發して、松軍の營を抜き、弘軍の陣に迫る。西軍は忽然の襲撃に、恟々戦守に苦しみ、土崩

瓦解となりて、札前を保つにあり。依て蝦夷軍は益々進み、歩兵、大砲の諸隊を本道に注ぎ、遊撃隊を山手に間道せしめて、大舉して札前を攻む。西軍力拒發銃連呼する所、蝦夷軍は兩道の味方を集中して戦ふや。西軍の別隊は横背より現はれ、歩兵隊を撃つこと猛烈也。蝦夷軍志氣大に弛み、今將に瓦解せんとす。折しも駈け來れる陸軍隊長春日左衛門、西軍の別軍を一掃して味方の陣を乗り越し、圍を擧げて本道を進む。茲に於て、諸隊は大に勢を得捲土重來して突進す。西軍混亂火を支村に發し、魚船を徵發して負傷を移し是を江差に輸送すると共に、敗士は江良町に遁れ去る。茲に於て、蝦夷軍は清部村に宿陣す。

四月十三日蝦夷軍は江良進撃の爲め、清部村を發すれば、西軍は前夜の大敗戦に、反撃陣を以て松前攻撃を決し、江差口及び鶉邑口の二道に兵を注ぎて、大呼して攻め上る。茲に於て、兩軍は端しなくも進撃の途中に會戦し、戦鬪激甚を極めて、兩軍の死傷は過多なり。然れども蝦夷軍の進撃陣には、西軍百砲を以て抗するも當る可らず、見る／＼兩道に敗れて、江差に走れり。

時に西軍第二軍は江差を發し、間道して木古内侵入の報あり。茲に於て、蝦夷軍の後顧の慮は、俄然急を告げ、江差進撃を中止して兵を纏めて福山に急走するに至る。かくて彰義隊は福島を出發して、福山の戦守を援く。折しも轟然たる砲聲は、海波の中より起りて、西軍艦隊は黒煙を揚げて、突如として折戸臺場に通る。茲に於て、折戸の巨門はみな沖合に並列し、砲撃百雷も管ならず。海陸の砲戦勝敗決せず、かくて日も暮るゝに及びて、西軍艦隊は遠く走れり。夜に入りて南風霧を齎らし、北海の空を曇らして天地溟朦、逆巻く怒濤の音のみ深夜を震蕩す。時に西軍晨風艦は海上警戒として、江差沿岸を巡航の途にありけるが、適々濃霧襲來して四顧を辨せず、遂に乙部崎の磯に於て、岩礁に乗り揚げて、船體を粉碎するに至る。

四月十五日、西軍の援軍は米國船ヘランヌ號にて二千餘人、大阪丸にて八百餘人、更に石炭を積載したる和船數隻、江差に向はむとして、福山を遙かの中遠く通過するあり。蝦夷軍是を望み見るも、砲を發する由なく、たゞ憤然として控視するのみ。明けて十六日、蝦夷軍は再び江良に向つて、襲撃を開

始すれば、西軍は前日來の大敗戦に顧み、春日艦を送りて海上より是を遮斷せしむ。海陸の砲戦益々弾をつき、戦鬪愈激甚たる間に、西軍は大呼して殺到し來る。蝦夷軍愕然殆んど戦守に苦しみ、遂に苦戦大敗して福山に敗走す。されど蝦夷軍は尙偏せず、又も翌十七日を以て、襲撃を開始するに、彰義隊一小隊は斥候となり、陸軍隊三小隊は先鋒となり、遊撃二小隊、歩兵五小隊、砲兵一小隊、工兵三小隊は本軍となりて總軍五百餘人、鼓聲堂々馬首肉迫して、江良に向つて突進す。然るに昨日の春日艦は再び來つて、巨砲を發して蝦夷軍襲來を天地に報するや。豈計らむ、松前、弘前、長州、徳山、水戸の諸軍二千餘人、四方に崛起して彈丸を雨注す。蝦夷軍、漸く戦守の陣を保つも、五百の孤兵の防ぐ由なく、土崩瓦解となりて清部に撃退せられたり。西軍躍動早くも清部を衝くに、本道及び間道より攻め上り、更に春日艦は平岬に來つて、沿岸を砲撃すること猛烈。茲に於て、蝦夷軍も見らく瓦解し、敗士混沌折戸臺場に長驅す。甲鐵、朝陽、丁卯、陽春、飛龍、春日の西軍艦隊は、一列横隊となりて、早くも折戸砲臺を包圍し、砲撃最も激烈を極む。

蝦夷軍、守死して是を防ぎけるが、八隻の陣列は忽ち轉回し、更に進んで松前城の本郭を環攻するに至る。されば根森、枝ヶ崎、及部、立石野等の臺場は、轟然として一齋に是れを防戦し、陸軍教師カッノフ、砲兵指圖役山内信之丞等は、馬上にありて各臺場を疾驅す。福山の防戦蝦夷軍は皆戦陣に奮闘せるを以て、市中巡邏及び城門警戒は、裁判局員及び護送隊一小隊を以て是れに當らしむ。かくて海陸の戦闘は砲煙溟々砲聲天地を震蕩し、霹靂萬山に鳴りて百雷も管ならず。此の間猛弾は海陸に飛交して、城郭を破り、臺場に爆發し、軍艦に命中すること連りなり。さる程に、陸軍は江差本道を攻め上りて、疾風迅雷、濱手に添ふて一千餘人、撤兵の陣を以て砲を發して押し寄せ來る。陸軍教師カッノフ、本道の部署に在りて總軍を進め、敵を海岸山手に食ひ止めんとして、戦守を張りて防ぎけるが、それと見たる春日、飛龍の二艦は、激烈なる背面攻撃を以て、折戸の海岸を碎くに至る。海上の猛弾連りなるに加へて、陸上の進撃耳を破り、海岸山手は、四方より彈丸雨注する所とはなりて、蝦夷軍は苦闘一度に崩れ、みな松前城に逃げ込めば、後を攻


め來る西軍の突撃、関を擧げて早くも城郭に迫る。折しも間道迂回の西軍は荒町、神明山、地藏山を始め諸々の要害に陣し、俯瞰して城街を連撃するに至る。攻防烈戦、龍争虎鬪、戦陣いよ／＼多端を告げて、蝦夷軍の苦戦其極に達す。然れども此所を守るは頑強無比の豪のもの、殘壘を固守して一步も退かず、彈をつき、力のある限り堅守奮闘、隊士は殫れて斃は四方に横はり、慘また慘を極む。此時に當りて、先きに蝦夷軍に降りし松前藩家老松前右京同頼崎民部等は、部下五百人を率ゐて、石部澤に陣して、大に奮戦する所ありけるが、連日の敗戦その非なるを見て、俄然逆砲を發し、而して蝦夷軍の陣に向つて、攻撃頗る猛烈を極めたり。茲に於て、蝦夷軍の志氣は一度に弛み、城頭の日章旗は何時しか落ちて、臺場の大砲には釘打ち込まれ、戦陣今や土崩瓦解となりて、福島に退走するに至る。然るにその地藏山の防備陣は、今や重圍の中に陥りて、陸軍隊長山田八郎、劍を抜いて裸体と爲り、一小隊の孤兵を率ゐて、包圍の中に亂入し、血戦七離七合、皆討死して漸く遁るゝもの三人。

福山の一敗、蝦夷軍は本道を通れて、漸く吉岡澤に至る。神木隊は敗軍に糧食を配りて、夕暮五時を以て總軍福島に退却せり。時に木古内戦争の報あり。茲に於て、福島駐屯の蝦夷軍は、四背敵の中に陥りしかば、木古内にして若し敗れなば、福島の蝦夷軍こそ死地にあるを以て、其一ノ渡時には會津遊撃、神木の諸隊を送り、知内には彰義、陸軍、大砲の諸隊を以て是を守らしむ。

二俣口の要塞

〔一〕二俣口の戦

西軍第三軍は乙部村より北進して、間道二俣口に逼るにあり。夫れ二俣の地たる、蝦夷軍北邊の要害たると共に、江差と相俟つて西海岸の防備なり。されば蝦夷軍に於ては、陸軍奉行土方歳三を總督將と爲し、傳習、衝鋒、工兵、砲兵の諸隊を送りて、山間峻難の地を選びて、絶壁に陣營を置くものとす。四月十二日、西軍先鋒は、馬首肉迫して、曉霧を冒して二俣口の前衛を襲

ふ。折しも蝦夷軍は糧食を取り居たることゝて、突然の襲撃に、一營惶擾殆んど戦守に苦しみ、退きて急を本陣に告ぐ。依て傳習隊は進んで山谷の險に據り、彈を込めてその到るを待つや。松軍先鋒の西軍は、一勝の勢ひに乗じて、いよ／＼二俣陣に現はれ来る。茲に於て、傳習隊俯瞰の陣は、彈丸雨注して攻め立つ。西軍、驚き迷ひ、仰へて是に接戦しけるも、俯仰の接戦遂に堪ゆ可らず、逸早く陣を捨て、走り去る。砲聲本陣に達し、戦勝の報を得て、蝦夷軍の志氣大に振ふ。さる程に、の隊旗を押し立て、弘軍の精兵は、先陣の勇を揮つて、傳習隊を目掛けて、大呼猛突す。彼我の接戦いよ／＼酣となるに至りて、松前、大野、長州の諸軍は、傳習隊の疲勞を衝いて、突進甚だ急なり。然れども傳習隊の作戦巧みに妙を極め、更に高地を占むる陣形なるに依り、西軍、大兵を以て是を攻むるも、容易に進む能はず、大砲を並列して互に砲撃す。折しも薩軍は山手に深入し、迂廻して二俣本陣を襲はんとせしが、此時傳習隊を援けんとして來れる衝鋒隊と、俄然途中に於て相會し、隊士の惶擾殆んど混乱し、土崩瓦解となりて走り去る。かくて日も暮れ

て西軍は兵を引く。土方歳三、全軍に令して曰く、「敵、この山谷に在りながら、更に間道を迂回するに於ては、何れより攻め寄るか計り難し、さらば諸隊は、一同此岩砦に據り、今夜は徹夜の警戒を爲さむ」と。依て全軍は本陣に在りて戦守を固め、偵察を頻りに派遣して虎視す。果せるかな、西軍の夜襲は、大呼稀突の勢を以て、二俣本陣にと攻め来る。蝦夷軍の砲兵隊、西軍を大陣地の中に收めて、巨弾を注ぐこと猛烈。さる程に、西軍歩兵は砲弾の下を潜行し、鳴りを殺して、愈々本陣の砦下に進み、突如として弾丸を雨注す。蝦夷軍、此襲來に驚き立ち、俄かに榴弾砲を呼び寄せて、縦横無盡に亂撃すれば、電光石火、爆裂四方に轟き、天爲めに崩れんとす。

兩軍の戦闘日夜に兼行し、十三日の曙光、ほの／＼と東に昇る。されど曉霧は益々曇み、兩軍の對峙解けず。茲に於て、蝦夷軍は大霧に乗し、衝鋒隊を先鋒として、西軍の疲勞を衝くに閨を擧げて發す。參軍大川正次郎、同大島寅雄、同島山五郎七郎等衝鋒、傳習の諸隊を督して、急轉直下砦下を掃蕩し、逃ぐるを追つて、遂に弘軍の陣に迫る。弘軍堅守銃を亂發して、相接戦

する程に、その薩軍は大野、松前の敗軍を還り返して、大に島山の陣を横撃するに至る。左右の猛撃に、島山、遂に敵する能はず、百歩を退きて是を防げば、二俣の本軍横背に進みて、西軍の足もとに銃を發す。西軍惶擾兵は疵れて起つ能はず、土崩瓦解となりて遠く引く。さる程に、西軍荒手の精銳は忽ち攻め來りて、肉迫捲土重來し、左翼に銃手を保つて、抜刀して進み來る。蝦夷軍殊守尙當る可らず、退きて再び岩砦に據りて是を防戦す。西軍益々後續兵を増し、一舉に此所を抜かんとして、突戦前日の談に非ず。龍爭虎鬪、砲銃の亂撃彼我に起り、隊士の殲るゝもの其數を知らず。されど此所は難攻の要害地、守備兵は僅かに五ヶ小隊と雖も、西軍大勢七連發の元込銃隊に當つて、優に是を支ゆるに足るもの。二晝夜に亘る攻防の激戦、蝦夷軍の一銃千發を放つて、銃身既に熱し、冷水を桶に汲み取り來つて、砲銃を是に浸しつゝ、發銃益々頑強也。されば西軍の鐵砲も發熱全く用を爲さず、浸水の餘暇も無き壓迫に、今や屍山血河となりて、苦戦大敗、日の暮るゝを待つて、遂に潰え去る。此戦争に於て、蝦夷軍は三萬五千の銃弾を要したると云ふ。

時に木古内進撃の西軍第二軍は振はず。二俣口の敗戦に顧みて、參謀の面々大に作戰に行惱むと云ふ。即ち茲に於て、兩軍合撃の議は起りて、一舉して木古内を抜き、こゝに濱手本道の攻め口を開くに至りて、再び援を送りて二俣口攻撃の策を決すと。

四月二十二日、西軍再び攻め來る。蝦夷軍尙岩岩に就きて、防戦猛烈を極む。茲に於て、西軍は戦鬪愈酣となるに至りて、餌兵を残して、主力を退却せしめ、是を左右に伏して、彈を込めて待つや。蝦夷軍早くも西軍の敗走と察し、是れを尾撃するに本陣を發す。西軍の餌兵は殘壘を保つて、力拒堅固。大島參謀、大兵を率ゐて來り是を侵さむとすれば、餌兵の頑守忽ち崩れ、兵器を捨て去る。大島、尙も是を尾撃して、攻め入ること十數丁。忽ち轟く左右の砲聲、西軍の反撃陣は叢林に現はれて、彈丸雨注して勢甚だ熾ん也。大島こゝに膽を潰し、土崩瓦解となりて、横道に走り去る。

四月二十四日、天、曉を報す。砲聲轟々四面を破つて、二俣口の總撃は西軍の總勢を以て、捲土重來す。更に參謀駒井正五郎は、間道軍を起して薩州

長州、土州、藝州、松前の諸軍を率ひ、深谷を渡り、峻壁を攀ち踏み、二俣本陣の後背を衝かむとす。かくて弘軍及び長軍は先陣の勇を揮つて、再び岩下に突進すれば、此時既に蝦夷軍の作戰は成り、大陣地の砲門は四方に發火して、猛威は愈西軍を壓するの概あり。此時に當りて、督將土方歳三は、數百の大兵を率ゐて、関を擧げて陣を發す。捲土重來、一撃を以て長軍を碎き、弘軍の陣を崩して、益々四方に亂撃を加ふ。參謀駒井正五郎、高きに在りて是を望み、味方の敗勢に憤激止まず、大聲を發して、是を叱咤する所ありしも、遺憾ながら敗兵の耳には通せず。茲に於て、駒井參謀は、二俣後背の進撃を止め、全軍を激督して山を駆け下り、大に土方と勝敗を決する所あらんとす。土方、前後に敵を受くるに至りて、百歩を退きて駒井と相接戦す。激闘數合、龍爭虎撃の間に、駒井は猛然蹶起して、土方の戦守を蹂躪するに至る。茲に於て、本道の西軍は大に勢を得て、駒井に續いて突進す。土方、遂に殊守及ばず、退きて再び本陣に頑守す。駒井參謀、益々兵を進めて、後背を顧み、後續兵の遲きに憤慨して、大聲を發して是を叱咤すれば、隊士は

ろくに戦はずして、みな後を望みて、結束大に弛む。此間に於て、衝鋒隊は高きに陣し、畠山參軍と共に、俯瞰して駒井を猛撃す。駒井、衝鋒隊の接戦劣る可らざるを見て、又もや岩を駆け上り、勇往決戦、遂に畠山を破つて一陣を奪ふ。折しも駆け來れる大川參軍、衝鋒隊の敗士を加へて、大呼して迅雷す。駒井、是に接戦して堅守奮闘。忽ち飛丸は駒井の胸を貫き、西軍の志氣頗る沮喪す。大川、一勝に乘じ馬を陣頭に躍らせば、全軍抜刀鬨を舉げて亂入す。決戦離合、激闘慘を極めて、西軍はみな山を駆け降りて、一呼して二、本陣に迫る。兩軍の混戦砲銃亂撃し、龍争虎鬪となりて血戦四方に起り、攻防の烈戦今や屍山血河となりて、勝敗決せずして日は暮れたり。然れども西軍必死の勇猛ありと雖も、百計將に盡きむとして、兵を收めて大に議する所ありき。かくて蝦夷軍は益々防備の嚴に就きて、四月二十九日を迎ゆれば、急騎は五稜郭の本營より來つて、總軍の引揚を令するに至る。蓋し此時既に濱手本道は破れ、味方矢不來に崩れ、有川、七重濱等は悉く瓦解して、總軍五稜郭に立て籠るに至りて、本營の危機且夕に迫ればなり。茲に於て、督將

土方歳三は慨然として、天を睨むで大息あり。さらば是より敵を五稜郭に受けて大鳥圭介と共に防がんと。其の夜の中に二俣を發し、長驅して間道より五稜郭の本營に向ふ。

〔二〕二俣口の敗報

それ蝦夷軍の二俣口防備こそ、實に難攻不落と云ふべし。されば自然の要害と敢死勇猛の蝦夷軍とは、共に持久を以て西軍を壓するに足る。然れば兩軍の接戦屍山血河の陣となりて、西軍は數萬の彈丸と數百の死傷を捨て、遂に其要塞を抜く能はず。何ぞ二俣口の頑強なる。西軍は屢々突破を企て、死力を盡すこと苦闘連敗、將に百計つきむとして憂苦愈大なり。蓋しこの死地の陣に、徒に時日を空費するあらば、西軍の敗陣は却て是が乗する所となりて、蝦夷軍勢を増大するに至るなきか、木古内抜けず、二俣頑強なり、果して然らば、此間に於て、二俣口敵兵の逆撃と爲らば如何、大勢一撃最早西軍是を防ぐに兵員尙足らず、延ては木古内味方の安危を左右するに至るべ

しと。即ち二俣口攻撃の西軍參謀に於ては、左の報告意見を發したりと云ふ

七八

去ル十(約七八字不明) 藝州、筑州、查根、津輕(此間約二十字程不明) 勢一手ニ、再度二俣口ヲ討立候處、賊徒大勢胸壁ヲ築キ各山上險阻ニ據リテ、大小砲ヲ討立候故、味方モ不敗ニ専途ト戦候へ供、味方勢手負甚タシク且煙硝缺乏致候爲メ、一ト先ツ味方勢ヲ引揚ケ土州勢ヲ偵察ニ殘シ候、元來二俣口之儀、味方ノ配陣常ニ賊陣ヨリ伏射ニ有之(以下七八字程不明) 賊陣左手へ相廻シ後口討立ノ手筈ナリシ味方勢モ、卒然賊徒ノ逆撃ヲ受ケ防キ兼ネ、是レ又引揚ケノ有様ニテ候、其後再三軍配致シ進軍攻立候處、賊徒以前ニ倍シ、人數入込多勢ニテ押立候へハ、味方一齊トナリテ大小砲ヲ發砲ニ及ヒ候處、賊仲々不退夕六ツ時頃ニ至リテ、賊徒再ヒ以前ノ胸壁ニ戻リテ發砲仕リ、以來晝夜ニ亘テ憤戦仕リ居候、賊人數ヲ人替立替攻口ヲ防キ、味方攻メ立テ誠ニ困難、目下ノ味方人數ニテハ逆モ不叶、

賊勢多衆押寄スル時ハ味方危ク、從テ木古内後口ヲ喰ヒ止メラレ候テハ一大事ト、日々ニ深慮仕リ居候、就テハ今ニシテ援兵大勢有之候ハ、賊陣攻立容易ニ御座候へ供、是ヨリ却ツテ合兵シ一舉シテ木古内及ヒ矢不來ノ賊ヲ討拂、二俣援道ヲ絶ツコソ良策トモ愚察仕リ候、右ハ何レトモ多急ノ御明斷專一ト申進候

四月十八日

二俣口參謀 片山 米 右衛門

依之看定、二俣口蝦夷軍の要塞突破を斷念し、海岸線に西軍主力を傾注して、矢不來方面に轉回すること、一舉兩得の計略と爲すにあり。西軍の敗陣今や餘兵なし、其木古内方面に於ける賊將は、其名も高き大島圭介と思ひば木古内を崩すは目下の大要務なれ。然るに第一軍は福山方面にて遮斷せられ第二軍の全力を以てするも、木古内未だ抜けず、其二俣口敗勢と聞きては、片山參謀の言は、誠に價値ある謀略と云ふべし。茲に於て、西軍は全力を擧

げて、木古内要害の突破を企て、二俣口第三軍の主力を注くなり云ふ。

二俣口西軍の内情や、それ右の如し。然るに蝦夷軍は由を知らずして此所を解く。若し二俣口要塞司令官たる土方歳三たるもの、此内情を知るに於ては、必ずや躍進して圭介と呼應したるなるべし。さても危き所なりけり。然れとも斯く相成りては、蝦夷問題も逆轉したるなるべし。大鳥圭介、軍略ある督將と雖も、戰陣常に海老の如く、徒に退却するは不運の爲めなるか、土方歳三沈勇剛邁と雖も、防禦にのみ留意し、西軍餌兵の實情偵察を閉却したる缺點あり。左るにても、木古内及び二俣間に於ける蝦夷軍に、作戰連絡の無かりしが、先以て御目出度事共と云ふべし。

〔編者曰く〕後年榎本子、大鳥男、人見勝太郎氏及び佐々木京運氏が一盤に於ける回舊談に、二俣口の實情話頭に上りしとき、榎本子、盃を捨て、机を叩きて大息せり。それ或は然らむ、さても痛快と云ふべし。

木古内の要塞

〔一〕木古内侵入と蝦夷軍の防備

木古内は蝦夷軍南方の要害にして、福山方面蝦夷軍と共に、南海岸本道の防禦地たり。されば乙部村上陸の西軍第二軍は、松前、弘前、肥州、水戸、長州、薩州、藝州の諸軍總て二千餘人、人跡絶へし山手を間道して、險難を凌ぎ、山又谷を犯して、四月十日を以て、木古内を北に去ること二里有餘、山中の要害に至りて、野營の陣を張るに至る。

此時に當りて、木古内守備の蝦夷軍を見るに、彰義隊二小隊、守護隊三小隊にして、太田貞恭是に督將たり。四方晴朗たる日中の天空も、夜半に至りて、暗雲曇みて雨も落ちむとし、遠く吠ゆる野犬の聲々も、一層の寂莫を告ぐる眞夜半、西軍騎馬斥候隊は、突如として彰義隊の番兵所に亂入したり。時恰も露營に疲れし番兵の事とて、多くは就眠に在りけるが、忽ち十數の隊士は斬殺せられて、一營惶擾漸く身を以て遁れ、直ちに急を本陣に叫ぶや。木古内よりは、早馬を以て、變報を本營に送る。

茲に於て本營よりは歩兵、守護、傳習の諸隊を送り、陸軍奉行大鳥圭介は木古内要塞司令官として、陸軍教師フノウネ、隊將本田幸七郎、手代塚朝負

を従ひて、馬を驅つて五稜郭を發す。かくて四月十二日の東天も白み渡れば大鳥圭介は守護、傳習の諸隊を督し、間道口を偵察せむとして。木古内を去る一里餘の地點に達しけるが、忽ち砲聲の林間に響き渡りて、西軍の一族は現はれ来る。圭介、全軍を撤兵して銃を發せしが、弘軍は山間より突進して蝦夷軍横背に迫れり。されば守護隊は見る／＼山を駆け上りて、勇往決戦遂に是を斬り捲くり、銃口を並列して一齊に攻め立つれば。西軍千兵の陣は、此間に於て躍進を開始し、四方の森林より現はれて鬨高し。圭介、隊士を叱咤して防ぎ立ちしも、西軍大兵の陣容に、その抜くべからざるを見て、兵を纏めて退却を始む。時に有川の營に在りし星忠狂、守護隊を卒ゐて、長驅して木古内に來れば、砲聲連りなるに驚き立ち、勇み勇んで間道を發す。されど此時既に味方引揚げとなりて、雜木林に於て相會す。折しも間道を迂回せる西軍の一族、蝦夷軍の退却を見て、岩壁の險に據り、突如としてその足もとに現はれたり。圭介、卒然の發銃に狼狽し、百歩を退きて戦守を張りけるが、星忠狂是を望み見て、憤激止まず。陣頭に在つて部下を督噴して曰く、

敵は僅かに三百の弱武者、何ぞ恐るゝに足らん。我等が磨ぎし仙臺六十二萬石の一劍、大に是を斬り崩して遣はさんと。馬を躍らせて、進撃を令するや。守護隊、勇奮闘も高く、唯た一と筋に突進す。大鳥圭介、即ち星を助けよと一令を降せば、總軍早くも刀を抜いて長軍に逼る。長軍、頑守して是を防ぎけるも、星忠狂の突撃に今や血戦となりて、混戦激闘大敗して潰え走る。

四月十三日の中空は、流星照々として、午前三時を報ず。折しも間道にありし彰義隊は、恟々として一度に退却し來る。蓋し西軍の總攻撃を開始したるなり。依て蝦夷軍は守護、傳習の諸隊を間道に前進せしめ、歩兵、彰義の諸隊を山頂の要害に送りて、西軍突撃を扼守するにあり。かくて夜の明くるに従ひて、曉霧は疊まり來つて四顧冥瞭。今や宇内暗々として咫尺を辨せざるに至る。適々ほの遠きに當りて、砲聲かすかに數發、西軍は前進に當りて、蝦夷軍の所在を發見せむとするに、虛砲を以て應砲を誘ふもの。濃霧徒に四面を包み、暗中は人馬の物音のみ騒然を極む。茲に於て、守護、傳習の諸隊は彈を込めて號砲を放てば、西軍、是に呼應して、咫尺を四方に取るも、目

指す敵陣は容易に知る能はず、砲聲轟々百砲のとりもろきも、濃霧を透して砲弾徒勞にあり。かくて曉霧は次第に走り、兩軍の所在も明かとなりて、四方の西軍には進撃起れり。茲に於て、守護隊の猛撃も起り、彰義隊の巨門は發火し、更に大砲隊は山用砲を曳き來つて、連りに撤彈を發す。彈丸交叉戰闘いよ／＼酣となりて、隊士の殫るゝもの其數を知らず。此間に於て、西軍は精兵を結束せしめて、大呼の突撃捲土重來す。然れども蝦夷軍は防戦必死を盡し、四方より撤彈を注ぐこと、雨霰も異ならず。西軍苦戰遂に是を抜く能はず、總軍各部署の兵を纏めて、山奥に退却するに至る。茲に於て、蝦夷軍は追撃せんとして、山頂より駈け下れば、大鳥圭介、全軍に令して曰く、四方は、霧未だ深し、諸士、無謀に深入して、敵の奇計に陥るなしとせず、然らば此所に在りて敵を防がむと。

惟ふに木古内の與奪は、知内及福島方面に於ける蝦夷軍の保全と、東方五稜郭を保つに當りて、其安危を左右するの要衝の地たり。然れば西軍にして此所を抜くあらば、即ち第一軍と挾撃して福島を屠り、大呼猛突して、五稜

郭に進撃し得る有利の陣形となるなり。是に依て是を見れば、木古内の地點は、中央絶大の要衝として、兩軍是を争ふに必死の全力を注ぐ所たり。されば蝦夷軍は此要害を保つに、南は知内より、北は泉澤に至るの間を戦線區と定め、主力を間道山手方面に注ぎて、大に嚴備を盡す所あらむとす。茲に於て、木古内川の流域には、深く探索を送りて警戒怠りなく、その木古内に通ずる數條の道路には、大木を倒し、横障を築き、所々に當りて道を崩し、柴壘四方に配置して、外圍の防備を施し、更に麓附近の民舎は悉く燒盡し、以て西軍の宿陣を防遏する所ありき。

蝦夷軍外圍の防備成るに於て、其部署を定むるに、先づ福島屯營の陸軍、彰義、大砲の諸隊が固めし知内の要害と、會津遊撃、神木の諸隊が據りし一ノ渡峠とは、是を以て木古内後背の防備に充て、而してその東方本道口は、遊撃、歩兵の諸隊を以て、札刈及び泉澤の要害を固めしめ、是を以て木古内戰闘と矢不來の防備を兼ねしむ。時に東海岸鷺の木及び森に在りし衝鋒隊、木古内の戦雲を見て、遠邊地に長驅し、傳習隊は茂邊地を出發して、矢不來

間道に陣す。然るに蝦夷軍の偵察は、西軍の進撃一意木古内に注ぎ、威勢甚だ熾んなるを報するに及んで、急騎を以て札刈に令し、遊撃、歩兵の諸隊を此所に加へ、守護隊と共に木古内を守らしむ。さればこの景況に望み見て、五稜郭の本營に於ては、尙も防備を保たむとして、砲兵指圖役中川長五郎をして、巨門を率ゐて來り加はらしむ。

〔二〕木古内の戦

西軍、四月十日を以て、木古内侵入以來、こゝに接戦を重ねること三回、烈戦當る可らずして、兵を遠く引き揚げて、その二俣口西軍と合撃の策を決す。茲に於て、十九日の夕を待つて、總軍は進撃陣を作り、夜間の行軍を續けて、いよ／＼木古内に向ふ。

四月二十日の曉天は濃霧に包まれて、露營に明かす木古内山手の守備兵も連日の疲れに夢も深し。此時に當りて、四面騒々人馬の聲々夥しきに、番兵突起して警報を發しけるが、見る／＼火の手は遙かに昇り、是を合圖に、西

軍大勢は猛突して山手に迫り來る。星忠狂、守護隊を激督し、稻荷山の嶮に據りて、大に防ぎ戦ふ。さる程に、西軍の一手は東裏海岸に現はれ、大砲六門を以て、濱手の陣を攻撃す。茲に於て、守護隊指圖役堀口武泰は銃手を進めて防戦必死なり。砲兵指圖役中川長五郎、高きに在りて部下を指揮し、四斤旋條及び山用砲を以て、東裏の西軍陣を連撃し、こゝに兩軍の戦鬪はいよいよ酣と爲る。されば遊撃隊長伊庭八郎は、西裏より進みて、西軍横背を衝いて猛烈を極む。時に山手の西軍は躍進して、いよ／＼稻荷山に迫る。守護隊堅守して、大に防戦する所ありけるが、衆寡敵する能はずして、將に瓦解せむとす。折しも守護隊頭取武藤清秀は、恟々たる隊士を叱咤して曰く、人數の多少はあれども、敵勢何んぞ鬼神にも非ざるべし、我れに續ひて進めや進めと。劍をヒラ／＼山を駆け降りて突進す。武藤、スベンセルと云ふ銃を發しつゝ、弘前、松前の陣に亂入して鏖戦苦闘、飛丸來りて遂に胸を貫かる。嚮導役島津利藏、武藤の横はり居るを見て、敵に首を渡すは武門の耻辱なりとて、唯一劍にその首級を取り、是を荷負つて而して走る。

かくて濱手の西軍は馬首肉迫して、僅かに二三丁のこなたに來る。守護隊頭取堀口武泰、全軍を砂地に撒兵して、漁舟を楯として防戦しけるが、薩軍濱手の艇より躍進し、一舉して本陣を抜かむとす。されば大砲隊は是を防ぐに撒弾を發し、彈丸雨注して、薩軍を苦戦せしむ。時に巨丸は來つて、隊將中川の左腕を抜けども、尙偏せず。成田清則と共に、大砲隊を進めて、益々彈を込めて遂に薩軍を破り、勢に乗じて破裂彈を連發し、西軍の中堅を崩して、抜刀隊を躍進せしむ。成田、先陣の勇を揮つて、亂陣に斬り入れれば、西軍遂に血戦に斬りまくられて、大砲の火門に釘を打ち込め、是を置き去りにして而して走る。

かくて山手の戦鬪は、守護隊、遂に圍みの中に陥ち、遊撃隊は草野の間にありて、西軍大勢の陣に迫る。隊長伊庭八郎、奮然として陣頭に進み出て、銃手を督して突戦す。龍争虎鬪、遂に血戦陣と化し、人馬亂れて争鬪悲惨、伊庭、遂に數手の傷あり、血を拭えつゝ馬を馳驅して狂奔するも壯烈なり。隊士、その鮮血淋漓なるを望み見て、伊庭を病院に送らむとしけるが、伊庭

大喝して曰く、武士は血を恐れて何かせむ、我既に敵數十人を殪せり、諸士我れの如くあらば、敵を屠る此時なりと。而して馬を躍らせ、劍を揮つて發す。雄然たるその姿、血陣に亂入して、伊庭遂に薩將に組打ち、重傷を負ふて落馬す。豪傑伊庭八郎、五稜郭に送られて、後ち死す。副隊長澤録三郎、伊庭に代つて猛然たり。時に守護隊長星忠狂、稻荷山の圍みを斬り破つて、單身血陣にとにげ來る。曰く、澤君、君も此所にありけるが、味方は既に退去せり、今一應此所にて戦はむ、我れ包圍を受けて馬を殪せり、然らば君駈け付けて味方と呼び返せと。澤、是を快諾し、馬に鞭つて而して發す。敗兵再び來つて必死の防禦を張れども、疲れに疲れし敗兵とて、命令意の如くならず、依て星及び澤は共に抜刀して長軍に迫る。鏖戦苦鬪、遂に利非らず、遂士の疲勞戦ふ能はざるに至りて、日は暮れたり。依て西軍は木古内の近傍に在りて、夜暗蝦夷軍の疲勞を衝くべく兵を引く。然れども蝦夷軍是を知らず。此激戦に於て、西軍は木古内を引揚げたりと雖も、思ひは今や戦線に在り、更にその福島方面は、既に西軍の壓迫嚴なるを以て見れば、その福島方

九〇
面の西軍が出動するも、將たまた木古内口西軍が迫るとも、何れにするも知内及び木古内は愈々危急存亡の時と爲りたり。されば大鳥圭介は是を憂ひて諸將と作戦を議して曰く、今にして知内の蝦夷軍を引揚げて、而して主力を泉澤に注ぎ、以て後事を畫するに如かしと。茲に於て、敗兵を泉澤に進發せしめ、木古内には寡少の守備隊を止めて、自から知内に趣きてその夜の内に歸陣せむとす。

時に西軍の木古内偵察は、頻々として夜の更くるを待ち、その寡兵の守備なるを察知して、俄かに大兵を進め、此所を屠つて、蝦夷軍東西の連絡を絶つに至る。されば泉澤の蝦夷陣たるや、一營惶擾殆んど爲す所を知らず、暫しは呆然たるものありけるが、さるにても大鳥圭介等の知内軍を憂ひて、こゝに總進撃戦を起すに、傳習、衝鋒、遊撃の諸隊は本道を進み、守護、歩兵の諸隊は間道を進んで、木古内に向ふ。札刈に到る。果せるかな、西軍の先鋒は既に札刈を領し、川を挟むて、突如として巨弾を送る。然れども蝦夷軍の砲射の陣は、木古内回復の勢なるを以て、戦闘頑強にして、益々猛弾を以

て呼應す。砲聲轟々天地に呼動して、知内の空に傳へて黒雲來る。忽ちにして大風は海上より吹き上げて、四面は震動迅雷も雷ならず。此時に當りて、大鳥圭介は諸將を會し戦守を議して曰く、砲聲の遙かなる、定めし木古内の合戦なるべし、我軍此所にみすゝ敵の迫害に瘡るゝより、此大風に乘じ敵の後背を衝き、總進撃して泉澤の味方に合するに如かずと。彰義、陸軍、會津遊撃、神木、砲兵の諸隊を以て、大鳥圭介、自らは率ゐて知内を發し、また木古内に向ふ。總軍早くも驛邑に迫れば、泉澤口出發の味方も、既に河を渡りて攻め立てければ、こゝに東西挾撃の陣を保つて、砲撃頗る峻烈を極む。更に蝦夷海軍回天、蟠龍の二艦は、遙かに木古内沖合に航きつけ、海陸三方今や一手となりて、猛弾を注ぐに至る。西軍、三面の大敵を防ぎ、必死を盡して、陣壘を固守すれども、爆裂四方に飛び上り、巨弾は頭上を掠めて而かも兩道の進撃は益々迫りて、隊士の瘡るゝもの其の數を知らず、西軍いよく苦戦となりて、更に折柄の大風に燭煙渦き起り、滿目悽慘を極めて、みな間道に遁れ去る。時に泉澤出發の間道軍は星忠狂と三木軍司に率ゐられ

遙かに木古内山手に在りて、既に／＼後を喰ひ止めて、彈を込めて是を扼するもの。西軍みな山手に通れて混乱すれば、蝦夷軍の猛撃に殲るゝもの數十人、遂に四分五裂となりて退走す。茲に於て、蝦夷軍は再び木古内を恢復し、總軍結束意氣昇天の概あり。木古内の恢復戦、蝦夷軍は快哉を拍せば、一方その福島占領の西軍第一軍は、直ちに知内を領して、是より又もや木古内に迫らむとし、更に軍艦を海上に出沒せしめて、泉澤沿岸に雄視せしむ。茲に於て、木古内の戦争は、刻々として迫り来る。翻つて蝦夷軍の戦闘力を見るに、連日の接戦に彈丸甚だ消耗し、而かも一度此所に砲聲舉らば、知内の西軍と木古内山手の西軍は、必ずや總起して迅來するは必定なる所、兩道の大敵には、防戦如何に勇猛なりとて、衆寡の敵す可き所に非ず、然らば此所は攻むるに易く、守るに難き不利益の陣地なり。我軍、此所に殊守せむよりは、是より矢不來を固め、一朝の變に當りて五稜郭を背後に戦ふに如かすと。是れ即ち大島圭介の戦略にして、客歲奥羽の戦場に、自ら徳川脱藩浪人軍の督將として、宇都宮に敗れ、日光に敗れ、石筵に敗れ、塩川に敗れ、到る處に

敗れし上句は、米澤に走り、福島に遁れ來りし退却の兵法こそ、夫れ海老戦略の然らしむる所、今や再び蝦夷戦場に於て、遺憾なく其本領を發揮したり。さりながら、大島圭介は倔強の戦畧家ながらも、是を不運の立場に置くこそ海老將軍なれ。然りと雖も、激戦あるも隊士を失はざるは、確かに戦畧家の戦畧家たる所、名將の眞價は此所にあるべし。圭介、敗北の都度平然として曰く、勝敗は兵家の常なれば、今勝ちて、夕に敗するも、當然の途なり。然れども、人命を傷ふことは、僅かの戦勝を見るよりも、主將たる者は尊重せざるべからずと。此言ありて圭介の過去始めて明瞭す。右に依りて木古内の要害に對しては、ノシを附けて西軍に進呈し、全軍みな矢不來の嶮に據つて力拒防戦す。

奥羽援軍と函館沖の海戦

曩きにオランダ船に托して、奥州仙臺に送りし蝦夷軍の密使は、無事萩ノ濱港に上陸せる以來は、變装して大に脱藩殘黨を叫合し、十數頭の密使往き

交ふ所聲援あり。奥羽敗賊悲憤慷慨の士、仙臺海岸に集まるもの既に一千餘人(或は六百)。明治聖代の世、天朝を忍び來りて、二ノ關源治是が督將と爲り、英船エーレンブラック號に委頼し、四月十四日を以て萩の濱を發し、今や脱人を滿載して、泉澤東海岸に停泊するに至る。時は蝦夷軍海陸並び進んで三道より迫り、以て木古内回復の折とて、援軍大に勇み立ち、直ちに戰陣に就きて、敢死奮闘する所ありき。さる程に、木古内戰爭も終りたれば、隊長二ノ關源治は五稜郭に到り、板本の命に依りて、部下二百人を割き、是を室蘭に送りて、警備の任に就かしむ。

蝦夷軍、木古内を捨て、いよ／＼矢不來に據るに至りしを以て、蝦夷艦隊も、是より函館に歸航せんとして、海洋を航き進む。折しも西軍艦隊は、蝦夷援軍輸送に當れる英船を追迹し、是れを撃破せんとして、遂に長蛇を逸し唯だ憤然として北航の途に就く海洋の沖合に。兩軍の艦隊は、四月二十一日、突如として相會し、兩軍の砲戰矢庭に起り、霹靂天を衝いて、四海を震動す。蝦夷回天、西軍の春日に當り、蝦夷蟠龍、西軍飛龍に向ふ。四艦の混

戰勇往邁進し、逆か卷く怒濤を蹴つて、互に巨彈を以て連撃し、砲煙海波を埋めて、勝敗遂に決せず。日、既に暮る。

四月二十四日、天、明かにして浪靜かなり。曉尙殘くして函館沖の西空には黒煙數條見る／＼天を焦し、威風甚だ熾ん也。蝦夷軍、是を遠きに望み見て早くも敵艦の襲來を察し、大砲に彈を込めて、其到るを待つ。果たして敵艦來る。甲鐵艦を旗艦にして、陽春、丁卯、春日、朝陽の西軍艦隊は、艦列堂々、艦旗を汐風に翻しつゝ、當別沖に現はれ來る。忽ち轟く甲鐵の號砲、巨丸は早くも函館灣に來つて、海水高く噴出す。茲に於て、蝦夷千代田は、渦を起して沖合に突進し、西軍艦隊の陣列を破るに、砲擊最も努む。西軍艦隊、千代田を包圍して、大に巨彈を注ぎけるが、忽ち回天、蟠龍の蝦夷艦隊は、二手に迂回して、等しく連撃を始む。かくて蝦夷軍辨天臺場も、この海戰に掩護して、猛撃百雷も雷ならず。海陸呼應の函館灣の海戰、黒煙天を覆ふて、砲煙海を埋め、兩軍の砲聲海陸に呼應して、烈戰壯烈なり。此時に當りて、回天より打ち出す重加農砲は、八十斤彈を連發して、銳意春日に迫る

春日、彈を避けつゝ縦横に馳驅せども、回天の連撃に敵す可らず、忽ち巨彈を受けて甲板に爆發す。蝦夷艦隊、僅かに三隻と雖も、猛彈を送りて縦横に馳驅し、かくて西軍艦隊の陣列を破つて、辨天臺場の着弾距離に諸艦を誘導するに至る。甲鐵迫る。茲に於て、辨天臺場の大砲は、敵艦を目掛けて、巨彈を注ぐこと數十發、巨彈數發甲鐵を撃つや、豈計らん板本の云ふ如く、甲鐵は彈を受くるも、平然として益々應戦す。此の時に至りて、富川臺場も呼應し、連りに西軍艦隊を撃つ。依て春日、丁卯の諸艦は、一直線に進み近寄り、等しく臺場を指して連撃すれば、彼我の砲彈は宙に交叉し、春日の打ち出す一彈、富川臺場の壘壁に破裂し、富川臺場の砲彈は、丁卯の甲板を抜くに至る。茲に於て、蝦夷軍の砲撃は益々峻烈となるのみ。されば西軍艦隊はその敵す可らざるを見て、逸早くも泉澤沖合にと退却す。

矢不來の戰

木古内の要害を捨てたる蝦夷軍は、長驅して矢不來の陣に據れり。夫れ此

地たる、五稜郭を背後に負ふの要害にして、西軍が蝦夷本營を衝かむとすれば、必ずや此地點に占領の實力を保たざる可らず、故に若し矢不來にして西軍の手に落ちなば、急轉直下五稜郭の落命を急ぐに至る。然れば蝦夷軍が敵を此所に導くは、己れの運命を短縮するものにして、木古内拋棄の祟と云はざる可らず。蝦夷南海岸の總軍、兩道今や引き揚げて、矢不來の要害に據つて防戦するは、實に必死の心血を注ぐ所、目前に西軍の銳鋒を控へて、急遽の防備いよゝ多端を告ぐ。依てその配陣如何と云ふに、山手には傳習、遊撃、砲兵の諸隊を置き、その天神森には衝鋒、會津遊撃の諸隊を配り、關門口の砲臺及び海岸筋の間道には守護隊を置き、本道は傳習、彰義、小彰義、歩兵、陸軍の諸隊を以て固め、更に彰義隊は茂邊地に至りて、大に虎視を張る。時に五稜郭に於ても、戦備を議して大に憂苦し。本郭常備の長加農砲及び二十四斤砲數門を送るに決し、砲兵指圖役佐々木京運、是を督して富川を固む。茲に於て、蝦夷軍の防備陣は、臺場胸壁を合算して二十六ヶ所と爲る。西軍第一軍は福島を發し、一千五百人を先發せしめて、泉澤に送れり。時

に英船にて青森港出發の援軍二千五百人は、愈木古内に上陸して、泉澤に進軍す。茲に於て、泉澤に駐屯せる西軍は、弘前、松前、柳川、肥州、藝州、土州、長州、薩州の諸軍總て四千人。是れを五百人つゝ八軍團に編成して、四月二十九日を以て、愈矢不來に向ふ。更に西軍艦隊は、陽春、丁卯を先鋒とし甲鐵、春日、朝陽、飛龍、豊安の諸艦を以て、等しく矢不來に向はしめ而して沿岸砲撃を開始するにあり。西軍の陣形愈成るに及びて、英米の軍艦は遙かの沖合に在りて、兩軍海陸の戦況を觀戦す。

本道の西軍愈茂邊地に現はれ來れば、其威勢甚だ熾んなるに、此所を守備せる彰義隊は、皆僻易して關門を捨て、走る。かくて西軍五百人の軍團は、山手本道海岸の三道陣を以て、いよゝゝ矢不來に攻め來る。西軍艦隊、是を遙かに望み見て、俄然として出動し、陸岸七八丁に來りて、轟然として猛彈を送る。さる程に、陸上の突進は、いよゝゝ急迫を告げ、その濱手に向ふ西軍は、岩に添ふて磯邊に現はれ、身體半は海水に浸しつゝ、一列となりて海を渡らむとす。守護隊、陣を隠して總軍水中に入るを待ち、銃口を一齊に並

列して、胸壁より狙撃すれば、天神森の衝鋒隊も是に呼應して、大に彈丸を雨注す。海中の西軍素より防ぐ能はず、狼狽して銃殺せらるゝもの數十人、遂に狂亂して本道口に走る。此時に當りて、山手西軍は藤澤の嶮を踏破して矢不來に連なる高峯に進み、また本道西軍も迫れり。されば蝦夷軍は、坂道を扼して是を防戦せしかど、西軍の突撃陣は、霹靂天地を鳴動し、砲彈を注ぐこと雨霰の如く、捲土重來して攻め立つるには、蝦夷軍も寡勢を以て、苦闘惡戦す。されど尙倔せず、益々結束して防戦頑強なり。依て西軍は新手の精銳を入替立替に攻め入るに、蝦夷軍の戦守も最早堪ゆる能はざるに至りて、本道坂道の上には、地雷火を埋没して、隊士はみな山手に走りて、大に間道口を防ぐにあり。而して彰義隊及び工兵隊の壯士は、その埋没地の附近に在りて、潜んで西軍の到るを要す。果せるかな、西軍の精兵は関を擧げて本道口を攻め上り、大呼猛突の威勢を以て、見るゝ坂を踰へて猛進す。勇士、早くも引綱を斷てば、爆裂凄まじく天を衝き、地雷火は噴煙渦き起りて、砂礫は四方に飛び上る。かくて地雷火の爆發所々各所、西軍即死するもの甚だ

多し。さる程に、甲鐵艦の打ち出す巨弾は、海岸の臺場に爆裂して、砲車を碎き、築立を崩すに至る。されば天神森は、今や海陸の攻撃に遂に守りを失し、參軍永井綾伸介、同天野信太郎等苦闘遂に起つ能はず、血染の討死となりて敗兵散亂、茲に於て、士官隊長瀧川充太郎は是を叱咤し、敗兵を集めて濱手を固守すれば、守護頭取太田貞恭も亦敗兵を率ゐて、頑強に濱手西軍に抗す。然れども大軍猛突の決戦には、遂に粉と碎けて、太田貞恭は腹郎を斬られ、大腸漏出して苦悶絶倒、後三日函館病院に於て死す。攻防烈戦蝦夷軍遂に混亂し、本道口も濱手も、今や一度に崩れて天地寂寥。守護隊長星忠狂悄然として陣後に落ち、進退こゝに窮して、鮮血迸る。折しも大砲隊指圖役今野七十郎は、身に數手の銃剣を得て、通れ／＼て此所に來る。兩士、劍を抜いて將に自害せむとす。隊士三浦富之助、傷を負つて遁れ遅れて、其側に横はりけるが、聲を聞き付けて、憤起して近寄つて曰く、矢不來破れたりと雖も、富川には三百人の味方あり、今自害に及ば、隊士瓦解せむ、渡海の約盟に背くこと勿れ、短慮の爲め大事を誤り給ふなど。憐れなるかな矢不來の

落武者。忠狂、思ひ直して四邊を見れば、戰場唯だ死人のみ残して、敗兵は一敗して富川に走り去る。忠狂等竊かに山手に忍び、而して富川に向ふ。

富川の戦

矢不來の戦陣龍争虎鬪となりて、西軍艦隊陽春、丁卯は猛弾を發して富川臺場を攻む。されば蝦夷軍には守護、大砲の諸隊、全力を盡して是を迎え戦ふ。烈戦奮闘、臺場の砲門みな二十四斤弾を吐いて、力闘頗る猛烈なり。硝煙朦々海陸に曇み、矢不來の砲聲と呼應して、天爲めに崩れむとす。此間に於て、砲兵指圖役佐々木京運は、長加農砲を指揮して、大に戦ふ所ありけるが、陽春艦は沖近くに迫りて、臺場を連撃すること甚だしく、爆裂四方に起り、臺場の損傷悲惨なり。蝦夷軍尙備せず、烈火の怒心是を陽春に注ぎて、巨弾を以て、四方より攻め立つ。巨弾連發見る／＼陽春に命中して、爆聲海を動かし、陽春の器械室に火色あり。依て蝦夷軍は凱歌を擧げて、益々彈を注ぐ。西軍艦隊、最早當る可からず、忽ち逆轉して遠く敗走するにあり。

さる程に、矢不來の砲聲は、俄然として消え去り、臺場の隊士は大に是を怪むも東の間、參軍梶原雄之助、疾驅して矢不來より來つて曰く、矢不來既に瓦解し、味方大敗今此所に來る、何卒味方を此所に喰ひ止め給へと。一言を捨て、梶原再び馬を飛ばして、而して走る。須臾にして、陸軍奉行大島圭介逸早く遁げ來る。圭介、踏み止まつて茲に在り、劍をヒラ／＼振りかざして、部下を此所に支へんとするもの。忽ち群がる味方の敗士、通れ／＼散り／＼混亂潮の押し寄するが如く、星忠狂等も山手より通れ來りて、こゝに一戰を決せざる可らず。茲に於て、士官隊は急走して山手を固め、守護隊は本道に撤兵し、砲兵隊も配陣して、敗兵を支ふる程に、濁川の陣を解きて駆け來れる杜陸隊、これも亦來り會するあり。依て杜陸隊は、富川の西裏より直ちに山手に進み、山口朴良、傳習隊を卒ゐて三ッ谷に陣す。蝦夷軍の防備多急なる折柄、西軍大勢の陣は、一手となりて山野を押しこくり、砲銃を連撃して、攻め寄せたり。蝦夷軍の守備は、こゝに至つてみな動搖し、見る／＼本道口は崩れて、西軍は轟入す。依て星忠狂は、三ッ谷に是を防がんとて、

兵を進めて駆け付けば、山口、嘆息して杜陸隊の安危を叫ぶ。星、愕然として山手に急走すれば、進むこと五六丁、何ぞ計らむ杜陸隊は今や重圍に在りて、悲鳴高し。星、決死の勇を揮つて、包圍陣中を衝き、血戰激闘漸く血路を開きて、富川の本道に來れば、味方の大敗西軍突進の後にあり。

有川の戦

富川の一敗、尙蝦夷軍は有川の殘壘を固守して、一步も退かず。本道富川口は二ノ關源治、見國隊を以て是を固めけるが、急轉直下に西軍は迫れり。然れども是を味方の退却と誤信して、其到るを油断せるも痛快なり。西軍一躍して本道を攻む。見國隊、恟々狼狽して殆むど戰守の策なく、今や土崩瓦解となりて潰え去る。折しも磯傳へに進み來りし西軍は、有川の南裏を蹴破りて、砲銃を四方に發して迅雷す。此時に至りて、富川の敗士は群がり來りて、勇往混亂、龍爭虎鬪、激闘慘を極めて、血戰四方に起る。かくて矢不來の難戰、飛報頻々、五稜郭の本營こそ、今や夜逃もせん窮態にあり。砲聲益

々切近するを聞きては、吼穴今や煙攻となりて、有繁は群蜂の大王と雖も、遂には吐き出されざるを得ず。茲に於て、副總督松平太郎は、兩眼血色して馬を驅つて来る。茫々たる草原大呼して大鳥圭介を探せば、圭介、エツクと起つて、有川の北裏より現はれ来る。されば松平は圭介を顧み、語氣を強めて曰く、足下此方を保つに非ざれば、吾事既に終ると。圭介雄然として四方の部署を馳驅し、大に全軍の志氣を激勵する所あり。かくて攻防の激戦に、西軍は益々進みて壓迫を加ふ。龍爭虎鬪、天地たゞ轟々として萬馬狂亂す。血戦數合、既に南裏は潰亂し、本道は崩れむとす。總督板本鎌次郎、馬を飛ばして来る。されど此時既に蝦夷軍は押しまくられて、戦はずして逃ぐる者數々、板本、劍を抜いて、敗兵を叱咤すれども、逃ぐる者には、更に聞き入る由も無し。されど板本の四邊に居残るもの、敗士尙七百、更に松平太郎の呼び戻したるもの二百餘人、大鳥圭介、衝鋒、遊撃、守護、陸軍の諸隊を卒めて、矢庭に弘前、松前の陣に亂入し、奮撃突戦、逃ぐるを追つて水軍の陣に向ふ。池田大隅守、また三百人の手勢を卒めて、大鳥を援け、遂に藝軍に

肉迫して敢死奮闘。西軍、志氣大に弛み、百歩を退きて、是を防げば、薩州長州の諸軍募進し來りて、大鳥の陣を斬り抜いて、益々猛突す。板本、馬首を揚げて、蹄底煙を起し、兵を叱咤して突貫す。激闘十數合、慘また慘を極めて、隊士は屍を踏んで血戦す。西軍、遂に僻易し、百歩を退いて銃撃尤も努む。されど蝦夷軍は益々奮撃突戦し、疾風迅雷、早くも藝軍を撃つて走らせたり。折しも横背に起る銃聲、蝦夷軍、愕然として是を顧れば、何ぞ山手の西軍の來り攻むるもの。茲に於て、西軍は再び盛り返し、捲土重來して兩道より躍進す。蝦夷軍衆寡敵せず、土崩瓦解となりて、退くこと二里有餘、龜田村と函館の追分地點に到りて、漸く疲勞を休め、而して五稜郭にとにげ歸る。されば有川より大野に來りし敗軍は、翌朝二俣口蝦夷軍と共に營に入る

蝦夷軍の夜襲と内憂

思ひは四月二十九日の連戦、矢不來敗れ、富川敗れ、有川敗れて、蝦夷軍は遂に函館の一角に走り去る。今までは遅々として進み越せし西軍、今日は

捲土重來して、大呼猛突の勢を以て押し寄せたり。蓋し西軍第二軍木古内を領して、こゝに凱歌を發するや。江差口第一軍は踴躍して、來り是に加はり更に二俣口第三軍の主力も來り投じて、今は南海岸西軍總擧の進撃陣、疾風迅雷も其筈と云ふべし。蝦夷軍たるや、連戦連敗、漸く五稜郭の本郭を殘すのみなれと、此敗戦未だ左程にも思はざるも、何の謂ぞや。他無し、蝦夷軍には五稜郭の堅壘ありて、その百十九座の大砲を恃めは也。

蝦夷軍の總勢も、有川の激戦に、今や五稜郭に逃げ來る。されば總督板本鎌次郎は、諸將を會し戦守を議して曰く、よし我軍前日來の敗戦、今や目前に敵を受くることも、この壘々たる石垣、濠々たる深濠と、巨數の砲座を以て固むる五稜郭に據る以上は、我軍連戦の大敗も、一擧を以て回復するは、決して難きに非ず、然らば是より諸軍は益々結束し、而して大に奮戦する所なる可らずと。茲に於て、守護隊を送りて、千代ヶ岡の要害を固めしむ。蓋し此所は函館に通ずるの要衝にして、中島三郎等の決死隊が警備する所、今や星忠狂と共に大砲六門を擁し、大に嚴備を期するにあり。此時に當りて、

西軍は有川突破の勢を以て、既に七重濱及び大川に迫る。實に四月三十日とす。而して二俣口退却の土方歳三は、間道を退きて大野に至り、直ちに五稜郭の本營に引き揚げ來る。かくて夜は深々として更け渡らむとす。大島圭介土方歳三は猛烈として、襲撃を暗夜に決行せむとして、陸軍、彰義、小彰義傳習、新撰、衝鋒、歩兵、遊撃、大砲の諸隊を率ゐて、七重濱に迫る。疾風迅雷、砲銃を四方より亂發して、肉迫頗る猛烈を極む。七重濱の軍營は、芳夢深くして、西軍の守備大に怠る。されば蝦夷軍の夜襲の砲聲に夢を破れば、營所の四邊は既に千兵の陣とはなり居たるに、恟々狼狽殆んど爲す所を知らず、土崩瓦解となりて、潰え去る。蝦夷軍、尙も是を尾撃して追迫一里、大野村と有川の追分に到り、火を民舎に放つて、大砲四門を以て是を攻めければ、逃ぐるに逃げし西軍の事とて、最早防戦の策計も盡き、挽き遁れたる大砲及び彈藥まで、みな此所に置き捨て、或は大野に走り、或は有川口にと遁れ去る。茲に於て、蝦夷軍は戦利品を收め、凱歌を擧げて歸陣す。かくて、天、曉を報ずれば五月一日、函館灣の形勢甚だ不穩なるに至りて

蝦夷軍は海上を警戒すること一層を加ふ。依て千代田艦を送り、その近海を巡視せしむる程に、七重濱の沖合に到りて、俄然船底に異常の轟音を發す。されば乗込員は愕然として色を失へ、此所を去らむとして、速力を早むる所ありけるも、最早船体は頑として動かす。乗込員はいよ／＼驚き立ち、百方是が出動を計れども、遂に進止を失して、淺瀬に乗り上げしを知る。茲に至りて、船將森本弘策は破船を命ず。士官大に諫むる所ありけるが、森本頑として聽かず。大砲の火門には釘を打ち込み、蒸汽機關は悉く破壊し、最早役に立たざる空船と爲して、端艇を卸して走り去る。破船事件は早くも本營に達す。總督の命は、是を函館陸海軍裁判局に送致せり。依て局長永井玄蕃頭は、船將森本の不法を宣告して曰く、元千代田艦船將森本弘策、自今苦業被仰付候事。即ち森本の輕擧は、船將俄かに夫卒と天降りし譯なり。依て千代田艦軍艦役市川直太郎は、大に其非を謝する所なかる可らずとて、回天に到りて將に自害せむとす。海軍奉行荒井郁之助、是を差止めむと駆け來りけるが、時既に市川は屠腹して、息は絶え／＼。蝦夷軍の五月一日は何の惡報の

吉日ぞや、千代田事件物議未だ去らずして、夜に入りて更に重大事件は惹起したり。そは辨天臺場偏指の有力砲たる、八十斤砲及び二十四斤砲の火門に對し、釘又は鉛を差し込みて、使用不能に至らしめたる事件あり。嫌疑暗々何人の作業なるを知る能はず。函館裁判局よりは永井玄蕃頭出頭し、取調峻を極むれば、砲兵取締齋藤甚三郎、早くも逐電せるを認めらる。茲に於て非常警戒を發して、是を四方に探索する程に、其人は濱手の藪陰に潜伏し居て、明朝拂曉を俟つて、今將に影を眩まさんとするもの。端なくも曉に至れば、水夫三人濱手を散歩せるに際會し、遁れんとして遁れ難きに至りて、遂に捕縛せられ、裁判局の宣告に依り、梟首の刑となる。函館の凶變愈人心恟々となるに至りて、蝦夷軍の落命は巷噂喧しきに至りぬ。風雲險惡軍氣の動搖は、最早挽回の策無きを望み見たる、蝦夷陸軍教師フリーネ等の一行は、其夜の中に相謀り、竊かに通れて波止場に到り、翌朝を待つて自國船に乗り移り、函館を去つて失敬するなり。

五月二日、春日、甲鐵、陽春の西軍艦隊は、突如として函館灣を攻む。回

天出て、是と戦ふ。されば辨天臺場も回天を援けて、頻りに猛弾を發し、大に西軍艦隊を砲撃す。砲彈飛交、回天の甲板に爆發し、春日のマストを折るに至る。回天、稍々速力を弛めて、次第に臺場の方に逃げ來る。西軍艦隊、是を追つて臺場に近寄れば、何ぞ計らん、臺場の砲聲は俄かに連呼し、巨彈を益々注いで諸艦を射る。西軍艦隊、逸早く其術計を悟り、速力を早めて有川沖にと遁れ去る。

西軍陸軍は七重濱及び大川を略取し、次第に蝦夷軍を壓迫するに至れり。されば五月三日となりて、千代ヶ岡警備の星忠狂は、昨今の形勢に憤激措く能はず、往いて榎本總督に議するや慎重なり。曰く、味方數々戦利を失へ、四方は皆敵手に陥りて、五稜郭及び函館の陥落は遠きに非ず、然らば今夜不意に敵陣を撃ちて、一方を破らむと。榎本、踴躍してうち喜び、我、大川の敵を憂ふる大なり、若し大川口にして敗れなば、五稜郭の危きこと、それ函館の談に非ず、依て今衝鋒隊を送りて赤川に陣を固め、此口を押し置けり、汝幸に赤川に到り、大に協力して是を守れと。星、欣然として馬を飛ばして

赤川に向ふ。かくて日は暮れて、天、雨あり。夜來の沙風俄かに大風となりて、天地暗々震動迅雷して、物情騒然を極む。茲に於て、五稜郭に在りては總攻の夜襲を議し、陸軍奉行土方歳三、馬を驅つて赤川に發す。陸軍奉行大鳥圭介、また七重濱を襲撃するに進發す。かくてその大川口は、守護、大砲の諸隊を以て本道を進み、而して村の入口を衝くものとし、衝鋒、會津遊撃杜陸の諸隊は各二手に分れて、左右の間道より攻め上るにあり。土方歳三、本道口に在りて、號砲を放たしむるや、三道の蝦夷軍は一齋に砲銃を亂射して、大呼猛突して大川に猛進す。西軍愕然暗夜混亂して、同志討に殲るゝも、其數を知らず。此時に當りて、遊撃、陸軍、衝鋒、歩兵の諸隊は、大鳥圭介と共に七重濱に迫り、火を四方に放つて、燒討すること猛惡を極む。西軍の苦闘今や右往左行となりて、最早敵する能はず、砲銃を捨て、有川に退走するに至る。茲に於て、兩道の蝦夷軍は凱歌を擧げて、未明に五稜郭に引き揚げたり。

〔編者曰く〕蝦夷陸軍教師フリーネ等の一行は、函館密走後横濱港に到るや、日本

政府は是が上陸を拒んで曰く、蝦夷密行の佛國人は本邦に在るを許さず。蓋し客籍江戸攻撃以來、外國船は局外中立の令を發したるに拘はらず、是を冒して蝦夷約盟軍に投したるの故なり。茲に於て、陸軍教師等は、其儘佛國に送り届けられたリと云ふ。

函館灣の砲撃

五月四日、西軍艦隊は再び函館灣を攻む。蝦夷回天、蟠龍の諸艦は出で、是と戦ふ。惟ふに蝦夷艦隊は今や僅かに二隻となりたれど、艦体の運用妙技に熟し、砲彈を避くるに奇効あり。かくて蝦夷艦隊は大に戦闘しつゝ、臺場の着弾地點に、西軍艦隊を誘ふに功妙を極む。されど西軍艦隊は、未だ是を感知せず。機に乗じて益々陸岸に迫る。春日艦、巨彈を連続して蟠龍を攻む。辨天臺場は驟然砲火を開いて、是を阻隔に努めしも、春日艦の巨彈は連りに蟠龍に命中し、爆裂今や機關に故障あるに至りて、戰場を去らざるを得ず。此時に當りて、回天より打ち出す砲彈は、朝陽艦の要部を破りけるが、忽にして甲鐵艦の巨彈は、臺場を襲ふこと連りなり。されど兩軍の海戦は、日の

暮るゝに及びて、互に砲を收む。

五月五日、西軍艦隊は函館沖に分れて、總攻の命を待つや。折しも甲鐵、朝陽の方面に向つて、一隻の船は徐々として、浪を分けて来る。諸艦、是を望み見て、遙かに蝦夷軍艦なるを知りしかば、早くも彈を込めて、その到るを待つ。果たして蝦夷艦は来る。諸艦、一齊に砲を發して是を攻む。蝦夷艦は尙悠然として益々進み来る。諸艦益々彈を込めて、大に連撃するに至れば、蝦夷艦は俄かに速力を早め、遂に甲鐵艦に向つて突進し来る。夫れ甲鐵艦は這去宮古灣に於て、既に、辛き經驗を有するもの、されば今又此景況に接しては、夫れ或は第二の宮古灣の活劇を繰り返し、我れを奪はむとして、厚顔にも迫り来るべしと早計し、逸早く砲を收めて横側には是を避く。朝陽艦獨り猛然として、蝦夷艦を横撃すること甚だしく、巨彈は悽聲を放つて、みな艦側を破りしも、蝦夷艦は尙も應ずる色なく、悠々として遂に二艦の間を通り過し去れり。依て諸艦はその異態に怪み、而して近寄つて是を見れば、何ぞ間然人無く、機器みな破壊し在るには愕然たり。是れ前日七重濱沖に於て、

淺瀬に乗り揚げたる蝦夷千代田艦、輒ち満潮に浮き上りて、流れ来るもの。茲に至りて、諸艦は是を奪はむとするも、手を出すに大に遠慮あり。蝦夷軍、是を遠きに望み見て、笑つて曰く、これ所謂死せる諸葛、生ける仲達を走らすと。

五月七日、西軍艦隊は有川を發し、愈函館灣に迫る。甲鐵、朝陽の諸艦は辨天臺場に向ひ、春日、丁卯、飛龍、豊安の諸艦は、蝦夷海軍の撲滅を計りて止まず。蝦夷海軍と云ふもの、残るは僅かに二艦のみ。砲戦天地を破り海浪逆上して、西軍艦隊の砲撃は開かれたり。翻つて蝦夷蟠龍艦は、五月四日の海戦にて、その損傷未だ修まらず。回天のみ出て、疾驅しけるが、諸艦連りに弾を注ぐも、回天の去來神速にして、運轉の妙技に空彈を勞する大なり。かくて辨天臺場の砲撃は、益々峻烈を極めて、回天と共に是を防ぐ。回天、去來出沒、有らゆる妙技を揮つて、西軍艦隊の中に闖入して、勇往決戦されど遂には敵彈を蒙ること、實に二十數發の損傷また是に伴ふ。然れども未だ偏するの色なく、大小の砲を連發して、諸艦を衝くこと侮る可らず。依

て甲鐵艦は、轟然三百斤彈を發し、大に回天を砲撃す。巨彈大空に鳴り、忽ち爆發して回天の蒸汽機關を碎く。回天、最早命路絶えたり。依て辨天臺場のほごりに航き付け、淺瀬に在りて浮砲臺と爲る。春日艦來る。浮臺の砲門驟然として是を防ぎ、巨彈數發見る。春日に爆發し、遂に艦を碎くに至る。西軍艦隊、尙迫らむとするも、今や水理を辨せざる所、後難を恐れて、遂に有川に引き返す。

大川、七重濱の戦

蝦夷軍の窮亡は、今や死地の境涯に瀕して、その西軍は兵を七重濱及び大川に注ぎ、戦備益々頑強となる。依て蝦夷軍は、五月八日を以て、大川口進撃として、未明に五稜郭を發し、總督榎本鎌次郎、いよ／＼陣中に出馬したり。彰義、陸軍、歩兵、小彰義、見國、神木、衝鋒、遊撃、會津遊撃、杜陸大砲の諸隊は大鳥圭介、土方歳三に督せられ、威風堂々石川に達す。茲に於て、大鳥圭介は衝鋒、杜陸、遊撃の諸隊を督し、山手間道に在りて、伏兵陣

を敷き、其餘の諸隊は、榎本鎌次郎及び土方歳三是を督して、愈大川口を攻む。然るに西軍は前日來の襲撃に顧みて、既に千兵を是に備ふるもの。攻防の接戦愈激烈となりて、土方歳三は原ノ手の野戦に敗る。茲に於て、西軍の逆撃は捲土重來して迫る。蝦夷軍遂に抜く能はず、退きて石川を固守し、防戦最も努む。龍爭虎鬪、勝敗尙決せず。依て西軍は尙も進んで、大に蝦夷軍を屠らんとす。折しも西軍の後背に起る砲聲、連撃肉迫して大鳥圭介の大呼、猪突する所彈丸雨注す、西軍こゝに挾撃を受け、狼狽殆んど戦守に苦しみ、部署壊亂して土崩瓦解となる。蝦夷軍抜刀して関を擧げて躍入し、血戦苦闘西軍遂に敗れて、日も暮れたり。

夜來の夜空には大風起りて天地雨あり。蝦夷軍鬼虎の猛將連には、衝鋒、守護の諸隊を以て、夜襲の密計は成りたり。守護隊長星忠狂、參軍島山五郎七郎、同大川正次郎等は、七重濱を攻むるものにして、衝鋒隊長古屋作左衛門、參軍梶原雄之助等は、再び大川に向はむとす。時に西軍は日中の戦闘に疲れて、枕高くして芳夢あり。その大川口に向ひし蝦夷軍は、軍營の四方を

包圍して、彈丸を雨注して攻め立てば、一營惶擾殆んど爲す所を知らず、死傷砲器を捨て、而して走れり。かくて大川突破の蝦夷軍は、長驅して七重濱に向ふ。時に七重濱夜襲の蝦夷軍は、藁、枯れ草等を携へ至り、是に火を發して深眠の軍營に投せば、煙硝火を發し、敷布燃え移りて、營内の大火何ぞ堪ゆべからず。西軍狂亂して右往左行と爲れば、此時大川口の蝦夷軍も來つて、肉迫迅雷して兵器を掠奪し、弘軍の主將高杉左善は、星忠狂の銳刀に首は落つ。

五月九日、大鳥圭介、八百の大兵を率ゐて、七重濱を襲撃しけるが、西軍は前日來數度の大敗戦に鑑み、有川より兵を注ぎて、大に七重濱を固むると共に、更に大兵を送りて赤川、大川を守るにあり。西軍勇猛、巨彈を發して是を防ぎ立つには、蝦夷軍も進む能はず。こゝに兩軍の接戦は百砲を以て對峙す。折しも馳せ來れる西軍の精兵、赤川及大川の陣を解へて、大呼して來り是を攻む。襲撃虎鬪、屍山血河の間に、蝦夷軍は愈苦戦に陥り、血戦激闘衆寡敵せず、遂に大敗して五稜郭にと逃げ歸る。

〔一〕包圍軍團と函館の防備

夫れ蝦夷軍の五稜郭に引き退くや。總軍大舉絶世の勇を揮つて、去來出歿一再ならず。大川、七重濱を侵して今や猖獗を極めたり。惟ふに西軍は、木古内突破以來、日々に攻撃の策を議すると雖も、元來蝦夷海軍の浮動する間は、總攻の策を決する能はざるなり。蓋し蝦夷海軍は、海事の妙技常に西軍を壓するものにして、是が沖合に雄視せらるゝに於ては、海上の危険、また總攻の軍團を輸送する能はざるを以てなり。然れば西軍が、銳意を函館灣に注ぎ屢々海戦を敢てしたるは、一に蝦夷艦隊の撲滅に外ならず。果して連日の海戦も、今や大功あるに至りて、蝦夷海軍も、海上僅かに、蟠龍艦を残すのみとなりたり。されば僅か一隻の孤艦、獅子呼するも、事茲に至りては、最早恐るゝに足らず。依て西軍有川の軍令部に於ては、五月十日を以て、愈函館總攻撃の令を發したり。而して春日、陽春の諸艦は護送の任に當り。豊安、

飛龍の諸艦及び萬年丸は、隊士を分乗せしめて、函館山の裏手に廻り、寒風澤より夜暗に乗じて、二千餘人を上陸せしめ置くなり。即ち是れ第一軍にして、明朝拂曉を待つて絶頂に陣するもの。更に陽春艦には一千人の第二軍を詰め置き、明朝の戦闘酣を俟つて、大森濱より攻め上らしむべく、尻澤邊に潜みて夜を待ち明かすもの。茲に於て龜田本道より五稜郭に備ふるに、第三軍として三千人あり。龜田海岸筋より一本木に亘りて、第四軍として三千人あり。大川、赤川、神山方面には、第五軍として三千人あり。その海岸は、甲鐵、春日、丁卯の諸艦を以て、辨天臺場に向はしめ、朝陽、飛龍、豊安の諸を以て、蝦夷艦隊僅か一隻の蟠龍に當るにあり。

翻つて蝦夷軍函館の防備を見るに、辨天臺場及び函館奉行所警備の外に、その一本木防備には、神木、護衛、小彰義の諸隊あり。龜田海岸には、守護大砲、見國、杜陸、會津遊撃の諸隊あり。而して陸軍奉行土方歳三の督する所とす。更に龜田本道は五稜郭の咽喉なる所より、遊撃、彰義、傳習、陸軍大砲、工兵、器械の諸隊を以て固め。陸軍奉行大鳥圭介是が總督將たり。そ

の大森濱手は見國、守護の諸隊にして、赤川方面は衝鋒、大砲の諸隊を以て守り、更に七面山の間道には、士官、歩兵の諸隊を向はしめて、いよく興廢を一舉に決せんとす。

一一〇

〔二〕函館の戦

十日夜來の曇雲も、東に走りて、天、曉を報すれば五月十一日。戦雲漸く熟して、今日は函館の總攻撃を決するの日なり。昨夜寒風澤に上陸したる西軍第一軍は、薬師山を乗り除いて、間道より函館を直下に迫らむとす。瀧川士官隊、七面山の嶮に據り、必死を盡して防戦すれども、西軍の突進は今や野山を埋めて、大呼して迫り來る。疾風迅雷、見る間に七面山を抜き、潮の如く押し寄せたり。甲鐵、春日の諸艦は、轟然として辨天臺場に迫り、霹靂天地を衝いて、巨弾を發射すること猛烈。依て辨天臺場は砲口を揃へて是に呼號す。須臾にして朝陽、飛龍、丁卯の諸艦は、回天の浮臺を目掛けて攻め來る。浮臺の砲門狂起して猛火を發せば、此の間に於て、蟠龍艦は浪を蹴つ

て諸艦を衝く。浮臺の防戦頑強なるを見て、山手の西軍は一躍浮臺を目掛けて猛撃するに至る。浮臺の蝦夷軍敢死奮闘、尙堪ゆる能はず、爆發今や八十有餘の損傷あるに至りて、最早役に立たず、茲に於て、浮臺には火を放ち、小舟に乗じて海中に遁れ、築島に上陸して五稜郭に走る。

陽春艦は第二軍を收めて、愈尻澤邊の海岸を發したり。依て蝦夷軍立持臺場は是を望み見て、巨砲數門を放つて、大に陽春を砲撃しけるが、航行早くも、彈を避けて走り去り、而して大森濱に現はれ來る。依て立持臺場に於ては、更に砲口を回轉せしめて、大に戦ふ折あらむと、砲手、大砲を動すに一心不亂。その間に於て、早くも曳き來れる小舟を放ち、總軍を大森濱にと上陸せしむるに至る。大森の第二軍は函館指して捲土重來す。かくて大勢に乗する松前藩士は、函館病院及び興隆寺の病舎に亂入して、暴戾酷虐、傷者を斬殺して、敢て耻ぢざるなり。されば歩行に堪ゆるもの、四方に難を通れしかど、歩兵隊長奥山八十郎は、今や重傷の身となりて、進止盡ならねば、遂に屠腹して死す。時にロシアの醫長來つて、大喝して曰く、非法者奴、病院

を何と心得るか、苟も傷病人は兵籍に非ず、本病院はロシア人の預る所、かゝる不法あらば是なりと。即ちピストルを空發す。松前士官遂に平伏して、詫びて而して去る。さる程に、大森突進の第二軍は、益々帳回して攻撃猛烈となりたり。茲に於て、函館奉行所、沖ノ口會計方并に此地警護の新撰組は五稜郭への通路絶たれて、永井玄蕃頭を始めとし、みな辨天臺場に引き揚げたり。

一本木本道を見るに、士官隊は殊死して關門を守るや。西軍突進猛烈なりとの報に接して、星守護隊は憤起して、千代ヶ岡を發し、長驅して地蔵町を保つにあり。果せるかな、西軍は前面人を以て埋め、皆砲銃を亂射して押寄せ來る。關門の蝦夷軍、堅守奮闘、大に本道を防ぎけるが、折しも尻澤邊上陸の西軍第二軍は、大呼猛突して横背に進み來れり。茲に於て、關門の蝦夷軍も最早防ぐ能はず、漸く一本木本陣にと血路を開けば、西軍第四軍は一呼して此所に迫る。蝦夷軍殊守胸壁を高きに築き、彈丸雨注して大に力戦す。然れ共西軍は銃に彈を込めて、益々猛進するもの。松軍一擧して、神木隊の

陣を衝くに至る。神木隊、必死の防戦を以て對峙頑強なり。此時に當りて、陸軍添役澁澤誠一郎は、小彰義隊を率ゐて、松軍を横撃す。激闘一敗松軍遂に抜く能はず、隊伍壊亂して四方に走る。肥軍來る。依て大砲隊は、猛然として撤彈を發し、肥軍を殲すこと、其數を知らず。藝軍來つて是を保たむとするも、蝦夷軍の砲彈に敵す可らず。隊士その進むもの、みな撤彈に殘れて今や西軍は大敗にあり。督將土方歳三、馬を躍らせ全軍に令して曰く。敵は大勢なるも恐るゝに足らず、我軍この胸壁に據りて飽く迄も頑守せむ、諸隊再び予の來るまで奮闘せよと。而して龜田海岸に向ふ。然るに濱手も今や西軍大勢の陣、部署を保ちて砲を發するあり。突進するあり。長軍來つて見國隊の陣を攻む。會津遊撃隊、是を衝かむとして進むや。藝軍横背より現はれて、長軍を援く。血戦數合、激闘慘を極めて死傷過多なり。此時に當りて、薩軍は砂地を蹴つて猛進し來る。蝦夷軍力拒彈丸雨注して、彼我の戦闘愈酣と爲りたり。

翻つて辨天臺場方面を見るに、蟠龍艦長松岡磐吉、孤艦を疾驅して良く是

を防ぎ、軍艦の進止已が手足を使ふ如く、今や西軍艦隊の中を狂奔して、勇往突進、士官を指揮して、大に巨弾を注かしむ。大砲士官永倉伊之吉軍艦役松平五郎左衛門、同永井久次郎等は、蹶然ナポレオン砲を督し、三十二斤の榴弾を連發して四方に注ぐ。西軍艦隊、彈を避けつゝ、大に連撃する所ありけるが、忽にして蟠龍の打ち出す猛彈は、天地に悽聲を放つて、朝陽艦の硝庫に命中するに至る。爆裂轟々十里を震動し、烟煙飛び上りて天を焼く。かくて朝陽の船体は、紛と碎けて、而して海底に沈没す。されば肥軍乗込二百三十人は即死し、其餘は海波の中に浮動す。英艦來つて是を救助するも、援かるもの僅かに二十人。

朝陽艦の轟沈ありて、蝦夷軍は志氣を鼓舞して猛然たり。茲に於て、蟠龍は七重濱沖に迫りて、土方歳三と呼應し、濱手の西軍を攻む。砲彈命中、爆裂四方に起り、土砂噴出して轟然百雷も管ならず。茲に於て、薩軍の陣は見るく碎けて、榴彈益々飛行し、土方の猛撃陣と相俟つて、長軍の陣を粉碎して大効あり。此時に當りて、春日、甲鐵の諸艦は、憤然怒號して七重濱に

逼る。砲交烈戦、巨弾飛び來つて、蟠龍に命中すること二十數發、蟠龍愈轟鳴を擧げて、最早防ぐ能はず、再び逃げ來つて短艇を卸し、隊士を悉く辨天臺場に移して、然る後ち備ふる所の大砲を海に投じ、蒸汽機關を打ち破つて船將松岡警吉は是に火を放つて而して去る。蝦夷隊こゝに全滅す。

蟠龍の轟沈を望み見たる有川口西軍は、精銳を送りて龜田本道に現はれたり。疾風迅雷、百砲を放つて攻撃猛烈を極む。忽にして松前、弘前の諸軍は一手となりて、本道の胸壁を侵さむとす。大砲隊即ち山用砲を引き來つて、撤彈を發して是を防ぐ。茲に於て、西軍は田畝の間に走り、一呼して彰義隊の陣に躍進したり。池田大隅守、馬を躍らせ殊守して是と戦ふ。時に督將大鳥圭介、傳習、陸軍の諸隊を率ゐて、西軍の後背に猛突して是を攻む。西軍狼狽百歩を退きて固守する程に、彰義隊は胸壁を飛び踰いて、大鳥圭介と共に猛進す。捲土重來、圭介の奮戦、激闘遂に西軍を撃ち破り、將に進みて大に戦はむとす。然るに後詰の西軍大勢は、破竹の勢を以て、突進して圭介を攻む。圭介、その抜く可らざるを見て、退却を命ず。蝦夷軍再び胸壁に據り

て頑守す。かくて西軍は巨門を本道に配列し、大に爆弾を以て是を連撃す。龍争虎鬪、激闘相當りて、兩軍の戦鬪益々弾を込めて對峙す。さる程に、その大川口の西軍は、五百人の精銳を先發せしめて、本道蝦夷軍の後背に現はれ来る。されば蝦夷軍は茲に苦戦となりて、力闘尙防ぐ能はざるを知りて、有川口に地雷火を沈設し、總軍はみな大川口の敵に向ふ。果せるかな、西軍騎馬士官百騎、捲土重来して、本道を突破せむとす。忽ちにして西軍歩兵數百人、騎馬隊に尾從して、弾を込めて猛進し来る。本道の防備今や蝦夷軍の影なし。然れども器械隊の勇士は、藪陰に在りて、綱を切つて地雷火を爆發せしむ。霹靂天を破り、西軍先兵を碎き散らして、みな屠腹して死す。須臾にして、大川口西軍に突撃あり。間もなく有川口西軍も猛進を開始し、蝦夷軍今や挾撃に在りて、敢死奮闘、龍争虎鬪、血戦慘を極めて遂に利非ず、退きて龜田川を保つにあり。

龜田海岸は、孤軍奮闘、漸く部署を保つにありけるが、本道口の瓦解に動搖し、みな一本木に敗走す。されば督將土方歳三は、兵を此所に收めて、防

戦必死なり。此の時に當りて、函館より攻め來りし西軍は、潮の寄するが如く猛突して攻め立つるには、蝦夷軍の僻易言語に絶す。土方、即ち兵を叱咤して頑守せしむ。さる程に、彦軍は関を擧げて突進し来る。依て土方は、守護、小彰義、神木の諸隊を督して、勇往決戦、遂に彦軍を破りて猛進す。肥軍來る。須臾にして水戸、筑州の諸軍も來る。土方遂に敗績して百歩を保ち見國、會津遊撃、杜陸、護衛の諸隊を加へ、盛り返して関を擧げて發す。塵戦苦闘漸く筑軍の陣を抜き、一呼して肥軍の陣に迫らむとす。適々飛丸は來つて土方の胸を抜く。さしもの猛將、遂に落馬す。憐れなるかな頑強無比の土方歳三、左腕及び腹部に負傷ありながら、血を拭つて奮戦遂に死す。然れば一本木の孤軍は、惡戦苦闘必死を盡して、函館及び七重濱の西軍に抗しけるも、殊守及ばずして、弾つき、力つき、敗れに／＼て千代ヶ岡に敗走したり。

かくて大森濱手の西軍も、新山、赤川の西軍も、函館、一本木、龜田本道の西軍も、總軍大舉して千代ヶ岡に殺到し来る。されば大森口に於ては、見

國隊殊死して戦ひけるが、群がる大軍に衆寡敵せず、激闘一敗隊長二ノ關源治は、遂に討死したり。此時に當りて、辨天臺場は、連りに密兵を送りて、函館市中に火を放たしむ。忽ちにして風は來りて、辨天町に猛火は起り、烟煙地を焦し大町指して燃え移り、暮色騒然を極めて滿目悽慘たり。蝦夷軍遙かに市街の大火を望み見て、龜田川の防戦愈猛烈となれり。大島圭介、馬上遙かに對岸西軍を睨み、而して全軍に令して曰く、此地予の命を抛つるの地なり、諸將、恨みを此所に殘さむやと。全軍必死の勇猛また烈戦奮闘、頑強に抗す。されば西軍は大勢と雖も、龜田川の流れを踰ゆる能はず、かくて日も暮れしかと、兩軍の激戦止まずして、電光石火、彈丸の飛交連りなり。然れども天地轟々戰陣今や屍山血河となりて、彈つき、力つきたり。西軍遂に兵を函館に收め、千戸に及ぶ大火を消し止めて、軍營を張る。函館茲に陥落し、蝦夷軍みな五稜郭に兵を引く。

五稜郭の包圍總攻撃

〔一〕蝦夷籠軍の苦境

屍山血河の函館の大戦、海陸合同四方三里の混戦に、蝦夷軍の防備は皆敗れて、陸軍奉行土方歳三は討死し。蝦夷艦隊は全滅し。函館は遂に陥落したり。思ひ見よ。孤軍奮闘よく天下の大軍に抗し、頑強勇邁函館の一郭を保ちて、接戦相譲らざりし蝦夷軍こそ、如何に約盟の義を重じたりしぞ。然れども七重濱の敗陣以來、續いて函館の一敗に旗幟振はず。海陸合同の壓迫は急轉直下となりて、城外今や防備を施すの策なく、孤軍咽鳴漸く軍紀を支へて北と南の殘壘に立て籠るも悲惨なれ。

孤城落日。兵氣は沈々として消ゆるのみ。更に西軍艦隊は、甲鐵艦を主腦と爲し、三十町の距離を保ちて、七十斤の巨彈を込め、而して五稜郭を砲撃する連りなり。砲彈連續郭壘を震裂し、隊士の死傷は山と積みたり。

籠軍、最早通路絶たれて、命脈は秋風落葉唯死地向ふのみ。星忠狂、憤激禁する能はず、即ち守護、見國の諸隊を率ゐて、大森濱手を攻めけるが、激戦一敗地に塗れて引き退く。然れども、星、未だ倔する能はず、十四日再び千代ヶ岡を發し、大に一本木關門を襲ひとも、力戦尙頼勢今や非なり。か

くて夜に至れば、郭内動搖の雲は俄かに起り、忽にして本郭裏門の警備は空虚とはなりぬ。陸軍添役澁澤誠一郎、早くも麾下小彰義隊を率ゐて、脱して西軍の陣門に降る。續いて裁判奉行兼陸軍添役たりし津田真一郎、裁判役及び諸隊の重たちたる嚮導役を率ゐて、又降る。惟ふに澁澤及び津田は、陣中に在りては、薩長攻撃の論客にてありけるが、窮亡を望み見ては、激論何時しか消えて、早くも脱走を始む。十五日となりて愈四面楚歌の聲あり。衝鋒隊杜陸隊、見國隊の隊士は、彰義隊長池田大隅守と共に、夜半に脱走して、湯川に走り、而してまた降る。更に會津遊撃隊長楯崎才一は、千代ヶ岡の守りを捨て、而して去る。かくて脱走の聲々は郭内に滿ちて、籠城の頽勢愈險惡となりたり。蝦夷軍、元來は浪人の集れるもの、然らば脱走に始まりて脱走に終る、是れ敢て怪むに足らずと雖も、その巨魁たる榎本に取りては、事苟も浪人生存の目的に各義約を爲し、事茲に至りし以上は、大に決心する所ありしなり。依て諸將を會し令して曰く、「味方同盟を破りて脱走する者日々に多し、兵力及ばざるときは、我身を捨て、士卒を援くる、これ主將たるも

の、常なり。今や僅かの脱兵も纏め兼ね、一軍瓦解に及ぶは、我輩の耻辱また末代に解けず、諸士、味方の運命禍危愈切迫して、當低瓦解を免れざるに至らば、不肖鎌次郎、身を以て諸君の健在を祈らむ。然らばそれ迄は義約を重んじ、決して後世に物笑を残す勿れと。即ち榎本は己れ脱軍の總督として既に死を決し居るもの。あはれ天下の浪人たる、維新の逆境兒をして、その悲嘆に替えしむべく、向來の恙なき生存を計るが爲め、浪人國を興さむとして、遙々北國に乗り越せし身や。願望遂に叛逆と爲り、今や天下の大軍に圍まれて、事遂に破れ、後事を計る即ち浪人の余命を救ふに、己れ一命を、この殘壘に捨てむとす。

蝦夷本營の郭内や、脱人續出に續えて、外圍の砲撃は峻烈なり。今や抗爭たゞ籠城して、上下一統頑守するのみとはなりて、郭内の四面は屍山血河鮮血淋漓たり。傷瘦を療養するの場所すら、果たして那邊に存すべきぞ。血涙相汲む籠城の隊士、今やその運命は、榎本を始め一身を捧げて、義約の本體を貫徹せむとする風情も憐れなり。茲に於て、死傷を悉く湯川に移し、精兵

を以て城郭を守り、殊守決戦頑強なる底抗に、上下みな擧げて天運を待たむとするものとす。

更はその辨天臺場を見るに、總軍立て籠りしと雖も、兵糧は持久の途なく彈藥僅かに一萬發、是を以て向後の籠城を保たざる可らず。然れば兵糧つきなば一統自殺すべく、其の前に當りて彈藥缺亡せば、是に處するに肉彈あるのみと、意氣高し。思ひ見よ蝦夷軍の決心、孔軍奮闘人事の凡てを盡し、而して三河武士の最後を花と散らんとする其志氣。

〔二〕降服勸告の顛末

悲惨なるかな蝦夷軍の窮亡。今や包圍の壓迫と籠城の苦涯に、漸く今日の命路を保つと雖も、計り難き明日の運命には、隊士みな死を決するなり。

是より先き、その五月十二日夜に入りて、薩軍參謀池田次良兵衛等五人、函館病院に來つて、賊將に會見を乞はむと云ふにあり。會津遊撃隊長諏訪常吉、軍使を己が病床に接見する所ありけるが、池田は今日の形勢を説きて、

具さに降服を勸告するにあり。諏訪即ち是を首肯し、院長ドクトル高松凌雲を介し、所見を五稜郭并に辨天臺場に傳達するに至る。

一輪ヲ以テ一大事申上候、近時ノ戦況ニ顧ミ、薩州侯ノ御手ニテ病院御改メ相成、寛大ノ御仁心ヲ以テ、病人一統是迄ノ通り、大切に療養致候ハントノ事ニテ、御仁恵心魂ニ徹シ、難有存罷在候。

借而、昨夜薩州池田次郎兵衛ト申ス者、四人ヲ率ヘ、諏訪常吉方ヘ被相越候而、談判ニハ、昨今ノ形勢海軍ハ相破レ候モ、五稜郭并ニ辨天臺場ニ於テハ、實ニ奪戦ノ輩、士道ニ於テハ實ニ感服ノ至リニ存シ候得共、萬民塗炭ノ苦ヲ受ケ、天朝ニ抗シ候ハ甚タ宜シカラス、此際不殘殺戮ニ逢ヒ候カト、申觸レ候向モ有之候ニ付、面々死心ノ覺悟ニ候半

天朝ニハ決シテ左様ノ御趣旨ニハ無之、飽ク迄モ寛大ノ御思召ニテ、平穩ヲ旨ト被遊事ニ候間、此段五稜郭并ニ辨天臺場ヘ貫徹相成候様

懇談ニ御座候。即今誠ニ御大切ノ場合ニ奉存候、篤ト御賢慮ノ上、平穩之途被遊御立候テ可然ト存候ニ付、何レモ必死之防戰歟、或ハ否哉、御報被成下候様、私共ヨリ申上候様、常吉申聞候。得御意度如斯御座候。敬具

五月十三日

小野 權之丞
高松 凌雲

本書は蝦夷軍の窮境に臨みて、大なる福音を與ふるものにありき。されば辨天臺場に於ては、函館奉行永井玄蕃頭、諸將を會し降を議して曰く、「我軍既に事終れり、運命は人力の左右し得べきものに非ず、我軍の類運最早挽回の策なく、百計悉く盡く、然らば苦血を以て人命を損ふべきに非ず、我等茲に潔く陣門に降り、天朝に抗し奉りし過去の罪業につき、正に天誅を蒙らむ」と即ち出で、降る。茲に於て、永井玄蕃頭、相馬主計、松岡磐吉、岡大砲隊長以下總て二百五十人、函館實行寺に移され、臺場の領權西軍に移れり。

その五稜郭に於ては、時運如何に窮亡と雖も、總督にして既に死を決し、ある以上は、上下みな一死を義約に捧げむとするもの。然れば根本鎌次郎たる者には、事茲に至れるは總て覺悟の前にして、男子の一念是を貫くに人事の總てを盡すのみ、人力にして尙は及ばざる以上は、天命の左右する所又詮なきなりと。意氣昂然として人事尙足らずと云はぬばかり。

來書披見致候。然レハ薩州藩池田次郎兵衛ヨリ、諏訪常吉へ談判ノ儀ニ付、御申越之件々、仔細承知致候。

依テ衆評ヲ盡シ、篤ク熟察致候處、今更別談申迄モ無之、我等一同桑梓墳墓ヲ去リ、親ヲ辭シ、遠ク此地ニ來リ候譯ハ、先般再三再四朝廷へ歎願仕候通り、蝦夷地ノ一分ヲ賜リ、凍餓ニ迫リシ頑民ノ活計相定メ、加之、北門ノ守衛ヲ致度志願ヨリ他念無之候處、不計語辭失態舉動無作法之廉ヲ以テ、天兵ヲ加ヘラレ、窮迫之餘リ、是否無ク兵才ヲ以テ、是迄ノ舉動ニ至候處、今日ニ至リ、過チヲ悔ヒ、

兵ヲ休メ、

朝命ニ從ヒ可申旨、寛大ノ御處置不叶所謝、乍去、吾輩品海開帆以來、素ヨリ成敗ハ關係不致覺悟、假令一島粉碎相成候共、志願少シモ貫徹致サス候ニハ、外致方無之、若シ歎願ノ筋、御勅容相成、此地一部ヲ下シ賜ハリ候様相成候ハ、上ハ奉仰廷朝、下ハ北門ノ關鎖ヲ守リ、死力ヲ盡シテ、天恩ノ萬分ノ一ニ報ヒ可奉候様、一同ヘ篤ト申諭シ候上、我等兩人儀干才ヲ動カシ候罪ハ、如何様之嚴罰タリトモ、甘ンシテ可奉從、朝裁、前文ノ次第彌以テ御諒恕無之候ハ、五稜郭并辨天臺場其他出張同盟ノ者、一同枕ヲ共ニシテ、潔ク天戮ニ附可申候。右之段、池田氏へ可然御申通有之度奉願候。以上

五 月

松 平 太 郎
榎 本 謙 次 郎

尙病院ニ罷在者共、篤ク取扱有之趣承知仕、厚意ノ段「ドクトル」

ヨリ、宜敷御傳聲可被下候。

且又別本二冊、鎌次郎和蘭蛇留學中苦學致候海律(萬國國際公法の由) 皇國無

二ノ書ニ候ヘハ、兵火ニ付シ烏有ト相成候段痛惜致候間、「ドクトル」ヨリ、海軍「アドミラル」へ御贈リ可被下候。以上。

意外なるかな、頑強なる蝦夷軍の態度。若し夫れ所期の如く、脱藩浪人をして、その恙なき生存を期するが爲め、蝦夷地を以て浪人母國と爲し得たらむには、事茲に至らむとして、敢て干才を醸したる罪責は、即ち叛逆の巨魁たる榎本及び松平に於て、如何なる嚴罰なりとも潔く甘受せむも。その然らざる限りは、同盟連座の殺戮を覺悟して、最後迄抗争する所あらむと。五稜郭の返答は大膽不敵なり。然れども斯かる心事を吐露せる裡には、畢竟、薩長の冷虐なる治下に浪人苦涯を送るより、事茲に至りし以上は、名目の如何を問はず、潔く刃の手に殞るゝこそ、後世に残す武士の花なりとの意地を含むなれ。

あゝ北國の戦陣に在りて、板本、今や賊名の下に、將に瘞れむとす。然れば輕き一名を擲つるは、素より覺悟の前なるべしと雖も、這去己れが幕命を奉し、オランダに修めし海事の兵典は、是を賊陣烏有に葬るは忍び難しと。身今や死涯に類して是を西軍に贈り、以て帝國海軍が將來に據るべきの典範たらしめむとす。身を抛つるに後顧の慮を絶つ、板本の個人觀、吾人は大に同情すべきものあり。

五月十六日西軍の使者は、酒五樽に書翰を添へ、再び蝦夷本營に來れり。思ひは差し迫れる兩軍の戦陣は、今や大山も崩れ、疾風逆卷き、迅雷嵐起りて、龍虎鬼神の出現とは云ひ、願れば銃劍を取り除かば、官と賊との區別はあれ、何れも同じ皇國の赤子なり。兵典を贈りし板本の厚意には、西軍また是に報ゆるの熱情あり、即ち左の書翰こそ、西軍心情の美を知るべし。

昨年来永々ノ御在陣、如何ニモ御苦勞ニ存シ候、然レハトクトル
高松事、貴下蘭國御留學中、御修習ノ寶典海軍律書ハ、我國無二ノ

珍本、御痛惜ニ被存、爲皇國御差賜リニ相成候段深ク感佩致候、何レ他日ヲ期シ邦語譯書シ、之ヲ天下ニ公布可致候、先ツハ御厚志ノ段拙者共ヨリ相謝シ度、甚タ輕微ナカラ龜酒五樽是ヲ進呈仕候、傍々、郭中一統ヘモ御振舞被下度奉存、此段申述候也。

追申、義ヲ重ンシ必死ノ籠城實ニ感スルニ堪ヘタリ、兵糧彈藥若シ缺亡ノ内情ニ有之候ハ、當軍ヨリ送り進ムヘク、又防禦ノ個所不行届ニ候ハ、攻撃猶豫可致候間、猶豫ノ期日ヲ豫定シ何レトモ御申出ラルヘク爲念申添候

五月十六日

官 軍 海 軍 參 謀

蝦夷軍の落命目前にありと雖も、最後の決心を吐露せし抗争の態度には、西軍聊か是を尊重せざる可らざるなり。然れば總撃に當りて、攻撃猶豫の期限并に兵糧彈藥の存否を糺し、而して堅固を爲さしめむとの西軍の熱情は、

蝦夷の巻——五稜郭の包圍攻撃

また美ならずや。されば蝦夷軍は何と答ひけん。

貴書拜見、御厚志ノ數々辱ク存シ候へ共、彈藥兵糧共ニ當分差支モ無之次第ニテ、尤モ我軍ノ最後ノ所決ハ、一統討死ノ覺悟ニ懸リ在ルヲ以テ、素ヨリ定日ヲ約スルニ及ハス、何時タリトモ攻撃セラル、ヲ希望スルモノトス、然レハ贈リ下賜セラレシ五樽ノ酒ハ、御厚志ニ任セ落手可致候

五月十六日

五稜郭ニテ

榎本 鎌次郎

かくて酒五樽は郭内に運ばれたり。蝦夷軍の所決唯だ一統連座の討死のみ明日は血戦飛弾肉鬪の中、迫り来る運命に、その軽き身命を捧げて、靈魂何所にか深へ出でむとす。

〔三〕千代ヶ岡の追落

西軍の贈りし酒五樽は隊士の前にあり。榎本、隊士を集めて云ひけるは、諸士よ、敵は我軍に酒を贈れり。我軍今にも如何に終るや知る可らず、然らば互に死別の盃と爲らすとも保し難し、夫れ宜しく飲むべしと。然れども諸將は是を目して、毒酒と思ひ定めて、大に怪むで手を出す者なし。時に星忠狂は大言して曰く、味方は是一郭に既に死を決せり、敵の贈りしもの尙勅命に懸れり、天恩、何ぞ毒酒を以て窮兵を害するの理あらむ、然らば我先きに試みむと。而して石を以て樽を割れば、芳味滔々たり。星、大碗を以て數盃を傾け、而して是れ眞の美酒なりと。榎本、松平等是を望み見て、大に笑つて而して呑む。

かくて十六日も夜に入りて、霹靂天地を震蕩して巨彈來る。即ち西軍艦隊の砲撃は開始せられたるなり。されば五稜郭に於ては、表裏の城門を固むるに地雷火を埋没し、守護、中島、大砲の諸隊を以て、益々千代ヶ岡の要害を固むるに至る。忽ちにして西軍の大勢は、七重濱及び桔梗野より攻め來つて翌十七日朝七時を以て、參謀來島頼三、槍手銃手數百人を率ゐて愈現はれ來

る。中島三郎助、大砲を曳き來つて、而して曰く、此所は我墳墓の地なり、さらば今まで敵を打ち懲らしたる、この大砲と共に一命を碎かむと。即ち鐵加農砲に五重の彈藥を込め、來島の到るを量つて發砲す。轟聲一發砲筒も裂けむとす。中島抜刀して、逸早く突進を開始すれば、時に其子恒太郎及び房次郎父に従つて進む。土將、二子の憤起を見て是を縛さむとす。恒太郎即ち土將の腕を斬るや、隊士山上某は槍を以て房次郎を突かむと駈け來れり。恒太郎即ち弟を援くるに山上を殪す。此時に當りて父中島三郎助は、西軍主將樽澤某と七離七合、身今や銃創を受けて、互に流血淋漓たり。恒太郎即ち弟と共に樽澤に斬り掛りしが、父中島は遂に殪れけり。恒太郎是を望み見て、今は是迄なりと、弟と共に劍を四方に振り廻して、奮起して相戦ひ、遂に樽澤を殪す。忽ちにして飛丸は來つて、この少年を銃殺す。時恰も戰場陸軍、守護の諸隊は血戰苦闘にあり、かくて千代ヶ岡の防備は、素より衆寡の敵し難く、堅固一敗皆討死するに至る。依て西軍は大呼して千代ヶ岡を略す。參謀來島頼三、郭内臺場の土堤に踞して、五稜郭を遠望する所ありけるが、中

島隊の一勇士柴田俊助なる者、土堤に伏して銃を發す。銃丸飛び來つて來島の股を貫くや、西軍愕然四方より是を見れば、柴田は敵兵數人を殪して、其側にて銃を以て己れを撃ち、而して死に居たりき。

〔四〕五稜郭の瓦解

西軍出動早くも千代ヶ岡は落ちて、今や五稜郭のみとはなりたり。それ此所は鐵將のみの立て籠る所なりと雖も、西軍躍入となりては、最早防戦の策なきに至れり。茲に於て、榎本の命脈は生死與奪の分岐なり。されば迫り來る慘狀に、榎本は愈意を決し、郭内奥の一室に在りて、彰義隊改役大塚霍之丞を招き、大に後事を托する切なるものあり。大塚即ち座を起つて將に去らむとするや、俄然榎本は短刀を引き抜いて、屠服せむとするにあり。大塚驚天して衆を呼び、而して是を制す。榎本曰く、予は既に覺悟の處、今や止むる勿れ。今にして已れを決する、即ち衆命の身代はりなりと。此時に至りて衆駈けつれたり。曰く、それ早計なり、客年以來の奮戦も、今や包圍となり

一四四
たる以上は、上下一統はみな同じと云ふべし、然らば隊士は死を決せり、何ぞ總督の一命のみに心よしとせんや、我軍一死を義約に殞すには、まづ郭内の彈藥を費ひつくし、然る後ち總舉の肉彈を以て敵陣に斬り入らむ、これ我軍の本懐なりと。茲に於て、榎本意を正し、愈總軍絶滅の血戦を行はむとするあり。

蝦夷軍臨終の覺悟、存亡を總舉の肉彈戦に捧げて、鐵將の怨恨今將に郭外に迷ひ出でむとす。時に辨天臺場の籠客なりし、蟠龍艦長松岡磐吉新撰組長相馬主計等先導となりて、薩軍參謀田島敬三等の一行は、五稜郭大手門に來りて、總督等に接見を求む。田島曰く、「足下等義を重んじ茲に籠城せらるゝ感ずるに堪へたり、然れども此場に臨みて衆命を損ふこと、恰も無益の殺生を好むに似たり、されば此度の軍功に代へて、是を天朝に奏上し、貴下全軍を援けむ事を希ふ、然らば速かに城明け渡し、寛典の御處置を待つこととせられよ」と。榎本答ひて曰く、我等同盟の士官は、みな死を決しての籠城なれば、一應衆評を取らむと、而して郭内に入る。郭内の論議今や主戦降順囂々

たり。然れども心力交々つきて降に就く、是れ武士の名を汚すべきに非ず、さらば今回の屈辱を忍び、向來天下有事に當りて専心力注、暫くこの垢を吞まむと。士卒咽鳴して降を一決するにあり。茲に於て、榎本、松平は大手門に來つて曰く、「衆みな陣門に降り、速かに天誅を蒙らむ。さらば願くば寛典の御處置を以て、兵卒を助命あらねば、予等が死後の大幸なり」と。蝦夷軍こゝに降る。

五月十八日は五稜郭の明渡しと爲る。全軍總て一千八百人共に收められて函館市稱名寺及び實行寺に謹慎す。兵器彈藥すべて、長州軍監前田雅樂是を收む。かくて室蘭守備隊も謹慎となれり。五月二十一日を以て榎本對島以下五百八十人、津輕藩預りと爲り、五百十八人秋田藩に引き渡されて、共に英米船に依り送致せらる。其餘は尙函館の寺院に謹慎の身、西軍千餘人は是が警護に就く。

蝦夷總督榎本鎌次郎、副總督松平太郎、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大鳥圭介、函館奉行永井玄蕃頭、陸軍添役相馬主計、蟠龍艦長松岡磐吉の七名

は、五月二十五日を以て東京に送らる。

〔編者曰く〕孤憂明け渡しに當り。蝦夷軍は軍用資金悉皆を以て、告別の大宴會を開きたりとかや。降服、明日は幾里をや隔つべき、將卒の名殘を惜む憐れさ、武士の胸中果たして如何ばかりなりげん。榎本鎌次郎、扇を以て已が兩眼を腫し、回奮咽鳴して一詩を作る。

出五稜郭

孤城看將_レ陷軍氣亂如_レ絲

殘卒語_二深夜_一精兵異_二住時_一。

單身甘_レ就_レ數百歲_レ憶_レ愴期

成敗兵家事何須_二奇論_一爲。

是なり。大島圭介の作あり。人見勝太郎の作あり。浪人諸將が心力交々盡きたる殘壘、吾人は是を見るたに諸家の詩作に涙あり

政府の時事

蝦夷平定當時に於ける、政府の時事を摘示すれば左の如し。

五月

會津、仙臺以下の奥羽戦亂叛逆謀臣に死を賜ふ。

東京九段坂上に招魂社を建設す。而して正月三日、五月十五日九月二十三日を以て戦死者を祭る。正月は鳥羽伏見役にして、

五月は上野彰義隊の役なり、その九月は會津落城にして、何れも維新に重大關係あるの故なりと。
東京横濱間に電信機を設置す。

六月

丁卯、成長、巳己の軍功を賞し、左の例に依り扶祿又は御下賜金の御沙汰あり。

兵部卿宮、大宰師宮

薩州島津、長州毛利以下九十餘藩（西軍所屬）

薩州西郷隆盛、長州大村益次郎以下百餘人

左、右大臣、大納言、參議を以てする官制成る。

諸藩の藩籍奉還の建議あり。

公卿、諸侯の稱呼を改め、公、侯、伯、子、男の爵位を授與し以て華族に列す。

府、縣、藩三治一致の制度を設け、従前の藩主を以て假りに知

藩事に補す、府縣は政府の直轄にして、藩は然らず。

一四八

慶應
戊辰 奥羽蝦夷戦亂史 終り

戊辰順逆論

布南 佐藤三二郎

〔一〕鶴城懷古

砲烟跡絶廿餘年
騷客不關往時感

殘壘頽垣更耐憐
漫將文筆賦山川

是れ熊本城の英傑谷將軍が會て鶴城趾を弔ひ、咏せしところのもの也。
若松市の南、天を摩す老杉尙森々たる處、我封建七百年最終の歴史を留め

附録——鶴城懷古

二
たる鶴ヶ城趾なり、殘濠千古の水を湛えて、夕陽落つる頃大魚遊に波を起す水邊の雜草蓬々として切らず、鬼氣訪客を襲ふ。吾人長風に倚て、往時を懐ふ、感窮らざるものあり。當時の順逆今暫らく問ふを休めよ。天下の兵を孤城に受けて、死守三旬、男子の意氣を發揮して、成敗利鈍の外なる武士の魂を碧血に遺したる壯烈を思へ。

容保公何ぞ愚直なるや。吾人は戊辰史を繙き來りて、容保公の愚直なるを今更らの如くに感ぜざる能はず。若し容保公にして尙少しく政治的手腕あらしめよ。尙少しく術策を弄すに大膽ならしめよ。然らば、吾人この城跡に來つて涙を賤く事なかりしならん。容保公は七百年來の武道に最後の舞ひをなしたる眞の武士なり、胸中留むるところ一片皎々の志、自ら欺かず、又焉ぞ他を欺かん、眞直は彼の人格にして、亦會津武士の精髓たり。武人政治の最後の幕を切り落したる容保公は誠にその適役者なりき。人生意氣に感ず、功名誰復論せん、城を屠り、家人を滅盡するも辭せず、利害を見ずして、道理に就いて悔えず、孝明天皇の御親任は、遂に自らを亡ぼすに至れり。騷客は

不知當時の感、若し夫れ眞に容保公の心中を知るものあらば、又特に吾人の言を肯定するならん。愚直か、愚直か、吾是れを知らず、一片男子の意氣を如何、孤忠訴へんとする處なく、先帝の高恩と御依託を思ひ、時勢の日に非なるを見て慨然起つ、嗚呼夫れ男子の本懐、武道の示すところ、當時の順逆何人か之を知る、漫に之を以て律せんとするは眞に武將の心を知らず、一片の理論を以て強いんとするもの也。

見よ荒城の趾を。誰が國は破れて山河在り、城春草木深しの嘆なからん。半身朽ちたる老杉に今尙彈痕の殘るあり、廢橋朽ちたる濟往時の盛觀を思はしめ、石壘にかゝる葛蘿時を得顔なるは戰殉の碧血化したるに非ざるやを疑はしむ。若し夫れ遺臣あり來りて之を弔は、如何、家人已に盡き、往時の歎笑何れの邊ぞ、庭宇荆艾生じ、高樓の跡は麥浪豊なり、遠犬幽に老樹に響き人聲を留めず、破藁の片片を見て白骨を思ひ、犖犖孤景に對する時、感慨無量たるものあらん。嗚呼、曾て昔、籠城三旬、彈盡きんとし、敵彈落ちたるを拾ふて更に鎔鑄して我彈とし、或は城中の婦人にして、この彈丸を拾ひ集

むるものゝあり、然らざるは死傷者を取扱ひて、手に鮮血を染むるあり、轟々砲煙の中晝夜の活動は遂に裾綻びて綿の出づるを見たり、或は自ら刀鎗を振つて敵陣に突入する等壯烈筆紙の盡すところに非ず。快男子、敵陣雨中の鐘樓に登つて、從容鐘を撞いて、意氣尙剛なるを敵に示せるあり、鬼將佐川の如き、重圍の敵を突發して、長驅十里、悠悠糧を送りて城中に戻り來り、包圍の軍をして呆然手を下さしめたるあり。壯觀、落花の美に例ふ可く我武士の歴史を終らんとする、斷末の彩色として決して不足なし。更に彼の白虎隊の忠烈に至ては、又華中の華なり、縦横奮撃、身は創痕に重く、劔を杖いて飯盛山上に登り、遙か鶴城の焔々火中にあるを望んで萬事休す、惜しや蕾の花にして北風の爲め散る、君恩海嶽、社稷覆るに當て、何ぞ生を欲せん十有九人の少年城を拜して自盡す。純心無垢、武道、訓育の精華、茲に現はる。事止んで天下の人心を感動せしめ、遺烈千載に留めんとするは誠に所以ある哉。而して又十三四才を以て組織したる『護衛隊』が刀鎗を振て敵中に切り入り、或は傷き、或は斃れたる悲壯に至ては正に白虎隊以上にして、跡

を尋ぬるもの何ぞ、その美に感じ、その壯烈に泣かざる。大和魂の彩花、實に夫れ花よりも美也。

嗚、鶴城の跡、眞に荒城の哀を遣せり。三百年の大平は三河武士の意氣を甜め盡して、薩摩隼人の一喝に、震愕腰を抜かす。若し鶴城の終末無かりせば、歴史を飾る何ものをも無く、武道の精華開くなくんば、餘りに平凡にして、朽木自ら倒るの類、櫻花飄搖春風に散るの華麗なく、其處に弔ふ可く、歌ふ可き一事を遣さるに終りしらん。若し夫れ斯くの如くんば三百年の治その結末余りに凡調の怨みなからんや。人生の興亡自ら詩あり、鶴城の跡、嗚呼夫れ千古の詩題なる哉。吾人は爰に筆を改めて所謂當時の順逆なるものを見ざる可からず。

〔二〕攘夷非尊皇

ヴォルテール、ルソーの筆は人心を沸騰せしめ遂に佛蘭西革命を産む。

白石の日本正紀、山陽の日本外史、烟齋の靖建遺言は遂に維新の大變革を生ず。吾人は佛蘭西革命によりて世界に文明を波及せしめたる効果を呪ふものに非ず、勿論王政復古の偉業に讚美を惜しむに非ず、然れども自由平等の武器を以て幾多良民を惨害し、幾多の偉才を亡ぼしたるを嘆慨せざる可からず。尊王攘夷の語徒らに美にして、時に奸惡の爲め忠良を害したる幾何ぞ。由來攘夷は尊王にして、尊王は攘夷なるが如くに二個を密着せしめたる處に政治家の怪腕あり。吾人は當時の事情を探り、尊王必ずしも攘夷にあらず、攘夷必ずしも尊皇ならざるを信ず。今日より之を見る攘夷を以て國家を安泰ならしめ、皇基萬年を夢みたる幼稚なる思想は只噴飯に價す可きのみ。元來異人種を以て必ず敵なりとしたるは半開野蠻の思想に非ずや、當時の日本は己に世界の潮流に洗はれつゝありし也。この場合鎖國主義を以て外交の方針と心得ゐたる長袖者、及外事に迂なる、只小兒の如く、悲歌慷慨の輩、到底國事を知らずと斷するも何の妨ぐる處ぞ、これに比して遂に多く外事に接し、海外の事情に通じ居たる幕府の爲政治家が、進んで開港の策を建てたるは、國政

運用の上に於て最も機宜に適したるものと稱せざるを得ず。

元來幕政は委任政治なり。事大小となく、決行して後、天皇に奏上するを例としたりき。ペルリの所謂黒船を率ゐて浦賀に来るや、當時の老中阿部正弘は勢止むを得ずとして下田、函館開港の暫定條約に調印し、朝廷に事後承諾を求たること先例の如し、勿論舊來の委任政治の慣例により、和親交易己を得ずとの勅許ありたる也。思ふに寛永、寛政の外交問題は皆幕府の專權により決定したるも何等物議の種子とならず、今日更に鄭重に取扱ひ勅許を得たるに拘らず違勅の責、轟々として起る、又時勢の然らしむる處か。幕府を倒さんが爲め事柄を攘夷に籍りたるは、吾人は只その手腕の非凡を賞するのみ政治の成敗を以て忠、奸を定めんとするは吾人の與みせざるところ也。井伊大老こそ、實に一世の政治家なり、彼が開國の意見として上進したる文を見ても、彼が識見時流を抜けるを想はずんばあらず。執政阿部が訂結したる暫定條約を本條約となす場合勅許を得ざるは不都合も甚しと評せんも、然れども永年の委任政治は結果を奏上すれば可なるは前例による也。執政阿部が各

八
方面に意を通じたるは、圓滿に纏めんとする政治的才能なり、井伊は徹頭徹尾條理によつて行動する司直的政治家なり、彼が徳川繼嗣問題に對して群議を退け、前將軍の遺言を楯として之を實行したるが如き以て見る可し。遠勅問題が恰も鼎を覆す如きに至りし場合、彼は事情を具して百方伏奏したる結果、再應衆議との勅令あり後遂に「不得止事情御氷解」の勅諭を得たり、井伊の責任は形式に於て全く解除せられたるものと稱す可し。若しこの場合、方策猫眠も當らざる京都長袖の言に強いられて鎖國主義を執らんか、寸前暗黒にして、只燕趙悲歌の漢學先生の言に従て南蠻と戦を交へんか、邦家の今日果して如何。論より證據、無謀なる長州人は文久三年五月馬關に於て外船を砲撃したるも實力を如何せん。彼等僅々四日にして馬關海峡の東口砲臺を盡く奪取せられ、攘夷の諸豪顔色なく、三條前中納言以下の志士は只震愕するのみ。當時の狂介、今の山縣有朋、鎗を振つて「山縣狂介此處にあり」と然れども機械の偉力によりて動く外船は一言の應なくして悠悠去來せしにあらずや。穉か勇か。當時の志士と稱する輩の識見概ね斯くの如し。幸ひ伊藤

井上の二者、外國より歸りて、海外の事情を詳かに告げ、暴虎の猪勇を退け謝罪文を送り、千古未曾とも稱す可き大屈辱を受けたるなり。然るに頑愚の堂上、列藩をして皆長州に例はしめんとせり。吁夫れ殆い哉。辛うじて長州一藩の屈辱として終りたるが故に邦家の爲め幸なりしと雖も、學國斯くの如き暴論に風靡せられて、列國と戦を交ゆるが如き事ありしならんか、今日吾人は有史以來未だ外寇の侮を受けすと豪語し得ざりしやも知る可からず。攘夷の語焉ぞ遅氣多きや、當時の志士、才人と稱せらるゝ輩、尙小學生に及ばざる智識たりし也、只一片孔孟の學を以て世界の潮流に抗せんとす、敵を知らざる計、轉憫笑す可きのみ。時流に進む政治家は時に蓋世の攻撃を受くる事あり、ビスマルクは獨逸今日の基礎を建設したる偉人なるも、彼が盛にその經綸を行ふときは、狙撃者の着き纏ふ危険よりして、彼が唯一の樂みなる旅行をもなし能はざりき。孝明天皇が文久四年一月廿七日、將軍に下賜されたる宸翰中にも「豈料らんや藤原實美等野鄙の匹夫の妄説を信用し字内の形勢を察せず國家の危殆を思はず、朕が命を矯めて輕卒に攘夷の令を布告し妄

に討幕の師を興さんとし、長門宰相の暴臣の如き、其の主を愚弄し故なきに夷船を砲撃し幕使を暗殺し私かに實美等を本國に誘引す此の如き狂暴の輩必罰せずんはある可からず」との語あり。自ら有志と稱せし輩、帝の御聰明に對して慚愧なきや。水戸は儒を以て起れり、然れども彼等は理屈を以てその國を傾けたり、同黨異伐の内訌は何の醜態ぞ。水戸を碑文の國と冷評せし人あり、彼等徒らに死文を守る實に憐む可し。櫻田の擧、快は快なり、然れども彼等の意たる經國の大策より出でしに非ず、その一人が『呼狂呼賊任他評、多歳怨雲今日晴』と吟じたるを見るもその一端を知るを得べく、彼等の擧たる單純なる一の感情なり。噫、婦女子の如き、感情は偉才炯眼の政治家を殺す事幾何ぞ。如斯して大久保、森、星の高材逸足を葬れり。英國人を見よ。政治の事些の曖昧を怒さざるに關はらず、ズスレリーが憲法違犯を敢てするも英國の利を棄つるに不忍獨斷を以て一八五七年四百萬磅を投じ蘇土運河を買收せる場合、日本人ならば事情止むを得ずとして責任解除をなす可きか、彼等は決してビーコンシチュウド卿を刺さるのみならず、反對黨すら却て賞

賛の辭を呈せり、然れども殆ど同様の事情の行動をなしたる、日本の井伊は刺されたり。日本に天才政治家の出現せざる眞に故あるなり、これを舊時の感情耳と謂ふ勿れ、今日の政界尙斯くの如きに非ずや、藩閥は干渉して井伊の銅像の除幕式をなさしめず。品川彌次郎高才なりと雖も、彼は我政界に毒を投じ、選舉腐敗の端を開けり、彼が當時閥族擁護に用ゐたる手段は今日之を思はゞ實に悚然肌粟を生ずるを覺えざる可し。立場を換えて是を見よ。實に井伊の策は國家永遠の長計なり、品川が心中報公の意ありと雖も民を誤りしものなるや辯解の辭なし、然るに井伊は尙惡まれ、品川は稱賛を以て掩はれ、其の像は天下の廣所に立つ。吾人史を讀んで如何に之を解釋せんとするか。況んや開港の事たるや、曩に氷解の勅諭あり、慶應三年五月二十四日、

兵庫開港之事、元來不容易殊に先帝被爲止置候得共、大樹無余儀時勢言上、且諸藩建白之趣も有之當節上京之四藩同様申上候間誠に不被爲得止御差許に相成候就いては諸事屹度取締相立可申事。

との勅令により、井伊の責任は全然解除せられたるものなるに於てをや。

元來長袖時勢を知らず、常に事を過るは歴史的なり。當時に於ける長袖の朝三暮四なる全く、諸藩より『手入』と稱して、多くの珍品、黄金を送りて運動したる結果にして恰も清朝の末路に於ける政治の裡面を見るが如し。

その膽略に至ては殆ど見る可きものなく、守護職なる松平容保の馬揃天覽に當て空砲を放つ事を恐れて百方辭を設けて拒まんとしたるが如き、全く清朝式なり、彼等要するに女性的男子たりしのみ。この間に立ちて攘夷、攘夷を以て押通たる長州の政治家は狡獪と稱せんか、爛敏と稱せんか。佐久間象山の如きは胸中常に天下國家ありて、一藩一地方の興廢眼中になかりしは明にして彼は實に國人崇拜の的となりたる吉田松陰の師なり、然るに長州浪人は象山の開國論を防がんが爲め遂に白晝非業の死を與へたり、勿論勢力横奪上攘夷主義の破るゝを恐れたるものにして、罪を、帝を彦根城に行幸せしめん云々に嫁したるは全く虚構なるは今日公平なる史家の一致するところ也。

孝明天皇は英邁剛毅の御方にして、長袖者に比して時勢を御洞察遊さる明遙かに勝れさせ給ひたり、帝は徹頭徹尾平和論にして、國家多難の場合、内地の擾亂は勿論、事を外國と構ふる事の危険なるを説かせ給ひたり、攘夷の事は最も御宸念遊ばされし處なるも、武力に訴へて是を果さんが如きは、決して帝の御意に非らざりき。文久三年八月中川宮、齊敬公、忠熙公連名に下し賜はりたる宸翰に、

元來攘夷は皇國之一大重事何共苦心難堪候、乍去三條初暴烈之所置深痛之次第聊朕之了簡不採用其上言上も無く浪士輩と申合せ勝手次第之所置多端表に者朝威を相立候杯申候得共眞實朕の趣意不相立……

とあり、其他、容保公に下賜せられたる宸翰にも過激の處置を以て大事を過る可からざるを繰り回し戒め給ひしは一再ならず。而して彼の有名なる男山行幸は、陛下の眞意に非ず、御不快なるも止むを得ず、御出御の模様、今日

最早争ふの餘地なし。云ふ迄もなく攘夷を以て政略上の好題目としたる黨派の取組みたる芝居にして、時の將軍の愚幕府執政の凡庸輩が、遂に手を出す能はず、全く醜醜を曝露したるもの也。文久三年四月二十三日、主上宸翰を中川宮に賜ひ、石清水行幸は過激堂上の強請に出で、御惱ありしにも係はらず枉げて之に従ひ給ひたるにて、過激の朝議一掃を御依頼遊ばされたりと。而して文久三年島津公に賜はりたる宸翰中にも攘夷に關しては「年久之治世武備不充實而は無理之戰に相成眞實皇國之爲め共不被存云云」とあり。以て如何に帝が實勢を御明察ありしかを窺ふに難からず。噫、聖天子にして、已に斯くの如し。吾人は戊辰前後に蟠る、政争の裡面を想ふて、官、賊の因て來る處に寒心せざるを得ず。

〔三〕誠忠か兇暴か

尊王は萬代不變の大精神なり、攘夷は政治政策なり、開鎖は、時勢に鑑み

て其の宜しきを執る可し、取捨の適不適は以て爲政家の手腕を示すものにして、未だ遽に忠、奸を以て律す可からず。後來大隈伯の爲さんとしたる條約改正の如き、反對者は激奮の余り或は時に逆賊の語を以て語りしなる可し、然れども大隈伯失政は大失政にして、徒らに自己の功名に焦慮し、他を省るの餘裕なかりしは惜む可しとするも、伯と雖も初より豈國家を賣らんとするの志あらんや。彼れ時運に就て、最も良策と信じ報公名譽二つながら得んとしたる而已。尊と攘とは自ら別なり、當時の志士が是を辨せずして、國家政策の是非に奸忠の二字を以てしたるは宛然事理を解せざる婦女子の争論の如し。治平の久しきに慣れたる公卿元より國務を知らず、外人を視て直ちに禽獸夷狄となし、嗷嗷止まず、胸中何等の方策あるに非ずして只騒狂し、甚しきに至ては我神國を説き、往昔元寇の神風を頼む輩さへありしと云ふに至ては、吾人は只無邪氣なる愛國者よ、と評するの外なし。

當時に於ける所謂志士と稱する者の横行活歩は、輦轂の下をして全く無政府の状態に陥らしめたり。勿論中には純忠無二の精神を以て集り、時局を嘆

概するの士ありつらん、然れども數十人黨を結び京師を横行し、或は富豪に迫り軍資調達と稱し金米を掠め、或は異論者を殺戮して憚らず、稱して血祭と謂ふ。偶島津久光公の上京するに當て浮浪途に強請して事を舉げんとして物情恟々、白晝店舗開かず、夜、行人絶え光景凄惨たりしが、勅旨により公之を鎮定し事なきを得たり、即ち是れ伏見寺田屋事件なり。志、誠忠にしあれば如何なる事をなすも可なるか、吾人この状を見て、誠忠か、兇暴か謂ふ處を知らず。會津藩主京都守護職として入りしは斯くの如き、騷々の場合に於て、初めて、孝明天皇に拜謁を賜はりしは文久三年正月二日なり。苟しくも秩序維持の任を帯べる守護職の眼にはこの光景を如何に映せしか、誠忠か奸賊か、その面によりて斷す可からず、平和を破り、秩序を紊し、兇暴をなすものは司直の眼より見て盡くこれ浮浪として斷罪に問ふはその當然の職責なり。況んや朴直剛毅の容保公に於てをや。

文久三年正月二十二日、池田大學が山内容堂公の饗を受けて歸らんとするや、浮浪の士四人是を途に要して殺す。二十四日其の左右の耳を斷り、正親

町三條大納言實卿、中山大納言忠能卿の兩第に各一個を投げ入れ、脅迫狀を添へて曰く、兩卿戊午以來千種岩倉二朝臣に同意し、酒井修理太夫を輔け、賄賂を食りし等の罪あるを以て三日の間に議奏の職を辭せざれば又斯の耳の如くす可しと。兩卿大に愕き、朝廷に奏す、舉朝色を失ひ、後三日遂に兩卿其の職を辭す。同年二月朔日夜浮浪の徒七八人、千種、岩倉兩家に詣り賀川肇と稱する一女子の腕を斷ちて邸内に投じ無名の封書を添ふ、その意に曰く肇は公卿の奸策を助けたるものなるが故に之を獻す、聞く近日少將、右衛門の兩女官復職せんと、果して真ならば亦斯くの如くその手足を斷つ可し願くば以て兩女官に告げよと。肇は千種家の雜掌にして時事に奔走し、名を堂上諸藩に知らる。正月二十八日暴徒白刃を提げて其の家に亂入し、肇の子を捕へて之を殺さんとするや、彼の女是を見るに忍びず出で、殺害せらる、彼等首級と兩手を斷ち壁に罪狀を記して數ヶ條を擧ぐ。當時の流説、肇の忠奸元より知れ難し。而して其の夜又後見職の旅館前に肇の首を木板に載せ、小笠原圖書頭、大目付岡部駿河守、目付澤勘七郎の三氏に宛て一封を添へたり、

その意は攘夷の勅を遵奉せし上は宜しく拒絶す可し。これを受け徒に儉安せるは其の實開港通商を欲するは疑を容れず、これ朝命を蔑如するもの、天下有志の士は傍觀せず、速に攘夷の期限を定め天下の惑を解く可し、粗末の首級と雖も聊か攘夷血祭の祝意を表すと。彼等已に朝、幕の重役に向て斯くの如し、況んやその他は押し知る可し。或は町奉行の部下を殺し、或は商家に入りて金品を奪掠する等、日に二三斯の種の訴を聞かざるなし、彼等口を尊王攘夷に藉りて酒色の資を貪らんとするものと評するも又辯解の辭なかる可し。而して職を京師鎮撫に奉ずるもの、眼より、是等の浮浪こそ國家に禍をなす奸賊と視るは又止むを得ざる處に非ざるが。容保公是れに處するに一方斷罪を嚴にし典刑を正し、傍ら後見職、所司代等の極力反對し、事、重大なるが故に閣老に諮らざる可からずと主張するを排し、獨斷を以て幾百年來の陋習たる言路壅蔽を撤去し、國事の進言を自由にし、内外大少を問はず、憚る處なく有志に就いて論す可く、憚りあるものは封緘して提出す可し、事重大なるにありては守護職自ら面接す可しと。何人も知る如く、專制政治に

言論の路なし、從來一の訴願をなすにも、組合連署を以てその草案を與力同心に示し、添削を受け然る後上達を例としたりき。容保公是の弊風を一掃して、新に言論の路を開く、恐らくは是れ我治道の初めにして、時勢を洞察したるものとは云ひ、當時に於ける大改革と稱するも敢て不可なし。後二月七日山内容堂公の館前に首級を風呂敷包となし、緘書を添へ投せしものあり。その謂ふ處は、是れ唐橋村惣助の首なり、彼嘗て千種家に入して奸惡を働く、今將軍上洛せんとする場合公の進退は神州の安危因て係はる處なり、速に攘夷の期限を定めて宸襟を安んじ奉る可き也。即ち血祭の證左として贈呈すと。蓋し容堂公は時勢を視るの明あり、鎮國の倒底行はれざるを知り、曾て江戸にあるや、後見總裁兩職及伊達公と共に攘夷の朝議を翻さん事を議りき。彼等が容堂公を脅かさんとするは、又爰に基するものか。容保公遂に斯輩を假借する處なく逮捕せんと、豫め奏聞す。時に左の如き朝令を布かる以て當時の一端を窺ひ得んか。

當春以來藩臣浮浪の徒堂上家へ立入正義の士と唱へ種々致入説候より叙
慮貫徹不致事往々有之隨て不心得之者共横行致し無辜のものを殘害し恣
に火を放ち家屋を毀ち或は張り紙等致し町方を騒がし遂には不容易巧み
に及候聞えも有之言語同斷の儀に候處今度は勿体なくも宸襟より發し右
等の弊風御改革被遊取締方屹度被仰付候……。

その後に取りたるは、有名なる彼の足利尊氏以下三代の木像事件なり。過激
の浪士二月廿二日夜等寺院に入り、彼等木像の首を三條橋下に梟し其の下に
各位牌を掛け、傍に逆賊と書し尊氏の名を特に高氏と書し「正名分之今日に
當り、鎌倉以來之逆臣一々遂吟味可誅戮之處、此三賊巨魁たるに依て先醜像
へ加天誅者也」と而して、逆賊足利十五代と書したる下に、彼等の罪狀を説
き來り「……我等不敏也と雖五百年昔の世に出でたらんには生首引拔んも
のをと握拳切齒片時も止事能はず、遂に不臣の奴原の罪科を正す可きの機會
也、我々申合先其の巨賊大罪を罰し、大義名分を明さんが爲め昨夜等持院に

有所の高氏始め其子孫の奴原之影像を取出し首を刎是を梟首し聊散舊來蓄憤
者也。讀んで茲に到れば、彼等京都にあり無聊の餘りに出でたる惡戯ならん
も、然れども死屍に鞭の殘虐なり、其の勇たるや決して大勇の士の處業に非
ず。昔者チャアレス五世ルーラルの墓を訪ふ、侍臣媚びて彼の屍を灰にせし
む可しと謂ふや、王怒て「我は死者と戦はず、彼を敬せよ」と。我國に武士
道あり、彼等、之を有せざるチャアレス五世に劣る、その行動よりして見るも
眞の勤王の何ものたるかを知りて奔走する輩にあらざるは明なり。尊氏世に
評あるも、苟しくも時の君皇によりて天下の大政を托せられたる將軍也。尊
氏の名又聖恩による。彼等恣に之れを改削し之れを辱しむ。即ち我皇室に對
する非禮恕す可からざる也。實にや容保公が進言の道を開くも轟武兵衛、中
島永吉、藤本津之助等名あり、節ある數氏の來り論する外、敢て彼の兇暴脅
迫を喜ぶの輩は一人も來らざるをや。齋大空に翔けるを見て糞蠅も羽搏きす
ど。彼等浮浪の者亦此の類たらずんばあらず。この事件に對して、守護職た
る容保公は如何に見たるか。

知るところ、是夜三條實美卿の邸門に張紙をなし、姉小路少將に同意し、公武一和を名として其の實天下騒亂を企つ、速に退職せざれば天誅を加ふ可しと。この外二條、徳大寺家を脅迫し、その家臣を殺し、妻子を殺傷したるは當時數ふ可き事件ならんか。以て狂暴の如何を知るを得べし。その他市内に起りし、暴行は擧げて數ふ可からず。盛に堂上家に入説して眞偽を撰ばず、時事に迂なる長袖を迷はし、引て累を、孝明天皇に及ぼせし事多大なりき。遂に帝は文久三年二月三日中川宮に御書を賜ひ「右長州に附屬の輩申出人氣を迷し、終りは予之腹もくつがへす手段と存候、是が予暴人共八月十八日之一條を俗にひぐりかへし咎之輩再生之手段右手廻廻候策略に候云云」とあり。吁、何人ぞ、聖上をして此の感を抱かしめたるは、狂暴、暗殺、點詐權變、帝の宸襟を惱し奉り、尙是を尊王と云ふ、吾人此處に至て尊王の何たるかを知るに苦しむ也。

〔四〕帝。深厚なる御親任を會津公に賜ふ

惟ふに、孝明天皇の御性格は、不拔の御精神一旦御宸念あれば、百難千障あるも決して中絶し給ふが如き事なし。只畏れ多き事なれども妖雲頻りに聖明を掩ふて、陛下屢々之を臣下に嘆慨せられたる御心中如何なりしぞ、吾人は是を思ふ毎に涙の下るを禁せざる也。

帝が會津公を御親任遊ばされたるは、殆ど極端と稱す可し。長州派の運動は巧みに奏功し文久三年六月容保公を京都より退ぞけんせり。然るに容保公、叙慮貫徹、平和維持の爲め尙滯京を上奏す。是より先、帝は傳奏衆に勅書を與へ、容保東下はその意にあらざる旨を諭され、若し容保辭せば、幸是れ朕の素志なり、再命せざるは勿論、萬一再命あるも朕の眞意にあらざるを告ぐる爲め、勅を寫して以て容保に下せと。後遂に近衛公を以て左の如き宸翰を賜ふに至る。

略。下向之儀於朕不好候得共、當時の役人並堂上之風として申條言張り候次第、逆も愚昧の朕申出候ども無詮事故各申通りに相成次第に候間、

唯今如此嚴重之沙汰之様ながら實勅に無之候間左様承知其方領掌之可否は任存分可返答決て下向強て申渡す所存には無之候事。
但斯様之儀申候と存知候得ば各又蜂起候間中府之商量可爲嘉祥候事。
六月 秘々。

御書を拜するに、愚昧の朕申出候とも、云云とあり、一天萬乘の君が、仰せ出さるゝ事とも覺えず、吾人は斯くの如き事實を探究して、當時堂上人の行動が殆ど百鬼夜行とも稱す可きかを想はずんばあらず。今日、彼を思ひ是を憶ひ、夏尙寒きの感あり。斯く内憂外患あり、容易ならざる國難に際して、帝が容保公を御親任遊ばさるゝは益々深く。文久三年十月九日には左の如き御宸翰に御製二首を添へて、御下賜相成りたり。然れども、堂上の叡慮を矯め、聖明を掩ひ、畏れ多くも帝をして日々憂悶に過させ奉る事情なるを以て是の恩典たりと雖も秘密の内賞にして、敢て公然御禮に參内するを許させ賜ふを得ざる帝の御心中、拜受する臣子の情果して如何、吾人また多くを語ら

す。

堂上以下疎暴論不正之處置増長に付、痛心難堪内命之處、速に領掌憂患掃攘朕存念貫徹之段其方忠誠深感悅之余右一箱遺之者也。

一箱とは御製を收めたる箱を指されたるものなり。御製に曰く。

たやすからさる世に武士の忠誠の心を
喜びてよめる。

和らくも武き心も相生の
松の落葉のあらず榮へん。

武士と心あはしていほおも

附録 帝。深厚なる御親任を會津公に賜ふ

而して文久四年正月二十一日將軍參内の場合、特に玉座近くに召され下賜されたる勅語の中に「無謀の征夷は實に朕が好む所にあらず、然るゆゑんの策略を議して以て朕に奏せよ、朕その可否を論ずる詳悉以て一定不拔の國是を定む可し、朕思へらく、古より中興の大業を爲さんとするや、其の人を得ずんばある可からず、朕凡百の武將を見るに苟も其人有雖當時會津中將伊達前待從、土佐前侍從島津少將等の如きは頗る忠實純厚思慮宏遠以て國家の樞機を任ずる足る、朕之を愛する事子の如し汝是を愛し、是を親み與に計れよ」の御言葉あり。臣として斯くの如き御親愛、御恩寵を辱ふす、容保公たるもの豈感奮せざるを得んや。爰に今日尙帝の御計畫の奈邊にあるか明確ならざるも、兎も角も非常の大事を、容保公に御依頼あらせられんとせる事件あり聊か長文に渡ると雖も當時の状況を知らんが爲め特に全文を記載せん」とす。時は元治元年二月八日傳奏野宮定功卿容保公の館に到り、陛下容保が和歌を

好むを召聞特に御製數種を下さる。御製と稱せしは事の外に漏るゝを防がんと爲め也。

極密々書狀遣候、抑昨年来滯京萬々精忠深感悦之至りに候、實に不容易時勢に付ても其方が忠勤深悦服候付ては深頼之存念と存不寄儀乍別極密々認入披見深依頼候寔不容易時節柄に付從來深獨苦心之儀に候、此儀一分深苦心には候へ共迎も申出存分貫徹は無之事向鏡如見に候へば衆評には不掛候、自分廻策になくは迎も不出來候如前文其方誠忠に候へば爲密事朕望儀貫徹致し吳候半哉と察し、其上何分多人を令承知兵權になくてはと深存込候へば、其方へ依頼候暮々朕へ萬事内密の儀心に成吳候へば、爾來三所も深満足之事に候而別紙に認儀深推察一周旋有之度候、事何分密話之儀六ヶ敷候へ共密面會も難成候へば筆談儀仍急速互に會得し難出來哉。故度々往返致し候深開込詰成功候は、無此上満足に候事茲に申候。別紙にも認候通此儀漏脱候ては實に失望候間堂上參豫の中たり

附錄——帝、深厚なる御親任を會津公に賜ふ

共無洩十分勘考附策略出來の上朕に申聞指圖候迄は秘置貫度猶度々之往返申今度事猶宜敷深依頼候事吳々不存寄儀とは存候半偏に密談候也。

書通往返廻計は成丈不因循致度候。

文久四年甲子二月

松平肥後守江
極密々禁他聞。

〔別紙認〕

天下之形勢不容易萬事痛心不過之候、柳嘉永六年以來より殆至安政頃彌增加深苦心之件々難筆紙候、情考ひ實以愚鈍之朕在位奉對天神地祇祖宗恐慄之事に候へば及丈は盡力の所存に候處、追々精忠之輩、精勤深令感悅候追々及評議儀は表向申出候已去二十一日、二十七日諸藩等へ以朕書狀申渡候儀猶厚可心得事、倍茲に申聞深厚に極秘密他聞依頼俱儀宜聞取

無相違之周旋深頼入候、實に打明申候處元來其方事至今日誠忠之段徹心骨感悅不斜候、已に昨年暴論之爲め守護職をも止東下又は歸國にも可相成申候處、實に誠忠無疑段深察惜念難止何卒在役滯京之段、斷然申出所存之處何分暴論朕所存を矯め我意の振舞のみ行ひ當職も失權兩役も彼誣候て朕へ勤仕は名計、却て暴人へ諂已逆も朕所意不貫徹候間内密以尹宮前關白等を極密書狀遣し候程、克聞取吳萬々手續き調ひ至只今守護職誠忠深安慮喜悅之至に候、去八月十八日之奮發於朕は就中悅心即國事隨て朝廷之幸重疊之悦不過之候、如此之忠厚思慮宏遠以て國家之樞機を任するに足る人と深愛臣之事に候、依之茲に極秘密他聞依頼之事有之候、何卒極密之以計略朕之心底貫徹致吳候事成間敷哉、此儀深吞込周旋成功之時は朕之憂憤を散馨し實以感悅候、併事を包只依頼と計にては可否之答も難出來とは存候得共、深存意有之關白以下へも一言も不申直に其方へ依頼候も一了簡有之候間先契約致候間領掌之可否書貫度候、右彌承知に有之時は極密之書狀可遣候、其の時は開見にて意外之事と存候半哉乍

附錄 帝深厚なる御覺任を會津公に賜ふ

實に深存込候儀故篤と文意會得にて不審議之周旋頼入候、但此儀評議之
様成事に而は逆も不成就候同輩相語らひ突掛候奮發之計略所望に候。

一度の書通にては逆も難辨解と存候へば不目立幾邊なりとも尋吳候様
存分認爲見候間吳々成功頼入候也。

先は此段極密に依頼候、少しも漏洩無之様開見之上篤と吞込有之度候
也、何れ於周旋之場は關白、尹宮、三條前大納言、野宮宰相、阿部宰相
中將久世前宰相、廣橋右衛門督右を先頼と引寄候様と存候、然首尾行届
計略出來之上可至其迄仲人野宮へも秘置候様と存候、茲に又存慮と候得
共其猶勘考之上他藩へ申様先は其方丈にて勘考有之度候也、吳々迫而之
通書開見之上心得方頼置候也。

詳かに御宸翰を拜讀するもの、誰か、帝の憂憤に泣かざる、假令如何なる
事あるも、如何なる精心より出づるも、帝をして斯如憂愁暗惘の裡に陥れ奉
り、悶々其の日を過させ給ふ矯勅の罪は斷じて恕す可からざるものなり。是

れ果して、至上唯一なる、君王の御言葉なるか、實にある間敷き事にして、
帝の悲憤文外に溢れたり。吁、帝、事を計るに忠良の臣なし、周圍にあるも
のは皆、帝に反くもの、密書を給ひて大事を托し給ふ、御衷心如何ばかりし
ぞ。而して容保公こそ、天下の殊幸ものなれ、其の方の精忠身骨に徹すと御
感を賜ひ、帝が中興の大業をなす、唯一の謀臣として深く親信を下さる、容
保たるもの、最早、一身、一家を省み、榮辱を思ふの秋にあらず。叙旨の優
渥なるに感泣恐肅し直ちに

略。御深思之程如何被爲在候哉、速に御垂諭奉願上候、隨而臣愚誠
を盡し微力を出し、聖心貫徹仕り、皇祚安全武運長久に趣候様周旋仕り
候は固より臣職分に御座候況してや聖心之深秘關白以下未御沙汰も
不被爲在儀臣却て御依頼を蒙り、聖徳山海難比恐懼至極奉存候、萬
々一も他聞漏洩等の儀は天神地祇に誓ひ斷て無御座候間乍憚聖慮安
思召被遊候様奉願上候恐惶恐惶頓首頓首。

附錄 帝。深厚なる御親任を會津公に賜ふ